大阪府埋蔵文化財調査報告1998－2

土師の里遺跡

――土師氏の墓域と集落の調査――

1999年3月
大阪府教育委員会

盾塚古墳（1992年度／Ⅳ区）

鞍塚古墳（1995年度／Ⅴ区）

はしがき

本書で報告します土師の里遺跡は、藤井寺市道明寺周辺に広がる遺跡です。さらに古代氏族土師氏の本貫地のひとつとして伝承も残る土地でもあります。

土師氏は土器作りのほか造墓にもかかわったといわれていますが、誉田御廟山古墳を筆頭とする古市古墳群の大型古墳の造営を考えると、その伝承の信憑性が感じ取れます。さらに土師の里遺跡では、古墳周辺に埴輪棺墓、木棺墓、土壙墓、火葬墓など様々な形態の墓を古墳時代から平安時代にかけて造っており、当該氏族集団がこの地で脈々と生活を営み続けていた様子を認めることができます。

この土師の里遺跡では、昭和30年に府営住宅建築に伴って盾塚・鞍塚・珠金塚の3古墳が発掘され、昭和40年代にはいると住宅建築や埋管設置などに伴う調査を続けてきました。さらに昭和62年度から府営道明寺南住宅の建替えに伴って広範囲に発掘調査を実施した結果、土師の里遺跡の全体像解明への大きな手掛かりを得ることができました。

こうした成果をおさめることができたのも、関係各位のご協力によるものであり、感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政にご理解とご協力をお願いいたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿野一美

例　言

1．本書は、府営道明寺南住宅建替えに伴う、藤井寺市道明寺所在、上師の里遺跡の発掘調査報告書である。
2．現地における発掘調査は、大阪府建築部住宅建設課（現・建築都市部住宅整備課）から依頼を受けた文化財保護課が昭和62・63年度（担当：三宅正浩）、平成３・４年度（担当：松村隆文）および平成７年度（担当：小浜成）に実施した。調査概要については概要報告がそれぞれ刊行されている。
3．遺物整理は平成９年度に資料係が実施し、報告書作成は、平成10年度に同係技師三木　弘を担当者として実施した。
4．本書の執筆・編集は、各概要報告に基づき三木が行った。
5．本書の執筆・編集にあたっては上田　広瀬雅信、技師　地村邦夫、同　井西貴子の全面的な助力を得た。
6．府営道明寺南住宅建替えに伴う調査成果のほか、遺跡を理解する参考としてこれまで文化財保護課が実施した周辺調査の成果も一部掲載した。
7．出土遺物および記録資料は大阪府教育委員会で保管している。
8．報告書作成にあたって、下記の方々および機関から助言、協力を得た。
記して感謝します。
山口拓也、山田幸弘
大阪府建築都市部住宅整備課、関西大学博物館、藤井寺市教育委員会

凡　例

1．遺構番号は混乱を避けるため、各調査概要で記されたものを用いた。
2．挿図中の方位は、磁北の場合はM.Nを冠し、それ以外はすべて座標北で示した。
3．本書におけるレベルはすべてT.P.値（東京湾標準潮位）である。
4．土色については基本的に小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』７版（1987）によった。
5．埴輪の調整技法の表現、時期区分などについては川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2（1978）による。

本 文 目 次

Ⅰ 遺跡を取りまく環境……1
第1節 遺跡周辺の環境……1
第2節 周辺の遺跡……6
Ⅱ 府営道明寺南住宅地区の調査成果……9
第1節 調査の経緯と経過……9
第2節 調査成果の概要……11
第3節 盾塚古墳の調査成果……13
第4節 鞍塚古墳の調査成果……38
第5節 助太山古墳の調査成果……50
第6節 小型方墳の調査……54
第7節 埴輪棺墓の調査……56
第8節 土壙墓・木棺墓・火葬墓などの調査……101
第9節 Ⅱ区・溝3の調査……119
第10節 中世の建物群……126
第11節 ポンプ室ほかの調査……128
第12節 出土遺物－土馬－……129
第13節 小結……133
Ⅲ 土師の里遺跡の調査……135
第1節 既往の調査……135
第2節 遺跡内所在古墳の調査……141
（1） 仲津山古墳……141
（2） 御曹司塚古墳……147
（3） 土師の里3号墳（道端古墳）……153
（4） 土師の里6号墳（塚穴古墳）……159
（5） 土師の里1号墳……161
（6） 土師の里2号墳……162
（7） 土師の里7号墳(珠金塚西古墳)……163
第3節 埴輪棺墓の調査……165
第4節 古墳時代集落の調査……169
第5節 土師寺周辺の調査……179
付 盾塚、鞍塚古墳ほか出土埴輪の胎土分析－X線回析試験及び化学分析試験－
（株）第四紀地質研究所 井上 巌……192
まとめ……199
引用・参考文献……207

表 目 次

第1表 既往の調査一覧……135～140
第2表 埴輪棺墓一覧……166～167
第3表 埴輪観察表……182～187
第4表 埴輪棺墓構成埴輪観察表……188～191
第5表 胎土性状表……195
第6表 化学分析表……195
第7表 タイプ分類一覧表……195

挿 図 目 次

第1図 土師の里遺跡の位置……1

第２図　遺跡周辺の自然地形……２
第３図　調査成果から復元される旧地形……３～４
第４図　土師の里遺跡と周辺の遺跡……７
第５図　土師の里遺跡・府営道明寺南地区の範囲……９
第６図　調査区位置……10
第７図　盾塚古墳　墳丘測量図（昭和30年）……13
第８図　盾塚古墳　調査区全体……15～16
第９図　盾塚古墳　東側くびれ部円筒埴輪列……18
第10図　盾塚古墳　東側くびれ部埴輪列の円筒埴輪……19
第11図　盾塚古墳　造出部上円筒埴輪列・円筒埴輪……20
第12図　盾塚古墳　造出部上埴輪列の円筒埴輪……21
第13図　盾塚古墳　西側くびれ部円筒埴輪列・円筒埴輪……22
第14図　盾塚古墳　周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪（１）……23
第15図　盾塚古墳　周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪（２）……24
第16図　盾塚古墳　埴輪列の円筒埴輪底部拓影……25
第17図　盾塚古墳　周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪拓影……26
第18図　盾塚古墳　周濠内堆積土……28
第19図　盾塚古墳　墳形復元の一案……30
第20図　盾塚古墳　墳形復元と遺構実態との比較……31
第21図　盾塚古墳　周濠出土の形象埴輪（１）……33
第22図　盾塚古墳　周濠出土の形象埴輪（２）……34
第23図　盾塚古墳　周濠出土の形象埴輪（３）……35
第24図　盾塚古墳　周濠出土の形象埴輪（４）……36
第25図　盾塚古墳　周濠出土の円筒埴輪ヘラ描拓影……37
第26図　鞍塚古墳　墳丘測量図（昭和30年）……38
第27図　鞍塚古墳　調査区全体……39
第28図　鞍塚古墳　周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪（１）……42
第29図　鞍塚古墳　周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪（２）・朝顔形埴輪、底部拓影……43
第30図　鞍塚古墳　周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪拓影（１）……44
第31図　鞍塚古墳　周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪拓影（２）……45
第32図　鞍塚古墳　周濠内堆積土……46
第33図　鞍塚古墳　墳形復元……47
第34図　鞍塚古墳　周濠出土の形象埴輪……49
第35図　助太山古墳　周濠内堆積土……50
第36図　助太山古墳　調査区全体……51
第37図　助太山古墳　周濠内出土遺物、拓影……53
第38図　小型方墳（Ⅳ区）……54
第39図　小型方墳（Ⅴ区）、周濠出土円筒埴輪……55
第40図　埴輪棺墓の分布……57～58
第41図　Ⅰ区　墓２・墓４・墓５、構成埴輪……59
第42図　Ⅰ区　墓２構成埴輪……60
第43図　Ⅰ区　墓23、構成埴輪……62
第44図　Ⅰ区　墓27、構成埴輪……63
第45図　Ⅱ区　墓28、構成埴輪（１）……64
第46図　Ⅱ区　墓28構成埴輪（２）……65
第47図　Ⅱ区　墓30、構成埴輪……67
第48図　Ⅱ区　墓31・墓34、構成埴輪……68
第49図　Ⅱ区　墓35、構成埴輪……69
第50図　Ⅱ区　墓36……70
第51図　Ⅱ区　墓36、構成埴輪……71

第52図　Ⅱ区　墓29、構成墳輪……72
第53図　Ⅲ区　円筒棺１、構成墳輪・鶏形墳輪……73
第54図　Ⅲ区　円筒棺２、構成墳輪（１）……74
第55図　Ⅲ区　円筒棺２構成墳輪（２）……75
第56図　Ⅲ区　円筒棺３……76
第57図　Ⅲ区　円筒棺３構成墳輪……77
第58図　Ⅲ区　円筒棺４、構成墳輪……78
第59図　Ⅲ区　円筒棺５、構成墳輪……79
第60図　Ⅲ区　円筒棺５出土遺物……80
第61図　Ⅲ区　円筒棺６、構成墳輪・出土遺物……81
第62図　Ⅲ区　円筒棺７、構成墳輪・出土遺物……82
第63図　Ⅲ区　円筒棺８、構成墳輪……83
第64図　Ⅲ区　円筒棺９、構成墳輪……84
第65図　Ⅲ区　円筒棺10、構成墳輪……85
第66図　Ⅲ区　円筒棺11……86
第67図　Ⅳ区　円筒棺１、構成墳輪（１）……87
第68図　Ⅳ区　円筒棺１構成墳輪（２）……88
第69図　Ⅳ区　円筒棺２、構成墳輪（１）……89
第70図　Ⅳ区　円筒棺２構成墳輪（２）……90
第71図　Ⅳ区　円筒棺３、構成墳輪……91
第72図　Ⅳ区　円筒棺４、構成墳輪……92
第73図　Ⅳ区　円筒棺４副葬鉄鏃……93
第74図　Ⅳ区　円筒棺５、構成墳輪……94
第75図　Ⅴ区　墳輪棺墓１、構成墳輪（１）……95
第76図　Ⅴ区　墳輪棺墓１構成墳輪（２）……96
第77図　Ⅴ区　墳輪棺墓２、構成囲形墳輪（１）……97
第78図　Ⅴ区　墳輪棺墓２構成囲形墳輪（２）……98
第79図　土壙墓・木棺墓・土器棺墓・火葬墓の分布……99～100
第80図　Ⅰ区　墓３・墓６、Ⅱ区　墓32・墓33、出土遺物……102
第81図　Ⅲ区　土壙墓１・土壙墓２・土壙墓４・土壙墓３、出土遺物……103
第82図　Ⅴ区　土壙墓、出土遺物……105
第83図　Ⅰ区　墓１、副葬石釧帯……106
第84図　Ⅰ区　墓１出土鉄釘……107
第85図　Ⅰ区　墓９、出土遺物……107
第86図　Ⅴ区　木棺墓……108
第87図　Ⅴ区　木棺墓副葬鉄剣……109
第88図　Ⅰ区　墓７、出土遺物……110
第89図　Ⅰ区　墓20・墓14・墓25、出土遺物……111
第90図　Ⅲ区　土器棺１・土器棺２、出土遺物……112
第91図　Ⅳ区　土器棺墓、出土遺物……113
第92図　Ⅰ区　墓15・墓22・墓24、Ⅲ区　火葬墓、Ⅳ区　火葬墓、出土遺物……115
第93図　Ⅰ区　墓17・墓18、出土遺物……117
第94図　Ⅱ区　溝３……119
第95図　Ⅱ区　溝３出土遺物……120
第96図　Ⅱ区　溝３墳輪出土状況……120
第97図　Ⅱ区　溝３出土船形埴輪……121～122
第98図　Ⅱ区　溝３出土形象埴輪（１）……123
第99図　Ⅱ区　溝３出土形象埴輪（２）……124
第100図　Ⅱ区　溝３出土円筒埴輪・朝顔形埴輪……125
第101図　Ⅳ区　中世の建物群……127

第102図　ポンプ室ほかの調査位置……128
第103図　90-⑤区出土衣蓋形埴輪……128
第104図　Ⅳ区出土土馬……129
第105図　Ⅴ区出土土馬……130
第106図　土師の里遺跡既往の調査区位置……133～134
第107図　既往の調査位置（道明寺１丁目）……136
第108図　既往の調査位置（道明寺２丁目）……137
第109図　既往の調査位置（道明寺４丁目）……138
第110図　既往の調査位置（沢田４丁目、古室２丁目）……139
第111図　既往の調査位置（道明寺５、６丁目）……140
第112図　既往の調査位置（仲津山古墳周辺）……141
第113図　仲津山古墳外提埴輪列……142
第114図　仲津山古墳外提埴輪列（81-10区）　円筒埴輪……143
第115図　仲津山古墳外提埴輪列（81-10区・85-３区）　円筒埴輪・形象埴輪……144
第116図　仲津山古墳外提埴輪列（81-10区）　円筒埴輪底部拓影……145
第117図　仲津山古墳外提埴輪列（81-10区）　円筒埴輪拓影……146
第118図　御曹司塚古墳　調査区位置……147
第119図　御曹司塚古墳　周濠内堆積土……148
第120図　御曹司塚古墳　周濠出土円筒埴輪……149
第121図　御曹司塚古墳　周濠出土円筒埴輪拓影（１）……150
第122図　御曹司塚古墳　周濠出土円筒埴輪拓影（２）……151
第123図　御曹司塚古墳　周濠出土円筒埴輪拓影（３）……152
第124図　土師の里３号墳　調査区位置……153
第125図　土師の里３号墳　１・２・３号埴輪棺墓……154
第126図　土師の里３号墳　１・２号埴輪棺墓構成埴輪……155
第127図　土師の里３号墳　１号埴輪棺墓構成埴輪……156
第128図　土師の里３号墳　２・３号埴輪棺墓構成埴輪……157
第129図　土師の里３号墳　３号埴輪棺墓構成埴輪……158
第130図　土師の里６号墳　調査区位置、形象埴輪（１）……159
第131図　土師の里６号墳　形象埴輪（２）……160
第132図　土師の里１号墳　石室、出土遺物……161
第133図　土師の里２号墳　埴輪棺墓、出土遺物……162
第134図　土師の里７号墳……163
第135図　土師の里７号墳　周濠出土円筒埴輪・形象埴輪……164
第136図　85-２区検出埴輪棺墓……165
第137図　土師の里８号墳……165
第138図　土師の里遺跡および周辺の埴輪棺墓検出地点……168
第139図　古墳時代住居検出調査区、77-24区全体概念、住居出土遺物（１）……170
第140図　77-24区　住居出土遺物（２）……171
第141図　79-17区　全体平面、出土遺物……172
第142図　76・77-22・78-６・78-12・82-14区　全体平面、出土遺物……173
第143図　79-15区　全体平面……174
第144図　79-15区　１・２号住居出土遺物……174
第145図　79-15区　３・４号住居出土遺物……175
第146図　79-15区　５号住居出土遺物……176
第147図　79-15区　９・10号住居出土遺物……177
第148図　79-15区　６・８号住居出土遺物……178
第149図　土師寺関連遺構検出調査区、78-３区全体平面……179
第150図　78-５・80-６・80-９・84-２区　全体平面……180
第151図　Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム……196

第152図　Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム……196
第153図　SiO2-Al2O3図……197
第154図　Fe2O3-MgO図……197
第155図　K2O-CaO図……198
第156図　Qt-Pl図……198
第157図　十師の里遺跡・古墳時代遺構分布概念……204

図　版　目　次

図版表紙　乗馬人物(Ⅳ区・円筒棺３　71-１)
図版１　87・88年度調査区（Ⅰ・Ⅱ区）
　１　87・88年度調査区（Ⅰ区）全景（東から）　２　87・89年度調査区（Ⅱ区）全景（東から）
図版２　91年度調査区（Ⅲ区）
　１　調査区全景（垂直）　２　埴輪棺墓群全景（北西から）
図版３　92年度調査区（Ⅳ区）
　１　調査区全景（東から）　２　調査区全景（北から）
図版４　95年度調査区（Ⅴ区）
　１　調査区全景（垂直）　２　調査区全景（北から）
図版５　盾塚古墳と円筒埴輪列・葺石
　１　検出状況（東から）　２　円筒埴輪列と葺石（南から）
図版６　盾塚古墳遺出部
　１　遺出部全景（西から）　２　遺出部、葺石（西から）
図版７　盾塚古墳葺石
　１　検出状況（西から）　２　検出状況（南から）
図版８　盾塚古墳円筒埴輪列
　１　円筒埴輪列（西から）　２　円筒埴輪列（北から）　３　円筒埴輪列（南から）
図版９　鞍塚古墳
　１　全景（東から）　２　全景（南から）
図版10　鞍塚古墳葺石
　１　検出状況（南から）　２　検出状況（南から）
図版11　Ⅰ・Ⅱ区埴輪棺墓
　１　Ⅱ区・墓28（南西から）　２　Ⅰ区・墓23（西から）　３　Ⅰ区・墓27（南東から）
図版12　Ⅰ・Ⅱ区埴輪棺墓
　１　Ⅰ区・墓２（南南西から）　２　Ⅱ区・墓30（東から）　３　Ⅱ区・墓３６（西から）
図版13　Ⅰ区土器棺墓
　１　墓７（西から）　２　墓20（北西から）　３　墓14（南東から）
図版14　Ⅰ区木棺墓
　１　墓１（南から）　２　墓１石鋳帯出土状況（南から）　３　墓９（北から）
図版15　Ⅱ区溝３
　１　全景（垂直）　２　全景（南西から）　３　埴輪出土状況、墓29（南から）
図版16　Ⅲ区埴輪棺墓
　１　円筒棺２（北西から）　２　円筒棺４（西から）
　３上　円筒棺４西小口部（北から）　３下　円筒棺４東小口部（東から）
図版17　Ⅲ区埴輪棺墓
　１　円筒棺３（北から）　２　円筒棺９（北から）　３　円筒棺10（北から）
図版18　Ⅲ区埴輪棺墓
　１　円筒棺１（西から）　２　円筒棺１鶏形埴輪出土状況（南から）
　３　円筒棺５（北から）　４　円筒棺７（北から）
図版19　Ⅲ区土器棺墓、土壙墓、火葬墓
　１上　土器棺墓１（北から）　１下　土器棺墓２（南から）

2　土壙墓1（北から）　3　火葬墓（南から）
図版20　Ⅳ区埴輪棺墓
1　円筒棺1（南から）　2　円筒棺3（南から）　3　円筒棺5（東から）　4　円筒棺4（西から）図版21　Ⅳ区埴輪棺墓・土器棺墓・火葬墓
1　円筒棺2（南から）　2　土器棺墓（西から）　3　火葬墓（東から）
図版22　Ⅴ区埴輪棺墓
1　埴輪棺墓1（南西から）　2　埴輪棺墓2（南から）
図版23　Ⅴ区木棺墓・小型方墳・土壙墓
1　木棺墓（南西から）　2　小型方墳（北から）　3　土壙墓（北東から）　4　土壙墓副葬土師器
図版24　仲津山古墳、古墳時代の集落、土師の里3号墳
1　81-10区仲津山古墳外堤円筒埴輪列（東から）　2　81-10区仲津山古墳外堤円筒埴輪列（北から）
3　79-15区古墳時代の集落（南から）4　79-1区土師の里3号墳1・2・3号埴輪棺墓（北から）
図版25　盾塚古墳周濠出土円筒埴輪
周濠出土円筒埴輪
図版26　鞍塚古墳周濠出土埴輪
1　円筒埴輪、朝顔形埴輪　2　円筒埴輪
図版27　Ⅰ・Ⅱ区埴輪棺墓構成埴輪
左　Ⅱ区墓28構成埴輪　右上　Ⅰ区墓27構成埴輪　右下　Ⅰ区墓5構成埴輪
図版28　Ⅱ区埴輪棺墓構成埴輪
左上　墓36構成埴輪　右上　墓30構成埴輪　左下　墓35構成埴輪　右下　墓31構成埴輪
図版29　Ⅰ・Ⅱ区・90-⑤区埴輪棺墓構成埴輪
左上　Ⅰ区・墓4構成埴輪　左中　Ⅰ区・墓23構成埴輪　左下　Ⅱ区・墓29構成埴輪
右上　Ⅰ区・墓2構成埴輪　右下　90-⑤区・墓29構成埴輪
図版30　Ⅲ区埴輪棺墓構成埴輪
左　円筒棺3構成埴輪　右上　円筒棺4構成埴輪　右下　円筒棺10構成埴輪
図版31　Ⅲ区埴輪棺墓構成埴輪
左　円筒棺9構成埴輪　右上　円筒棺5構成埴輪　右下　円筒棺8構成埴輪
図版32　Ⅲ区埴輪棺墓構成埴輪
左　円筒棺5構成埴輪　右上　円筒棺2構成埴輪　右中　円筒棺5構成埴輪
右下　円筒棺6構成埴輪
図版33　Ⅳ区埴輪棺墓構成埴輪
左　円筒棺1構成埴輪　右上　円筒棺3構成埴輪　右下　円筒棺1構成埴輪直弧文ヘラ描
図版34　Ⅳ区埴輪棺墓構成埴輪
左上　円筒棺5構成埴輪　左下　円筒棺4構成埴輪　右　円筒棺2構成埴輪
図版35　Ⅴ区埴輪棺墓2構成埴輪
朝形埴輪
図版36　仲津山古墳外堤埴輪列円筒埴輪
外堤埴輪列円筒埴輪
図版37　御曹司塚古墳周濠出土円筒埴輪
周濠出土円筒埴輪
図版38　土師の里3号墳埴輪棺墓構成埴輪
上　1号埴輪棺墓構成埴輪　左下　2号埴輪棺墓構成埴輪　右下　3号埴輪棺墓構成埴輪
図版39　土師の甲3号墳埴輪棺墓構成埴輪
左上　1号埴輪棺墓構成埴輪　左下　3号埴輪棺墓構成埴輪　右上　3号埴輪棺墓構成埴輪
右下　1号埴輪棺墓構成埴輪

I　遺跡を取りまく環境

第1節　遺跡周辺の環境

（1）遺跡周辺の環境

上師の里遺跡は藤井寺市道明寺1・2丁目、4～6丁目、国府3丁目、沢田4丁目、古室2丁目に広がる遺跡である。遺跡の範囲は東西・南北とも約900mを測る。

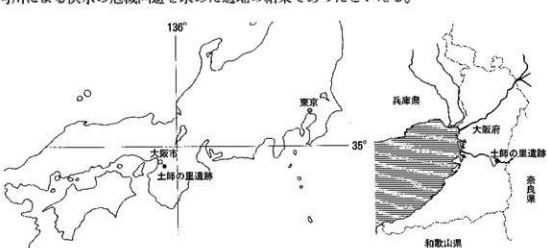
遺跡の形成時期は旧石器時代から近世にまで及んでいる。ただし遺構検出面は、4面に及ぶ地点もあるものの、多くの地点では地山上の1面だけであり、地山上堆積層の形成があまり発達しない地形であることがわかる。

この土師の里遺跡は石川の左岸に位置している。また、奈良盆地に源を発し、金剛・生駒山系を切り込んで河内平野に流れ出る大和川が石川と合流する地点から1.3km南西方向にある。大和川は江戸時代・宝永元年（1704年）に石川との合流地点から西方に付け変えられたが、それ以前は合流地点から分流しながらさらに北西に流れ、肥沃な沖積平野を形成しながら淀川に流れ込んでいった。

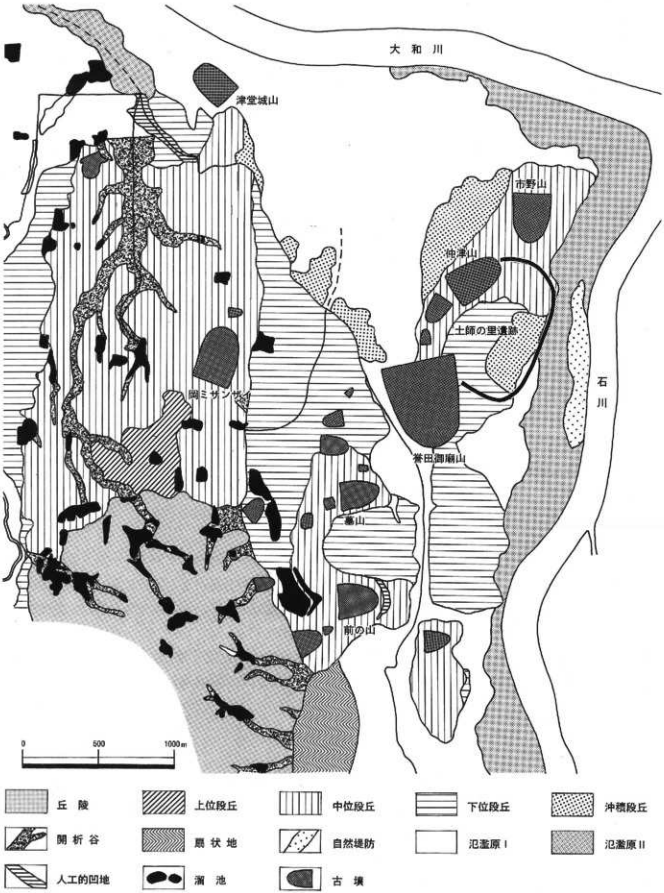
遺跡の大半は羽曳野丘陵から派生したようにみえる国府台地と呼ばれている洪積段丘上にのっている。この国府台地は高度が異なる中位・下位・沖積段丘面からなっているが、仲津山古墳の南側、誉田御廟山古墳の東側では中位段丘面が西方に狭まり、その東に下位・沖積段丘面が広がっている。土師の里遺跡はその一帯にあって、3段丘面上に広がりをみせている。ただし、仲津山古墳などがのる中位段丘面は遺跡の北から西側の縁辺に広がっているのみで、遺跡は主として西半が下位段丘面、東半が沖積段丘面上にある。府営道明寺南住宅地区は下位段丘面上に位置している。ただ、下位段丘面上にあっても、後述するように地形は平坦ではなく、調査地区の東西両縁辺に谷状地形が認められ、両方向に下降している。さらにこうした谷状地形や小支谷による地形の下降は、遺跡全体の中でも地点的にみられる。

遺跡と石川との間には氾濫原と石川左岸に発達した自然堤防が広がっている。一方、遺跡の東側では、大鳥塚古墳や古室山古墳が中位段丘面上に位置し、沖積段丘面がその縁辺に沿いながら南方に狭まっていき、さらに西は氾濫原となっている。この氾濫原は石川沿いのそれとは異なり、歴史時代においては石川の氾濫をあまり受けなかった範囲とみられている。

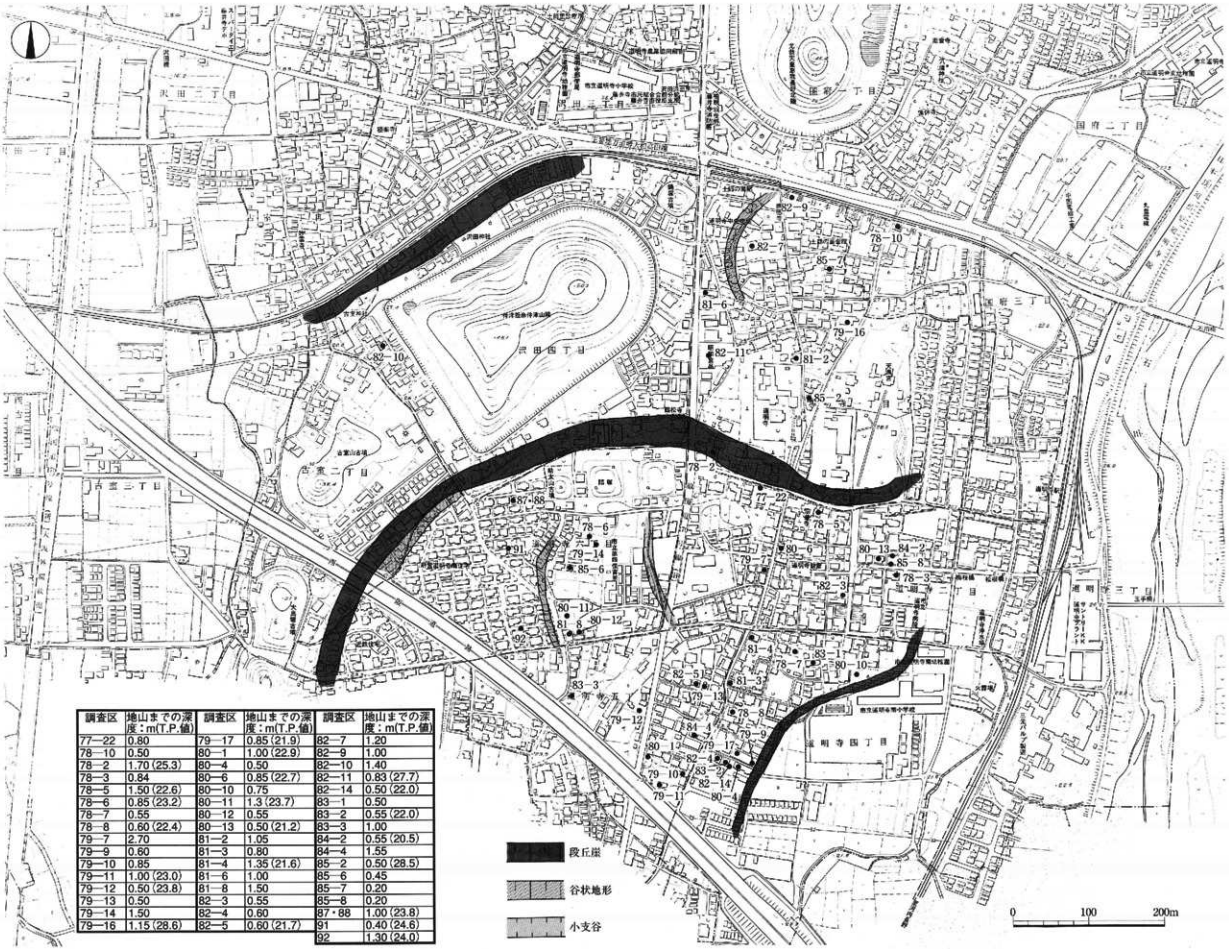
土師の里遺跡における人間活動の形成は、国府台地先端の中位段丘面上にのる国府遺跡ほどではないが、河川による洪水の危機回避を求めた適地の結果であったといえる。



第1図　土師の里遺跡の位置



第2図　遺跡周辺の自然地形



調査区	地山までの深度：m(T.P.値)	調査区	地山までの深度：m(T.P.値)	調査区	地山までの深度：m(T.P.値)
77−22	0.80	79−17	0.85 (21.9)	82−7	1.20
78−10	0.50	80−1	1.00 (22.9)	82−9	1.00
78−2	1.70 (25.3)	80−4	0.50	82−10	1.40
78−3	0.84	80−6	0.85 (22.7)	82−11	0.83 (27.7)
78−5	1.50 (22.6)	80−10	0.75	82−14	0.50 (22.0)
78−6	0.85 (23.2)	80−11	1.3 (23.7)	83−1	0.50
78−7	0.55	80−12	0.55	83−2	0.55 (22.0)
78−8	0.60 (22.4)	80−13	0.50 (21.2)	83−3	1.00
79−7	2.70	81−2	1.05	84−2	0.55 (20.5)
79−9	0.60	81−3	0.80	84−4	1.55
79−10	0.85	81−4	1.35 (21.6)	85−2	0.50 (28.5)
79−11	1.00 (23.0)	81−6	1.00	85−6	0.45
79−12	0.50 (23.8)	81−8	1.50	85−7	0.20
79−13	0.50	82−3	0.55	85−8	0.20
79−14	1.50	82−4	0.60	87・88	1.00 (23.8)
79−16	1.15 (28.6)	82−5	0.60 (21.7)	91	0.40 (24.6)
				92	1.30 (24.0)

第3図　調査成果から復元される旧地形

（2）調査成果からみた旧地形

土師の里遺跡は既述のように、中位・下位・沖積段丘面にわたって位置している。中・下位段丘境の段丘崖は道明寺天満宮・道明寺の南から三ツ塚古墳の北、そして府営道明寺南住宅の西にかけて延びており、下位・沖積段丘境の段丘崖は道明寺南小学校の南西から市立道明寺病院の東にかけて延びている。

調査区の現地表から地山面までの深度についてみると、隣接する調査区ではほぼ等しい深度ではあるものの、近・現代の盛土や切土がなされているため、同一段丘面上でもかなり異なっている。ただ、78—2区で1.7m、78—5区で1.5mを測り、中・下位段丘境の崖線付近では堆積層が厚いこと、80—10区で0.75m、80—4区で0.55m、79—9区で0.6mを測り、下位段丘の縁辺付近では堆積層が薄いことが傾向として窺われる。

地山面の標高については全ての調査区で算出されているわけではなく、点在的にしか求められないが、大略の傾向は捉えられる。

中位段丘面上が遺跡内では当然最も高いが、その内でも若干の違いがあり、79—16区で28.6m、85—2区で28.5mを測るのに対し、82—11区では27.7mである。このことから、旧国道170号線に沿って南北方向の小支谷が入り込んでいる可能性が考えられる。またさらに、82—7区の西側にも東方に下降する谷状地形が存在する。

下位段丘面では府営道明寺南住宅地区が24.6～23.8mを測り、下位段丘面の内では最も高い場所にあたっている。発掘調査によって、この地区の東・西両側には谷状地形が存在し、それぞれ調査区外方向に下降することが判明しており、この付近が若干の高台になっていたといえよう。

府営道明寺南住宅地区の東方についてみると、78—6区で23.2m、80—11区で23.7m、79—12区で23.8m、80—6区で22.7m、84—2区で20.5m、81—4区で21.6mを測り、東から南にかけて広がる沖積段丘面に向かって全体が緩やかな下降状況を示している。また三ツ塚古墳中の八島塚古墳と中山塚古墳の間に向かう小支谷の存在が予測されているが、その南延長にあたる82—5区は21.7mを測り、周囲より若干低くなっている。このことは、その小支谷の存在を裏付ける状況かも知れない。さらに80—1区で22.9m、79—11区で23.0mであるのに対して、83—2区で22.0m、79—17区で21.9mを測り、83—2区・79—17区のほうが下位段丘面の縁辺に若干近いとはいえ、地山面が低めであることも指摘できる。これもまた、先の82—5区からの下がり気味の地形が南東方向に延びていることを示しているのかも知れない。

古墳時代以降、ことに中・近世代に地山面も含めた土地改変がこの土師の里遺跡内の幾つもの地点で行われたことはこれまでの調査から明らかである。したがって後出的な地山面の下降もあったといえる。ただ、大まかには北東—南西に延びる痩せ尾根状の中位段丘面は仲津山古墳・古室山古墳の中軸を結ぶラインを頂辺として下位・沖積段丘面方向に緩やかに下降し、段丘崖に向かって派生する小支谷が幾筋か存在したとみられる下位段丘面は東から南方向に緩やかに下降するといえる。

さらに、下位段丘面の内でも府営道明寺南住宅地区付近は、1m弱の比高差をもって周囲より高かったとみられる。このように盾塚古墳や鞍塚古墳、さらに各種の埋葬施設が広がる地点は、下位段丘面上のなかでも良好な場所であったといえる。

第2節　周辺の遺跡

土師の里遺跡およびその周辺一帯は古市古墳群の中核を占め、大小の古墳が密集して築造された地域である。しかし古墳時代に留まらず、縄文時代から近世までの遺構が発見され、さらに旧石器時代から近世までの遺物も出土している。さらに、周辺の遺跡でも同様にさまざまな時代の遺構・遺物が検出されている。

旧石器時代

国府型ナイフ形石器の名称が与えられたナイフ形石器の標識遺跡である国府遺跡、同じく国府台地上に位置する土師の里遺跡、国府台地に一部広がりをもつ林遺跡で石器が多数出土している。さらに羽曳野台地では、下位段丘面上に位置するはざみ山遺跡において、当該時代の住居跡が検出されている。同じく羽曳野台地上にある誉田白鳥遺跡の西部を占める峯鳥園遺跡では、良好な石器製作ユニットが確認され、青山遺跡でも同様にユニットが発見されている。

これらの遺跡は「羽曳野台地遺跡群」と称されており、遺跡形成の背景にはサヌカイトの産出地である二上山と隣接していることがあるといえる。このほかに、中位段丘面上の北岡遺跡や葛井寺遺跡、氾濫原上の西大井遺跡でも石器が出土している。

縄文時代

国府台地およびその周辺地域において、当該時代の遺構・遺物の分布が濃厚である。まずその中心を占める国府遺跡では、多くの屈葬人骨が発見され、その中には硬玉製抉状耳飾や骨角製品を身に付けた事例も認められる。出土土器の量からみると、国府遺跡の形成は前期と晩期にピークがあったといえそうである。一方、土師の里遺跡では土器棺墓や晩期の土器をはじめとする遺物が発見されており、林遺跡でも後期の住居跡や遺物が発見されている。また、これらの遺跡の北側の氾濫原上に位置する船橋遺跡は、「船橋式土器」とされる晩期の土器の標識遺跡となっている。このほか、西大井遺跡、北岡遺跡、葛井寺遺跡でも土器や石器の出土が確認されている。

このように旧石器時代では羽曳野台地が遺跡分布の中心であったのに対し、縄文時代になると、国府台地上に生活域が移ったかのような様相を示している。

弥生時代

弥生時代の遺跡については、国府台地およびその周辺の沖積地にかけて広がりが顕著である。国府遺跡では、前期から後期までの遺構・遺物が発見されており、弥生時代全期を通じて集落が形成され

1．市野山古墳　2．仲津山古墳　3．古室山古墳　4．大鳥塚古墳　5．誉田御廟山古墳
6．三ツ塚古墳　7．鞍塚古墳　8．盾塚古墳　9．珠金塚古墳　10．津堂城山古墳
11．岡ミサンザイ古墳　12．はざみ山古墳　13．野中宮山古墳　14．墓山古墳　15．ボケ山古墳
16．峰ヶ塚古墳　17．前の山古墳　18．船橋遺跡　19．国府遺跡　20．林遺跡
21．土師の里遺跡　22．古室山遺跡　23．茶山遺跡　24．北岡遺跡　25．葛井寺遺跡
26．西古室遺跡　27．はざみ山遺跡　28．土師の里埴輪窯跡群　29．誉田白鳥埴輪窯跡群

第４図　土師の里遺跡と周辺の遺跡

ていたとみられる。また遺跡北西部での遺物包含層は厚い。土師の里遺跡、林遺跡、船橋遺跡、はざみ山遺跡でも弥生時代の遺構・遺物が検出されており、さらに津堂城山古墳の東に位置する小山平塚遺跡、大和川右岸で小山平塚遺跡の対岸にあたる大正橋遺跡、同じく右岸で西大井遺跡の対岸の川北遺跡など河床や氾濫原上に所在する遺跡でも当該時代の遺構・遺物が発見されている。

このように弥生時代の集落は台地縁辺から沖積地にかけての範囲を選地しており、縄文時代とは集落位置を若干異にしている。

古墳時代

石川右岸の玉手山丘陵上の集中的な古墳築造が終了するのと入れ替わるように、津堂城山古墳をはじめとして約100基の古墳が南北4km、東西3kmの範囲に築造された。この古市古墳群には、全長425mの誉田御廟山古墳を筆頭に、全長190mを超える古墳が7基、100～190m規模の古墳が8基存在している。一方、20～30mほどの規模の帆立貝式前方後円墳・円墳・方墳からなる林古墳群、全長70mの前方後円墳をはじめ33mの前方後円墳、1辺7～20mほどの規模の方墳からなる青山古墳群など、中・小規模の古墳のまとまりも古墳群中に存在する。

さらにこれらの古墳に樹立された埴輪を焼成した窯跡群が土師の里遺跡、誉田白鳥遺跡、野々上遺跡で発見されている。

集落跡が確認されているのは、国府台地およびその周辺では国府遺跡、土師の里遺跡、林遺跡、船橋遺跡が挙がる。また、羽曳野台地では下位段丘面上にはざみ山遺跡があり、中位段丘面上では青山遺跡がある。その他、氾濫原上には小山遺跡、小山平塚遺跡、津堂遺跡、川北遺跡などがあり、弥生時代よりも広範な集落選地が行われている。

古代

飛鳥～奈良時代には羽曳野丘陵縁辺や生駒山南西麓に衣縫廃寺、上師寺、船橋廃寺、拝志廃寺、葛井寺、大井廃寺、津堂廃寺、野中寺などの古代寺院が多く建立された。さらにその周辺では掘立柱建物群が形成され始める。

集落跡では、土師の里遺跡、はざみ山遺跡、林遺跡、国府遺跡、北岡遺跡、葛井寺遺跡、西古室遺跡などが挙がり、多くの集落が段丘面上に再び移ってくる。これらの遺跡の中で、国府遺跡は河内国府が所在したとされる遺跡である。しかし、中心部が未調査のため詳細は不明である。また北岡遺跡では8世紀代の企画性の高い大型掘立柱建物群の存在が確認されているが、全体の様相については不明である。いずれにしても、古墳時代に比べ、集落密度はかなり増しているといえる。

平安時代になると、遺跡により集落展開に若干の差異がみられる。はざみ山遺跡では、継続した集落形成がみられるが、北岡遺跡では集落の縮小する傾向が認められ、また葛井寺遺跡では集落が拡大する様相を示している。

中世

土師の里遺跡のほか、津堂遺跡、葛井寺遺跡、国府遺跡、はざみ山遺跡、西古室遺跡などで遺構・遺物が発見されている。津堂遺跡では、1辺約108m（1町）四方の堀割りが検出され、在地領主の居館跡とみられている。また西古室遺跡では、鎌倉時代初頭の建物跡が確認されている。ただし、総体的には前代に比べて遺跡の数が減少し、集落規模も縮小しているようである。

Ⅱ　府営道明寺南住宅地区の調査成果

第1節　調査の経緯と経過

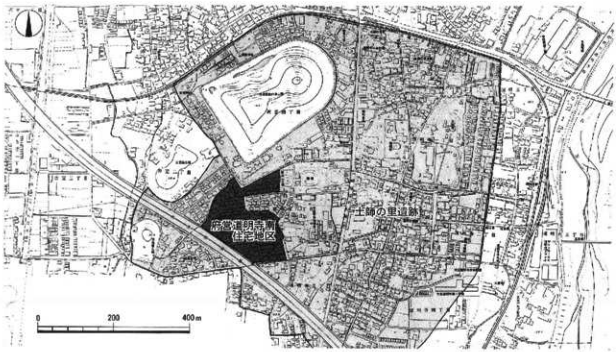
府営道明寺南住宅建替えに伴う発掘調査は、大阪府建築部住宅建設課（現・建築都市部住宅整備課）の依頼を受けて1987年度より実施した。

府営道明寺南住宅は戦後しばらくして建設された木造住宅であったが、その老朽化が著しいため1989年度より漸次中層鉄筋コンクリート造住宅に建替えることが住宅建設課により計画された。しかし、住宅敷地全体が周知の遺跡である「土師の里遺跡」に含まれていること、1955年に府営住宅建設に伴って埋葬施設などが発掘調査された盾塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳が敷地内に存在していること、さらに墳丘部分が国史跡に指定されている助太山古墳の周濠が敷地内に延びていると考えられることから、1987年4月より発掘調査および保存の方法について住宅建設課と協議を重ねた。

その結果、盾塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳および助太山古墳の周濠範囲確認のため試掘調査を実施することとなり、1987年7月に10箇所のトレンチを設定して調査を行い、鞍塚古墳と助太山古墳の周濠を検出したとともに、盾塚古墳と珠金塚古墳の現状でのおおよその位置を確認した。この成果をもとに住宅建設課と協議を行った結果、上記4古墳の保存を前提とした全体設計がなされ、住宅棟の建設位置が変更された。さらに盾塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳の墳丘・周濠範囲の確認についても、引き続き継続的に調査を行うこととなった。

住宅地北側にあたる第1期住宅建設予定地の発掘調査については、Ⅰ区東半を1988年2～3月に、Ⅰ区西半とⅡ区を1988年7月～1989年3月の2時期にわけて実施した。調査区内に存在する鞍塚古墳の周濠については、範囲確認のために計3本のトレンチを設定して調査を行った以外、保存区域として発掘調査域から外した。

また、1987年度の発掘調査と平行して、珠金塚古墳と盾塚古墳の範囲確認のためにトレンチを設定



第5図　土師の里遺跡・府営道明寺南住宅地区の範囲

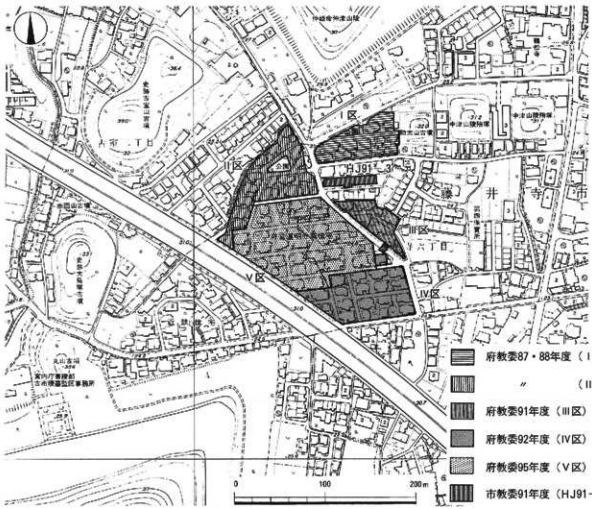
して調査を行った。なお、調査区仮囲いの門扉部分やポンプ室部分については次年度以降に調査を実施することとし、翌1990年度に行った。この調査成果については第11節で述べる。

住宅地の東側にあたる第2期住宅建設予定地の発掘調査については、1991年9月～1992年2月にかけて実施した。また発掘調査と併行して、第3期住宅建設予定地にかかる盾塚古墳前方部および周濠の範囲確認のため、トレンチを設定して調査を行った。この結果に基づいて、盾塚古墳の保存を前提として住宅棟の配置が改めて計画されることとなった。

住宅地の南側にあたる第3期住宅建設予定地の発掘調査は、1992年8月～1993年3月に実施した。この調査により盾塚古墳の前方部から東側くびれ部および後円部の一部を検出した。この成果を受けて、集会棟建設予定地を盾塚古墳周濠にかからない東方に移し、かつ周濠も含めた古墳の範囲を公園として保存することが決定した。

住宅地のほぼ中央にあたる第4期住宅建設予定地の発掘調査は、1995年8月～1996年3月に実施した。調査対象は、盾塚古墳・鞍塚古墳の墳丘部分の保存のため、残る住宅敷地の西半分となった。また盾塚古墳および鞍塚古墳の周濠範囲を捉えるため、トレンチ調査も併行して実施した。

5箇年度にわたる府営道明寺南住宅の建替えに伴う発掘調査の成果については以下に報告するが、多くの新たな知見を得たとともに、住宅の中央に位置する盾塚古墳と鞍塚古墳の墳丘・周濠が住宅棟などの建設範囲から外され、保存されることとなった点を改めて評価しておく必要があろう。



第6図　調査区位置

第2節　調査成果の概要

（Ⅰ区）

1987・88年度に一宅正浩を担当者として調査を実施した。調査区は府営道明寺南住宅の北側にあたる。調査面積は2,670㎡である。

検出遺構には、助太山古墳周濠の一部、弥生時代の土壙墓2基と溝1条、古墳時代およびそれ以降の埴輪棺墓5基、土壙墓2基、木棺墓2基、上器棺墓3基、火葬墓14基、溝1条、土坑（土壙墓を含む）および小穴231基があり、ほかに中・近世の井戸、耕作痕などもある。

調査区の東端で助太山古墳の周濠が検出され、また溝1条が北辺に位置するほかは、調査区東半では木棺墓1基・埴輪棺墓3基・上壙墓1基および若干の土坑と小穴が2箇所のまとまりをもって存在しているにすぎない。

これに対し、調査区西半においては、その他残余の遺構が密集しており、東半と対照的な様相を呈している。この調査区西半に所在する土坑の多くは、7世紀代以降に形成された土壙墓の可能性が指摘されている。このようにⅠ区では多様な埋葬施設が認められる点に特徴がある。

出土遺物には、弥生土器・上師器・須恵器・埴輪・陶器・磁器・瓦があり、そのほか石製品（石銙帯など）、金属製品（釘など）、木製品も出土している。このうち石銙帯は木棺墓の副葬品、釘は木棺の固定材である。

（Ⅱ区）

1988年度に三宅を担当者として調査を実施した。調査区は府営道明寺南住宅の北側にあたる。調査面積は3,083㎡である。

検出遺構には、鞍塚古墳の周濠の一部をはじめ、弥生時代の溝1条、古墳時代およびそれ以降の埴輪棺墓7基、土壙墓2基、方墳の周濠とみられる溝、土坑、小穴、および中・近世の井戸、溝、杭列、耕作痕などがある。

また調査区西辺に沿って、西方に下降する谷状地形も認められた。各遺構はこの谷状地形の縁辺に沿うように群集しているが、時代や遺構の種類による偏在性は認められない。

鞍塚古墳の周濠は、設定されたトレンチ内の発掘と調査区内の平面的な精査・確認によって範囲を捉えることができた。方墳の周濠とみられる溝は、削平が著しい上、調査区外へ延びているため、その一辺が捉えられたにすぎない。また、土坑のうちの幾つかについては、Ⅰ区と同様に土壙墓の可能性がある。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・陶器・磁器・瓦があり、ほかに旧石器時代の石器（国府型ナイフ形石器・楔形石器・掻器・使用痕のある石器・剥片など）もある。また和同開珎7枚が火葬墓の副葬品として納められていた。

（Ⅲ区）

1991年度に松村隆文を担当者として調査を実施した。調査区は府営道明寺南住宅の東側にあたる。調査面積は1,783㎡である。

検出遺構には、弥生時代の竪穴住居1軒、土坑5基、古墳時代～7世紀代の埴輪棺墓11基、8世紀代の土器棺墓2基、10世紀前葉の火葬墓1基、古墳時代およびそれ以降と考えられる土壙墓があり、

ほかに土坑、小穴も検出された。Ⅲ区でもこのように多様な埋葬施設が認められる。そしてそれらは、調査区の西半に分散的に位置している。

一方、調査区東半は一段低い谷状地形となっている。そこには15基ほどの不定形な落込みと若干の土坑、小穴が広がっているのみであり、埋葬施設は認められなかった。この不定形な落込みは耕作痕と考えられ、覆土中から少量の土師器や須恵器が出土した。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・陶器・磁器があり、さらに埴輪棺墓の副葬品として鉄鎌・刀子も出土した。

（Ⅳ区）

1992年度に松村を担当者として調査を実施した。調査区は府営道明寺南住宅の東側にあたる。調査面積は4,470㎡である。

検出遺構は盾塚古墳の後円部・前方部・周濠の各一部をはじめ、小型方墳1基、古墳時代およびそれ以降の埴輪棺墓5基、平安時代の火葬墓1基と土器棺墓1基、中世代の掘立柱建物7棟と柵1基があり、ほかに溝6条、土坑49基、小穴166基が検出された。さらに、調査区東辺に沿って東に下降する落込みが5箇所認められ、Ⅲ区の谷状地形の続きと考えられる。

遺構の分布は調査区の東西で粗密がある。調査区の西半では盾塚古墳と埴輪棺墓5基、土器棺墓1基、そして土坑10基と溝1条が分散的に位置しているにすぎない。一方東半では、掘立柱建物の全てが存在するのをはじめ、土坑、小穴のほとんどが位置している。ただし調査区東半にあっても、東寄りに遺構が密集している。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・黒色土器・瓦器・炻器・陶器・磁器・瓦などがあり、ほかに陶棺の破片や多量の土馬の破片も検出された。これらの遺物の大半は盾塚古墳の周濠内堆積土から出土したものである。

また埴輪棺墓の副葬品として、鉄鏃11点も出土した。

（Ⅴ区）

1995年度に小浜成を担当者として調査を実施した。調査区は府営道明寺南住宅のほぼ中央にあたる。調査面積は5,264㎡である。

検出遺構には、盾塚古墳の後円部・前方部・周濠の各一部と造出部、鞍塚古墳の前方部・造出部と後円部・周濠の一部、さらに小型方墳1基、埴輪棺墓2基、木棺墓1基、埴輪片で覆われた土壙墓1基および土坑、小穴がある。

調査区の東半に盾塚古墳と鞍塚古墳がほぼ接して位置し、西半にはその他の各遺構が分散的に存在している。また、方墳と土壙墓が重複している以外、その他の埋葬施設は集合することもなく、散在して分布している。

なお、調査区内の地形はほぼ平坦であり、下降を示すような状況は認められなかった。

出土遺物には土師器・須恵器・埴輪・陶器・磁器などがあり、木棺墓の副葬品として鉄剣も検出された。また盾塚古墳の周濠を中心に、多量の土馬の破片が出土した。さらに、土壙墓からはベンガラが納められた土師器甕も出土している。

第３節　盾塚古墳の調査成果

（１）既往の調査と新たな成果

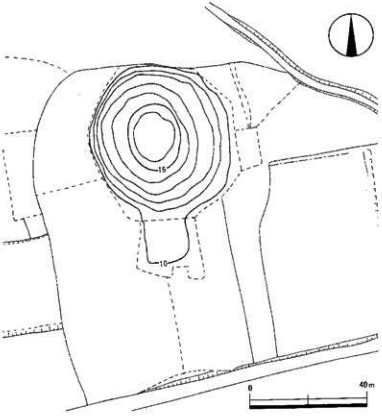
昭和30年６月から11月にかけて、故・末永雅雄氏たちにより盾塚・鞍塚・珠金塚の３古墳の発掘調査が実施された。この時の調査は、住宅建築により墳丘が消失することから、埋葬施設の調査に主眼が置かれていたが、墳丘測量や周濠の存否確認も併せて行われた。

盾塚古墳についてみると、現況の墳丘測量により、全長64ｍ、後円部径45ｍ、同高6.5ｍ、前方部長19ｍ、同幅19ｍ、同高1.5ｍを測る帆立貝式前方後円墳であると捉えられた。さらに、葺石の存在は確認されたが、周濠はないと判断された。

埋葬施設は、割竹形と推定される木棺と、それを納めた粘土槨から構成されており、後円部中央に設けられていた。粘土槨の規模は長さ7.8ｍ、幅1.8ｍである。木棺の規模は長さ6.5ｍ、幅0.8～0.6ｍを測り、被葬者は東頭位であったとみられている。

副葬品は棺の内外に納められていた。棺内のものとしては、変形六獣鏡1、銅釧１、銅鏃２、筒形銅器１、銅鈴１、石釧１、勾玉６、管玉77、棗玉７、竪櫛150、三角板革綴衝角付冑１、長方板革綴短甲１、三角板革綴短甲１、頸甲１、肩甲１、頬当１、鉄刀１、鉄剣４、鉄鏃375、鑷子状鉄製品２、袋状鉄斧10、鎌10、手鎌12、鉇11、鑿13、刀子16（含棺外）、蕨手刀子９、錐３がある。ことに三角板革綴の甲冑1式は当該時期の最新の武具として注目されるものである。一方、棺外の副葬品には盾11、鉄刀10、鉄剣3がある。さらに、昭和31年の宅地造成時には前方部から鉄鉾３、鏃・鋤先５、鎌６、袋状鉄斧17、鉄刀40、鉄剣15が出土した。この前方部の副葬品については、後円部の粘土槨より後出する副葬品埋納専用施設に納められたものと考えられている。

ところで、1992・1995年度の調査により、本墳の前方部および後円部南半をほぼ捉えることができた。この両年度の調査成果により、昭和30年の調査成果に修正を加えるべき点、あるいは新たに発見された点などが認められた。新しく得られた知見としては、まず後円部西側において造出部が存在することが明らかとなった点が挙げられる。造出部は、西側くびれ部から北寄り11～22ｍにかけて存在し、後円部墳丘第１段目の斜面に取り付いて構築されている。規模は幅11ｍ、長さ７ｍ、高さ0.5ｍほどを測る。頂面には円筒埴輪列が配され、また斜面には葺石が施されている。さらに、前方部から後円部にかけての第１段テラス面上において、円筒埴輪列が検出された点も新たに発見されたこととして挙げられる。



第７図　盾塚古墳 墳丘測量図（昭和30年）

1995年度の調査において検出された西側くびれ部の埴輪列は遺存状況が悪

いが、1992年度の調査では前方部東辺から後円部５ｍほどにかけて比較的本来の形状を保った状態の円筒埴輪列が検出された。この発見によって、墳丘各テラス面および墳頂部には普通円筒を中心とした埴輪列が配されていたと推測することができる。また、昭和30年の調査では存在が認められないとされ、その後盾形を呈するのではないかと予測された周濠についても、前方部から東側は後円部中程、西側は後円部3分の2ほどにかけての範囲で検出された。しかも前方部前面にあっても外辺が弧状を描いていることから、全体に卵玉形を呈する形状であることが明らかとなった。

墳丘規模についても、昭和30年の調査成果に若干の修正を加える必要が生じた。墳丘を左右対象とし、さらに後円部を正円形に復元するという前提下ではあるが、全長73m、後円部径49m、前方部幅25m、同長16m、くびれ部幅24m弱と復元することができる。

昭和30年の墳丘測量調査の成果と比べると、全長、後円部径および前方部幅がさらに大きくなり、それに反して前方部の長さについては小さくなった。これにより、帆立貝式前方後円墳としての形状はより顕著になったといえる。

また昭和30年の調査でも存在が認められた葺石については、墳丘第１段目斜面の東側のくびれ部から後円部にかけて、そして西側のくびれ部から後円部中程にかけて、それぞれ検出され、存在が再確認された。崩落が著しく、墳丘第1段目の斜面に若干が遺存しているにすぎなかったが、その配置について幾つかの特徴を見出すことができた。

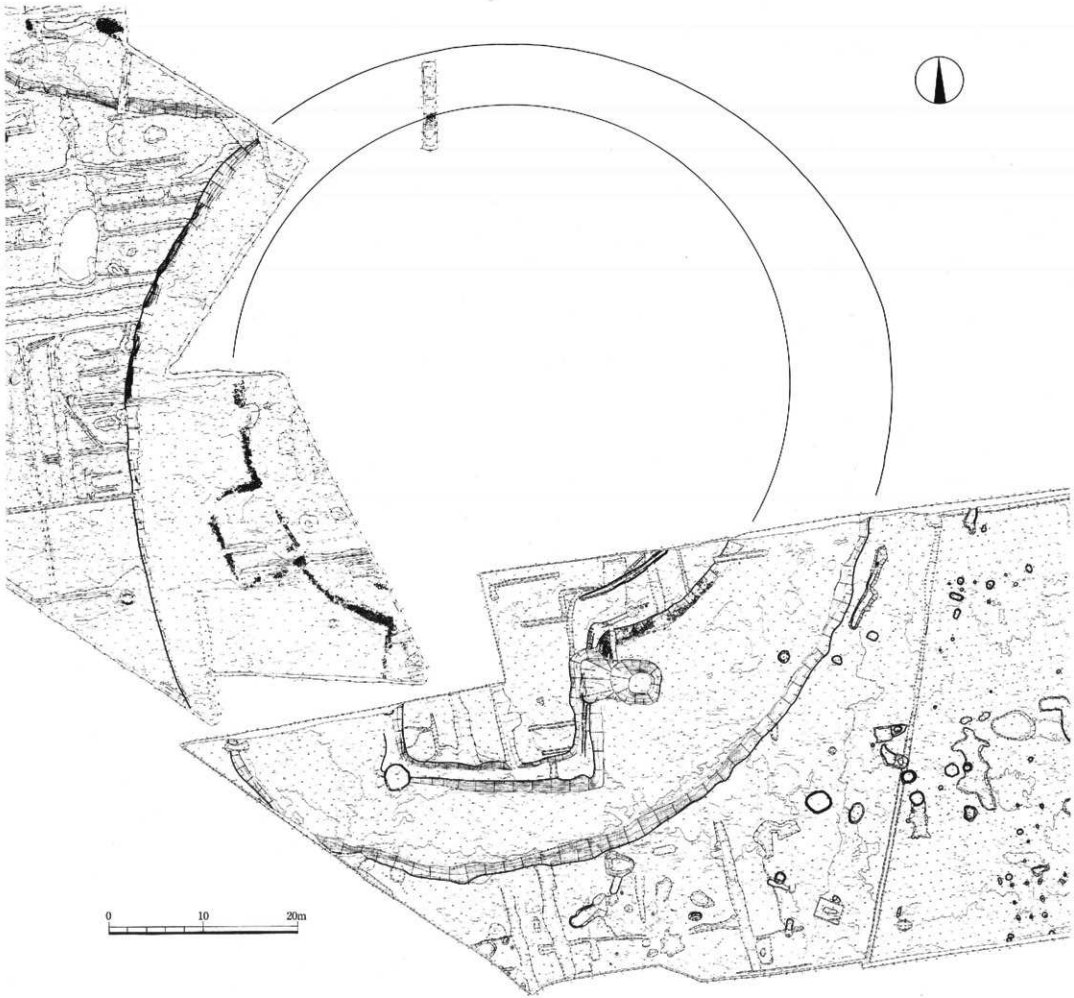
まず基底石の配置法が確認されたことである。しかもその配置には、二通りの方法が認められた。ひとつは人頭大あるいはそれ以上の大きさの石材を配したもので、前方部西辺および造出部西辺において採られていた。もうひとつは横長の石材を平置きするものである。この方法は造出部以外の西側後円部で認められた。葺石配置に関するいまひとつの知見は、斜面において石材が使い分けられていたとみられる点である。東側くびれ部では小振りの礫が集中するとともに、それより大きめの礫が幾分縦方向に連続している状況が観察された。このことから墳丘斜面については大きめの礫で一定の区画を行い、その中に小振りの礫を充填する方法が採られていたとみられる。さらに、これらの葺石は原則として地山を削り出した墳丘斜面上に褐色砂質土を5cm程度貼付け、そこに突刺すように貼られたようである。また、現状では墳丘第1段目のみしか葺石は遺存していないが、本来は墳丘各斜面に配されていたとみられる。

（２）埴輪列と埴輪

２箇年度の調査により、第１段テラス面の前方部から両くびれ部にかけて、そして墳丘西側に付設された造出部上において埴輪列が幾分遺存していることが判明した。

1992年度の調査では、第１段テラス面の前方部東辺からくびれ部、そして後円部にかけて、円筒埴輪列および埴輪を据えるための布掘りの掘方が検出された。東側くびれ部に位置する近世土坑を挟んで、それより後円部側では円筒埴輪が樹立した状態で遺存していた。これに対し、近世土坑より前方部側においては埴輪の存在はなく、掘方のみが検出されただけであった。

樹立した状態で検出された円筒埴輪は11個体を数える。また試掘時に取上げられたものが２個体（No.10・11地点）、攪乱によって破損された状態で出土したものが１個体（No.７地点）存在する。さらに、埴輪自体の存在は認められなかったが、本来掘方内に埴輪が据えられていたとみられる２箇所（No.12・13）の位置が推定できる。したがって、近世土坑以北では計16個体の円筒埴輪の樹立状況を窺うことができる。円筒埴輪は中心間で40～50cm間隔で樹立されている。埴輪は比較的残りのよいも



第8図　盾塚古墳　調査区全体

のでも高さ20cmほどであり、樹立した状態で検出された11個体のうち7個体が最下段突帯以下の底部破片である。またNo.2・3・8地点では、埴輪の外あるいは内に拳大礫が散在していた。これらの礫は、埴輪の樹立を安定させるために、掘方の埋戻しにともなって詰められたものと考えられる。

埴輪を据える掘方は、上述したように溝状の布掘りで、埴輪各個体用のものではない。掘方は途中近世土坑で切られているが、約20mにわたって検出された。現状での幅は45～60cm、深さは10～20cmである。また各円筒埴輪の底部から最下段突帯までの高さはおよそ12cm前後であるが、最下段突帯までが掘方内で埋戻されていたとすれば、遺存する掘方の深さからみる限り掘方上面はほとんど削平を受けていなかったことになろう。掘方の現状での幅や深度は、円筒埴輪の遺存しない近世土坑以南でもほぼ変わりない。したがってその部分で埴輪の樹立が認められないことは、削平が深く及んだとみるよりも、埴輪の固定が本来弱かった可能性が考えられる。

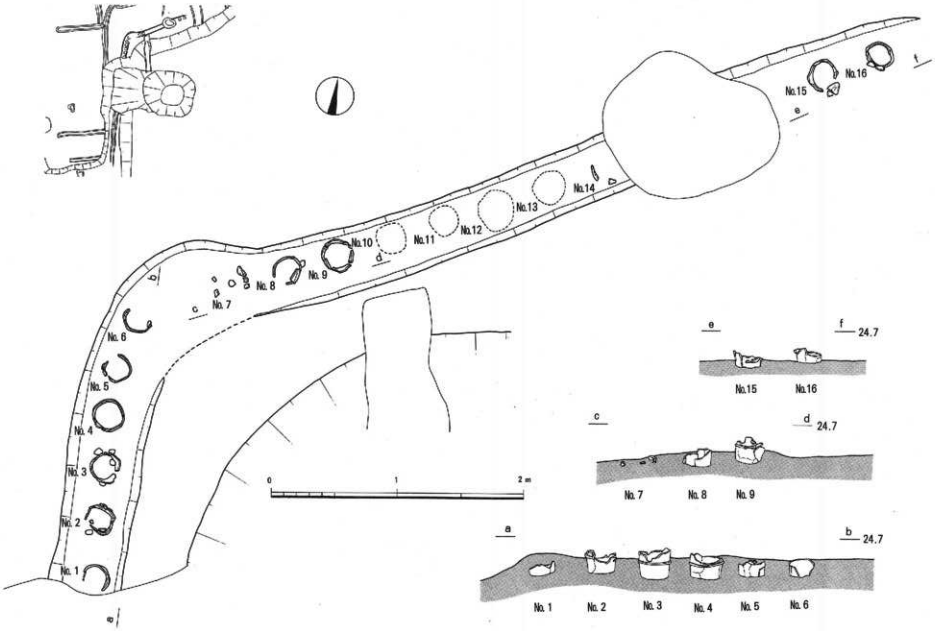
また掘方の位置をみると、前方部東辺ではテラス面のほぼ中央に位置し、テラス面の両端までそれぞれ0.3mほどを測る。これに対し、くびれ部付近から後円部にかけては、テラス面の周濠側の縁辺まで0.5～0.6mである。これは掘方が墳丘側に寄っているか、あるいは掘方はテラス面の中央にあり、テラス面自体が幅を広げているためと考えられる。ただ西側くびれ部で検出された埴輪の掘方とテラス面縁辺までが推定0.5m、くびれ部より後円部側で僅かに遺存している第1段テラス面の幅が2.5mであることからすると、後者の可能性が高い。

1995年度の調査では、先に述べたように西側くびれ部の前方部寄りの第1段テラス面上と、造出部上の2箇所で埴輪列が検出された。遺存する埴輪から、普通円筒を主体とした埴輪列であるとみられる。

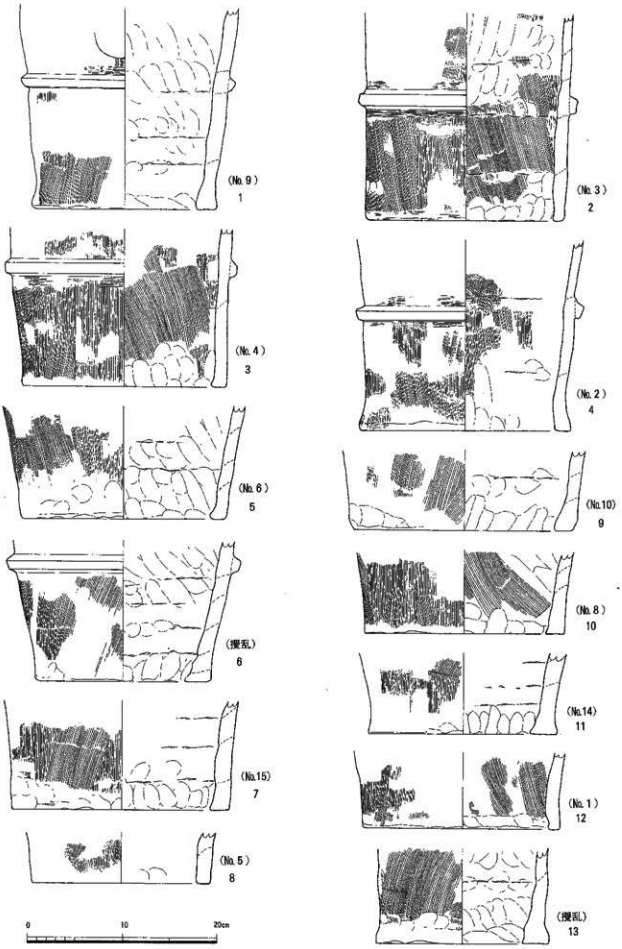
くびれ部前方部寄りのテラス面上の円筒埴輪列では、樹立状態で検出された埴輪は2個体にすぎない。ともに最下段突帯にも達しないほどの底部破片である。その2個体は中心間で40cmを測る。掘方幅は現状で0.5～0.6mであり、1992年度に検出された墳丘東側の様相と変わりない。この部分における掘方の方向は前方部据と平行せず、内寄りに入り込むような様相を示している。このことから、前方部西側の墳丘第2段目が墳丘据と平行せず、くびれ部付近にかけて墳丘側に寄り、第1段テラス面が幅広になるとともに墳丘側の縁辺が内側に入り込むと予測される。しかし、こうした状態は前方部東側の埴輪列や掘方では認められないことから、前方部第2段目の形状が東西両側で非対称であった可能性がある。

一方、造出部上の埴輪列は前方部西側の埴輪列に比べて遺存状況が割合によい。この造出部上の埴輪列には、造出部の墳丘側縁辺に沿う1列と、その南端近くで直交し周濠側に延びる1列の2方向がみられる。現状では造出部北側において東西方向に延びる埴輪列は認められない。したがって、造出部上で埴輪列全体がコ字状に配されていたのか、あるいは現状のままであったのかは不明であるが、造出部頂面の南北両側で削平状況がさほど異ならないことからすると、後者の可能性も充分に考えられる。

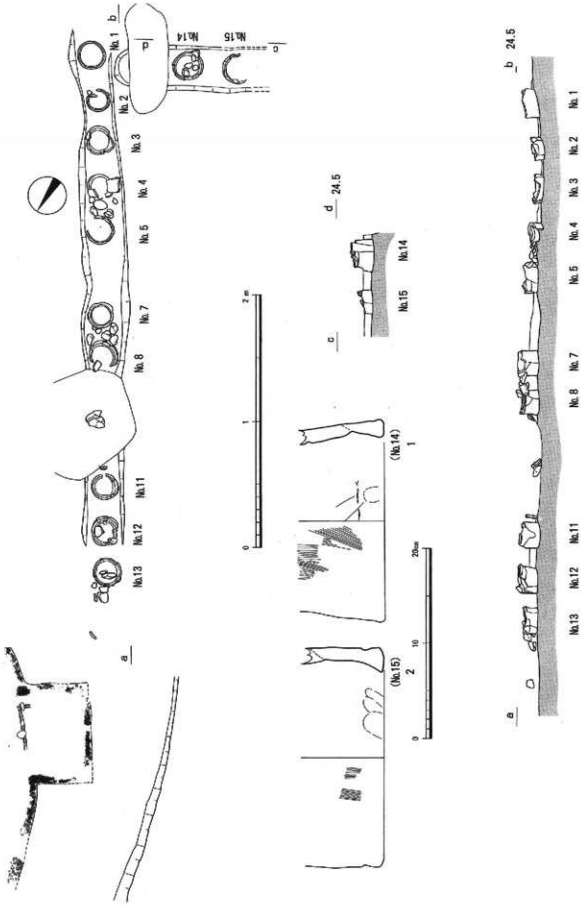
造出部上の埴輪列の内でも、後円部墳丘第1段目に沿う埴輪列では、樹立状態の円筒埴輪が10個体検出された。さらに攪乱からも1個体が出土した。円筒埴輪は中心間で30～40cm間隔で樹立されており、前方部の埴輪列に比べて僅かに間隔が狭まっている。埴輪を据える掘方は布掘りで、攪乱を挟んで約4mにわたって検出された。現状の幅30～40cm、深さは最大でも10cm強にすぎない。また埴輪の内外に拳大の礫が認められる箇所があり、埴輪固定のために配されたものと考えられる。いずれの埴輪も遺存状況は悪い。最大でも高さ18cmを測るにすぎず、最下段突帯前後までしか遺存していない。しかし墳丘東側のくびれ部から後円部にかけて検出された埴輪列と同様、埴輪の最下段突帯までが掘



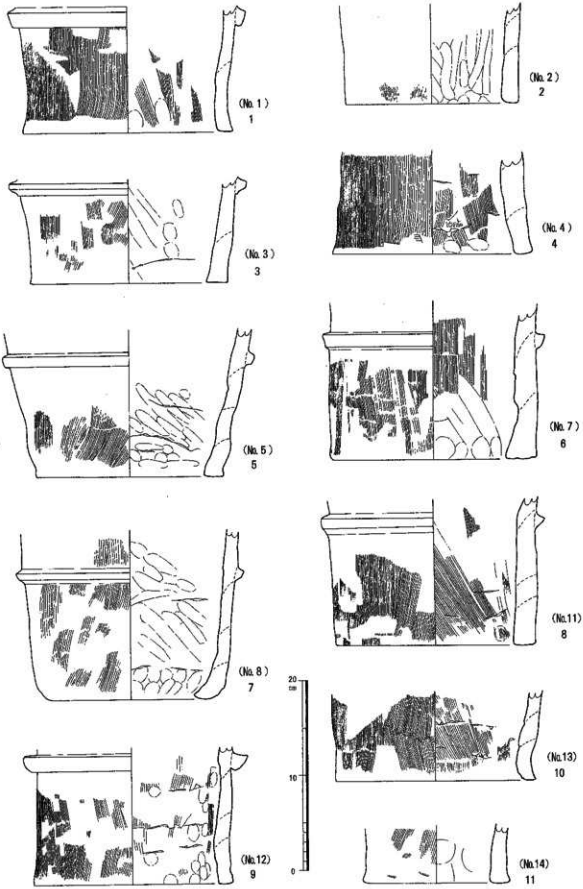
第9図　原塚古墳 東側くびれ部円筒埴輪列



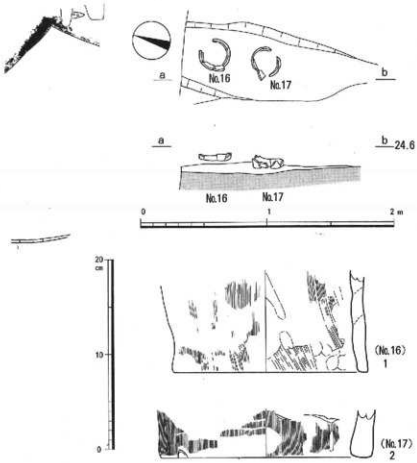
第10図　盾塚古墳 東側くびれ部墳輪列の円筒埴輪



第11図　盾塚古墳 造出部上円筒埴輪列・円筒埴輪



第12図　盾塚古墳 造出部上埴輪列の円筒埴輪



第13図　盾塚古墳 西側くびれ部円筒埴輪列・円筒埴輪

方内に据えられていたとすれば、埴輪が樹立する範囲では、掘方上面の削平はほとんどなかったとみられる。

この墳丘第1段目に沿う埴輪列の南端近くにおいて直交する埴輪列は、西側で削平を受けているため2個体が樹立していたにすぎず、掘方も1.1mほど認められただけである。しかし遺存する掘方の形状や埴輪の配列状況などは、墳丘に沿う埴輪列と変わりない。

盾塚古墳の墳丘上において樹立状態で出土した埴輪は、いずれも普通円筒と考えられ、墳丘東側で11個体、前方部西辺で2個体、造出部で12個体を数える。さらに、試掘時に出土したものや攪乱部分で出土したものなどを合せると、28個体の円筒埴輪が確実に盾塚古墳に伴うものということができる。

これらはいずれも底部から最下段突帯まで、あるいは第2段目の途中までの遺存資料で、全形を捉えられるものはない。しかしながら、後円部、前方部そして造出部に配された埴輪はいずれも類似したものであり、共通する特徴としては、

- 土師質である
- 外面調整が1次タテハケのみで、2次調整を欠く
- 内面調整にユビナデ・オサエがなされるが、ハケメが残る場合もある
- 底部にヘラナデ調整がなされるが、ユビナデ・オサエの痕跡も残す
- 内外面は赤褐色を呈する
- 胎土に砂粒を多く含み、ことに金雲母の混入が顕著である
- 器厚は1.5～2.0cmを測り、底径に比して厚みがある

という点を挙げることができる。ただ、外面調整については、ユビナデが施されるものもある。底径は19～24cmであるが、大半が図上復元であることを考慮すると、およそ22cm前後であったとみられる。

これら盾塚古墳に樹立されていた、あるいはそう考えられる円筒埴輪と、器面調整、色調、胎土などが共通し、本来盾塚古墳に伴っていたとみられる破片資料もある（14—1～9、15—1～12、17—1～10）。その中には口縁部資料も含まれている。9点の口縁部資料はいずれも単口縁で、緩やかに外反し、端部は平坦であるが、開き具合に若干の強弱がみられる。外面調整は1次タテハケのみである。

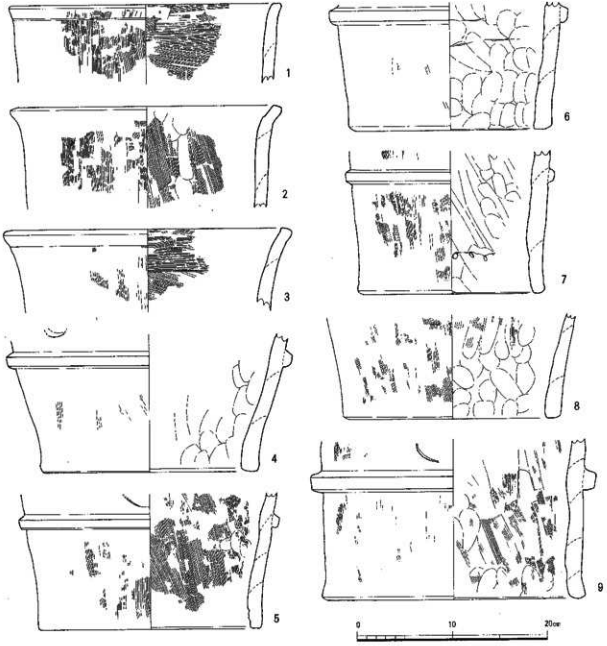
底部から最下段突帯までの立上りの形状には、直線的に外傾するもの（10—1・5など）とほぼ直

立するもの（10—2・4など）があるが、底径との関連は窺いがたい。

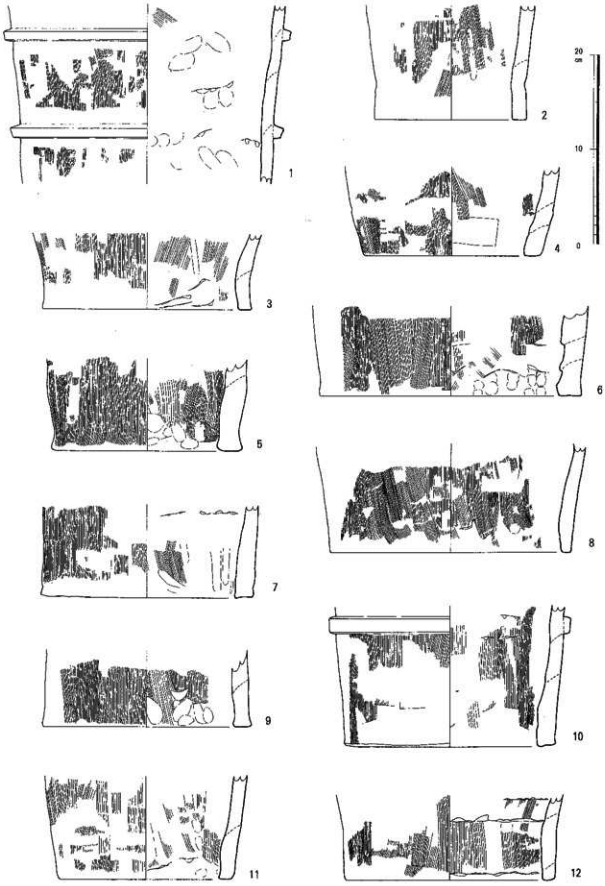
底面に基部を形成する粘土板の接合痕が顕著にみられるものもある。その状況から2～4㎝幅の粘土帯を重ねて長さ8㎝強、幅16㎝ほどの粘土板を作り、それを4枚接合して円筒埴輪の基部を形成しているとみられる。粘土帯は端部が斜めに切り落とされ、つねに先行の粘土板の外側を覆うように接合されている。

さらに、底面にヘラナデやユビナデの痕跡が顕著に認められるものが比較的多く、底部内外面にユビナデの施されたものもみられ、底部に丁寧な調整が加えられたことが知られる。また自重により底部が肥厚したものも散見される。

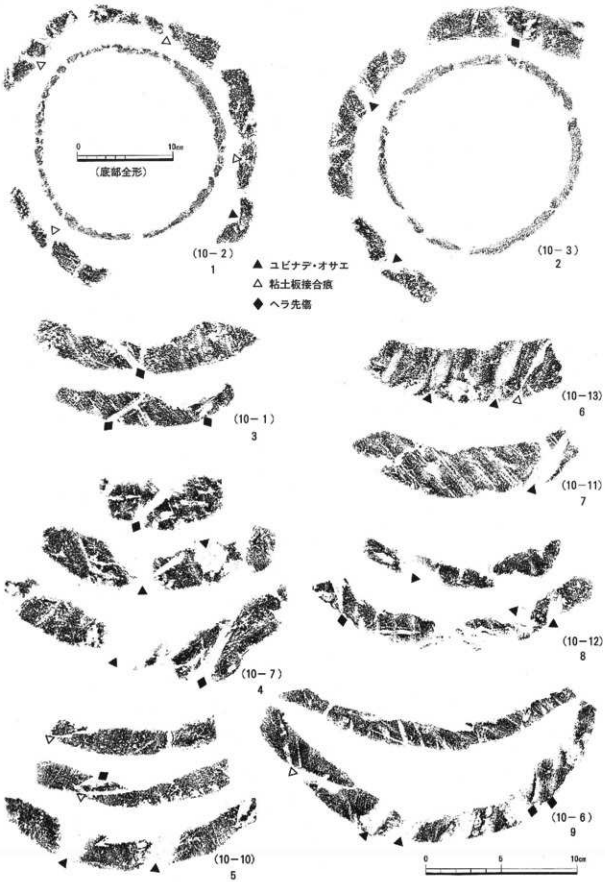
周濠からはB種ヨコハケの施された大～中型上師質円筒埴輪の破片も出土しており、その中には、この盾塚古墳の築造時期と矛盾しない時期のものも含まれている。そうした埴輪が樹立されていた可能性は否定できないものの、樹立状態で検出されたものの中にそうした資料が認められなかったことから、個別的に特定することはできなかった。また形象埴輪についても同様の理由から、樹立されて



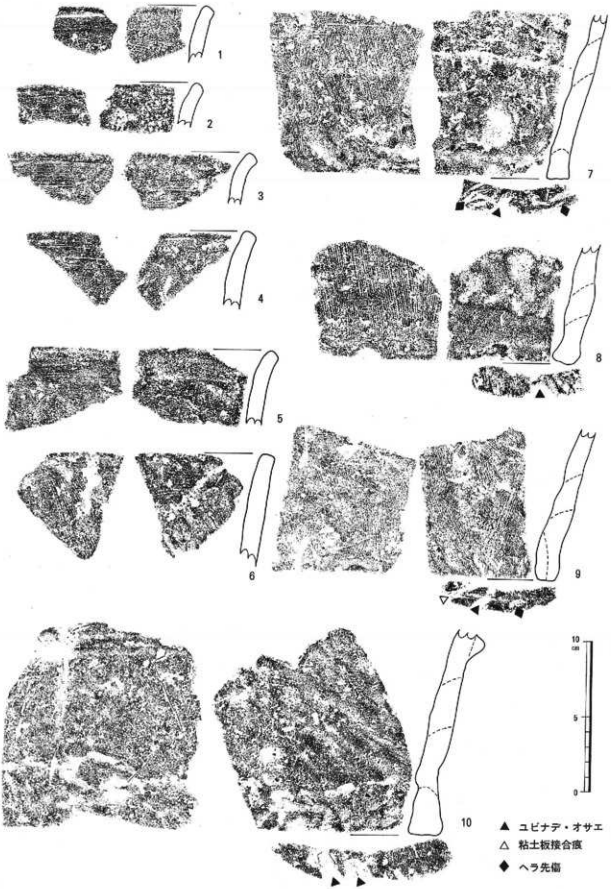
第14図　盾塚古墳 周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪（1）



第15図　盾塚古墳 周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪（2）



第16図　盾塚古墳 埴輪列の円筒埴輪底部拓影



第17図　盾塚古墳 周濠出土の盾塚古墳円筒埴輪拓影

いた可能性はあるものの具体的に提示することはできなかった。ただ調査により検出された状況からすると、第1段テラス面や造出部では既述した特徴を有する小型円筒埴輪が主体として囲繞されていたと考えられる。

（3）周濠

2箇年度にわたる調査により、周濠の約半分を捉えることができた。その結果、平面は前方部前面でも弧状を描いており、全体に卵玉形を呈することが明かとなった。

周濠の下端間の幅は、後円部東側で11m、東側くびれ部で17m、前方部前面で7m、西側くびれ部で22m、造出部前面で8m、後円部西側で10mを測る。さらに、造出部の南側で16m、北側で12m、V区検出の墳丘北側で11mを測る。このように、後円部の後方ほど周濠の幅は狭くなっていくようである。なお、現状の内外両上端は削平を受けているため、本来の立上り端より幾分周濠中央に寄っていて、上端間の幅は狭まっているといえる。

周濠底は中央に向かって緩やかに下降するが、ほぼ平坦である。また、特別な掘込みなどは認められなかった。周濠外縁の立上り角度は、2次的な改変もあるため箇所によって異なっており、15～35度までみられる。ただ、本来はおよそ30度前後であったとみられる。

周濠内堆積土については、細分でき、観察箇所により細部の違いもある。しかし、層間に不整合な部分がみられ、土質もおおまかに異なることから、およそ4層に大別することができ、それに応じて堆積時期も異なっているといえる。1992年度調査区の東西ベルトについてみると、盛土・旧耕作土（1・2層）、近世の遺物を含む層（3～12層）、中世の遺物を含む層（13～17・19層）、埴輪および7世紀代を中心とした土師器や須恵器を含む層（18層）に分かれる。

このうち砂シルトである18層は周濠底上に10～20cmほどの厚さで堆積しているにすぎない。葺石を混在しているが、明瞭な墳丘崩落土である14層の下位にあること、そして周濠内堆積土では数少ないシルト層であることから、墳丘崩落以前に周濠底に堆積した層とみられる。しかしこの18層中にも盾塚古墳より後出する遺物が含まれている。

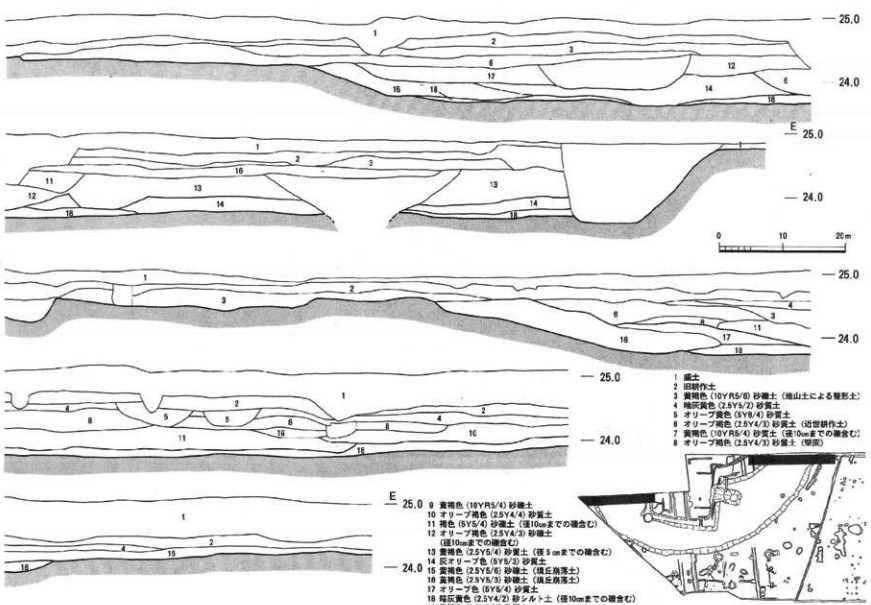
またV区では埴輪片を多く混入した礫層が認められている。この層は比較的早い段階で崩落した墳丘土であった可能性が高い。

この18層上に載る中世の遺物を含む層は、周濠縁辺付近にあっては、周濠の検出面レベルまで立上っている。また周濠縁辺を除くと近世の遺物を含む層が周濠内の過半を占めている。こうした状況からすると、周濠は中世代に一度かなりの部分が埋められ、その後近世代になって部分的な掘削をともなう改変がなされたのち、再び埋まったとみられる。

なおこれらの堆積土は、後出する掘込みを除くと、いずれも周濠斜面に沿って傾斜するか、あるいは水平に堆積しており、山積みされた客土の層はみられない。おそらく中央からではなく周濠の外側および墳丘側から順次埋戻されたのであろう。

現状で周濠の外側には何らの構造物も認められなかった。これは、周濠の外縁付近が削平を受け、遺構検出面より高い位置にあった構造物を破壊している可能性もなくはない。

ところでIV区北辺近くで検出された溝1は、0.8～1.6mの距離をもって周濠と平行している。この溝1からは土師器・須恵器・埴輪の破片のほか、黒色土器と思われる破片や瓦などが出土している。しかし明かな中世代の遺物は含まれていない。また、同じくIV区検出の円筒棺2も周濠と2mの距離を保って平行している。ともに周濠と一定の間隔をもって平行する状況からすると、周濠外側には幅約1mの堤状の構造物が存在した可能性もあろう。



第18図　屋敷古墳　周溝内堆積土

（4）墳形の復元

1992年度および1995年度の発掘調査により、盾塚古墳の墳丘の形状や各部分の様相がかなり明らかとなった。

こうした成果をもとに、1995年度調査の概要報告には全長73m、後円部径49m、前方部幅25mを測る後円部3段、前方部2段築成の帆立貝式前方後円墳で、後円部第1段目の斜面の途中に幅11m、長さ7mの造出部が取り付くという墳形復元がなされた。

ただ後円部については正円、前方部については直線のラインを基調として復元しているため、実態と対応しない部分も生じている。そうした整合しない部分を取上げて、1995年度に提示された復元案について若干の検討を加えておく。

周濠の形状についてみると、墳丘主軸で周濠西側を東に反転させると、周濠南東側ラインが現状より大きくなってしまう。したがって、前方部から後円部東側にかけての周濠は、本来、西側に比べて丸みを欠いた形状であったと考えられる。

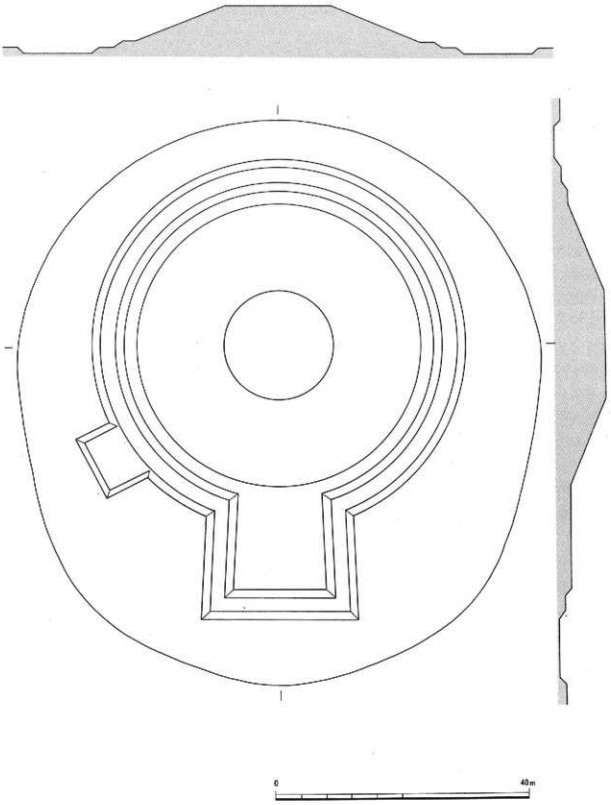
前方部については、墳丘第2段目の復元ラインが西半では実態より後方に位置することになる。前方部東側辺での第1段テラス面の幅は約2mであり、それを前方部前面に対応させると、前方部東半では整合するが西半では上述したように現状より幅広くなる。東半での現状幅が後世の削平の影響を受けているとすれば、前方部幅は現状通りの広さとみることも可能である。ただしこの場合、テラス面の幅は1.2mほどとなり、埴輪の樹立がテラス面いっぱいに及ぶことになる。

さらに、前方部第2段目下辺の南西隅から西側辺にかけては、東側辺のように内傾する状態を呈さず、逆に外方に開き気味となっている。そしてその延長は、西側くびれ部付近の墳丘第1段目下辺と交差する位置にくる。テラス面幅からすると、削平を受けているとしても南西隅は本来よりさほど後退しているとは考えられない。よって、外傾状況も実状であるとみられる。とすれば、前方部第2段目側辺は溜曲していた可能性が高い。

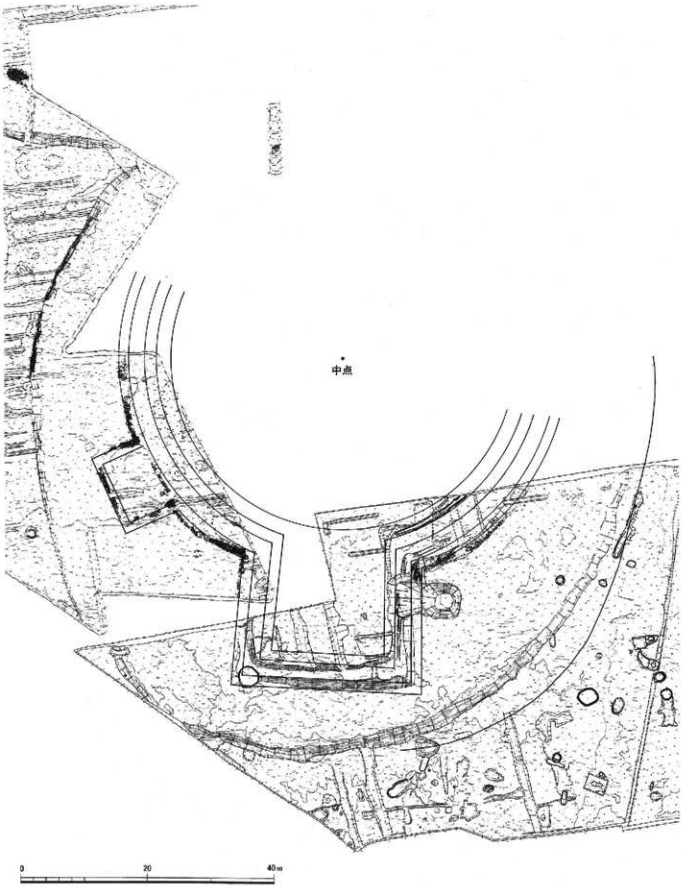
後円部東側では、現状の第1段目の斜面が上・下辺とも復元ラインより周濠寄りに位置している。これについては、東側と西側で後円部第1段目の円周の大きさが異なっているか、あるいは後円部中点の位置が東西で異なっている可能性が考えられる。ただ、同一中点を用いた復元で第1段テラス面は全体に整合していることから、現状では前者の可能性が高い。

また、注意しなければならない点として、東側くびれ部の北約5mの地点で近世溝が重複する位置に若干の段差が存在する。この段差は周囲との比高差が20cmほどで、また第1段テラス面の端縁との比高差は20～30cmを測る。しかも後円部第1段目の斜面の形状とほぼ平行している。こうした様相から、この段差については墳丘第2段目の立上り部分であるようにもみられる。しかしそうすると、後円部東側第1段テラス面の幅が5.6mとなり、前方部のテラス面幅よりかなり広くなるとともに、円筒埴輪列はテラス面の縁辺に寄ることになる。この段差が墳丘削平時の削り残しとみるか、墳丘第2段目にかかわるものとするかにより、墳丘の形状も大きく変わる。

以上みてきたように、大略の整合性を示す墳丘復元の内にあっても、細部においては不整合部分が存在する。このことから、墳丘は地点的に微妙な溜曲や傾きをもって構築されたとみられ、墳丘の東西でまったく均等な企画性をもったものではなかったと考えられる。これは、墳丘構築にあたっての省略化というのではなく、現実の築造過程で生じた問題を部分的に解消していったために生じた状況ではなかったかと推察される。



第19図　盾塚古墳 墳形復元の一案



第20図　盾塚古墳 墳形復元と遺構実態との比較

（5）周濠内の遺物

周濠内からは多量の埴輪片をはじめ、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器・瓦などが出土した。遺物は各時代に及んでいる。しかも異時期のものが同一層に含まれているのは、土層観察でみられたように中・近世代に周濠内へ多量の客土がなされたためである。

このように周濠内出土の遺物は弥生時代から近世にまで及んでいる。さらに上層から下層への落込みもあるため周濠底の直上から近世代の遺物も出土しているが、先にみたように上層の大別に一定程度対応している。土師器と須恵器はほとんどが完形にならないが、その出土量は多い。Ⅳ・Ⅴ区では上馬破片が合わせて200点近く出土しているが、これは第12節で詳述する。またⅣ区では破片となった土師質亀甲形陶棺が出土している。

ここでは埴輪について概観しておきたい。普通円筒埴輪には窖窯焼成された須恵質の破片が半数近く含まれている。これらは盾塚古墳築造時期より後出するものであるが、こうした後出する埴輪は出土埴輪数のかなりの割合を占めている。

一方、形象埴輪は、検出された盾塚古墳の各所においても樹立状態での出土がみられない上、本来の位置の近くでの倒落や、意図的な廃棄・集積などの状況も認められない。したがって盾塚古墳に樹立されていた形象埴輪の特徴を明らかにすることはできず、よって本墳に伴うと推定できるものも個別には特定できない。ただ個別特定はできないにしても、それらの中には、やはり実際に盾塚古墳に樹立されていたものも含まれているかも知れない。

さらに供給元が不明の客土とはいえ、その中に含まれた遺物、ことに埴輪は古市古墳群中のいずれかの古墳に樹立されていたものである。そうした意味において、本来樹立されていた古墳との対応ができない資料であっても、一定の有意性を保っているといえよう。こうしたことから、幾つかの特徴的な形象埴輪を図示することにした。また円筒埴輪に施されたヘラ描についても、若干を示した。

21―1～7、22―1～13、25―1～9は1992年度の調査で出土したものである。

21―1～6は家形埴輪である。21―1は屋根部分である。網代が丁寧に表現されている。21―2は屋根の破風板である。21―3は家の掘廻りで、ヘラ描で梯子の表現がなされている。

21―7は衣蓋形埴輪の立飾り部分である。

22―1～3は靱形埴輪である。このうち22―1は、色調や胎土の状況が盾塚古墳に樹立されていた円筒埴輪に類似している。22―4は靱形埴輪か盾形埴輪かは判然としない資料である。

22―5～12は盾形埴輪と考えられるが、小破片のためやや不明確なものもある。

22―13は草摺形埴輪である。

23―1・2、24―1～10は1995年度の調査によって出土したものである。

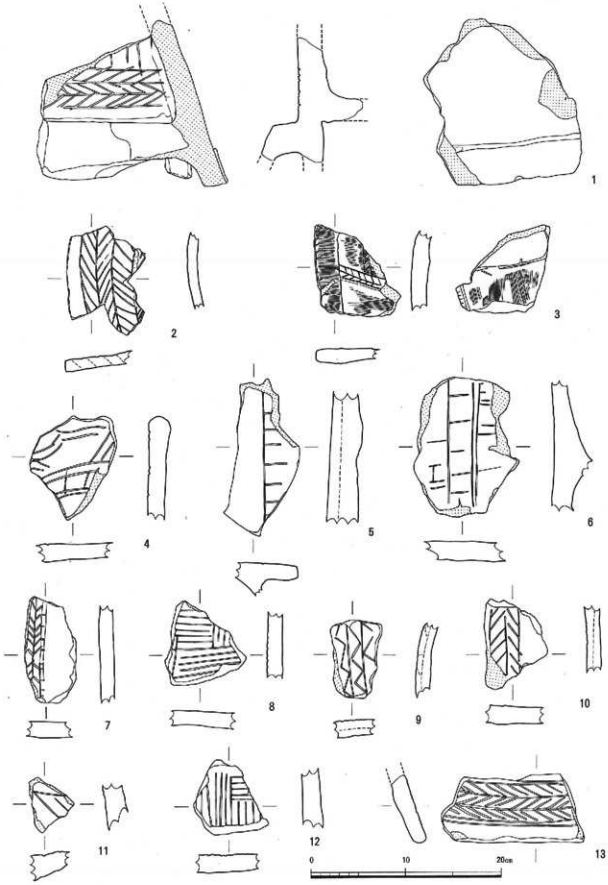
この調査では、23―1・2のような大型の家形埴輪が出土している。23―1は屋根部分で、網代の表現が認められる。23―2は掘廻りから柱までが遺存する資料である。この2点も先の22―1と同様、色調や胎土の状況が盾塚古墳に樹立されていた円筒埴輪に類似している。24―1も家形埴輪であるが、須恵質である。この家形埴輪の屋根の表現は、先の21―1や23―1と異なっている。

24―2・3・7は靱形埴輪、24―4は背形埴輪の後頭部であろう。24―5は三角板革綴短甲を表現しているとみられる。

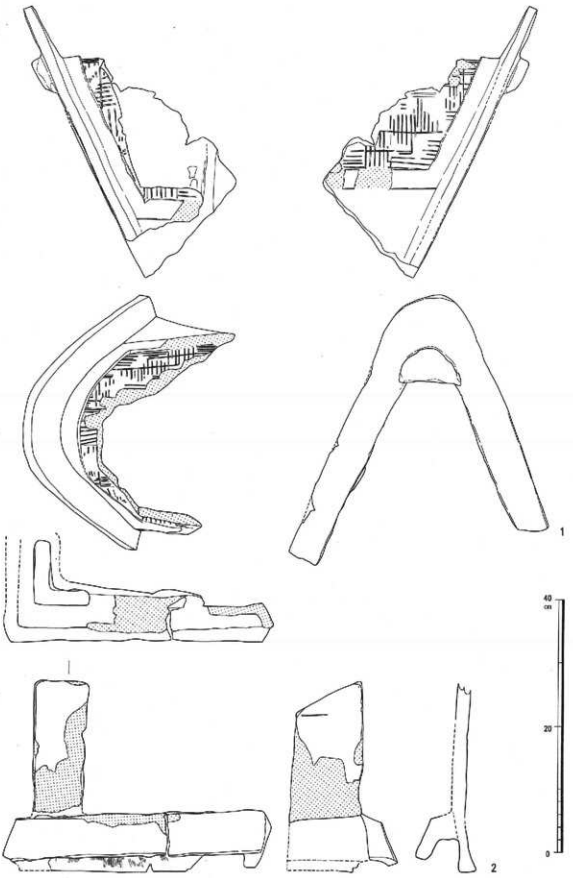
24―6・8は草摺形埴輪、24―9・10は衣蓋形埴輪の立飾部分である。

ヘラ描資料については、1992・1995年度とも出土しているが、幾何学的なものが多い。その中にあって、25―1は牡鹿を表しているとみられ、25―2は馬、25―9は盾を表現しているのかも知れない。

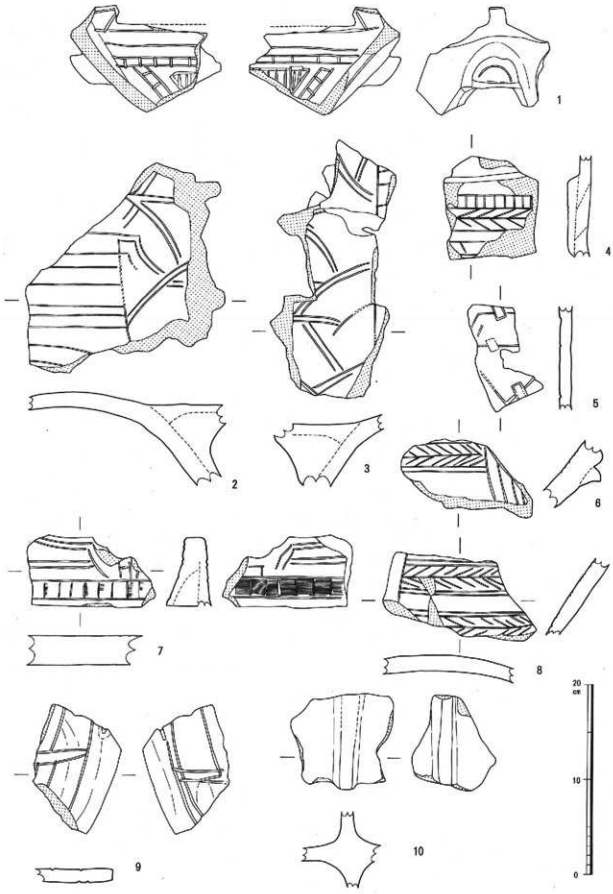
第21図　盾塚古墳 周濠出土の形象埴輪（1）



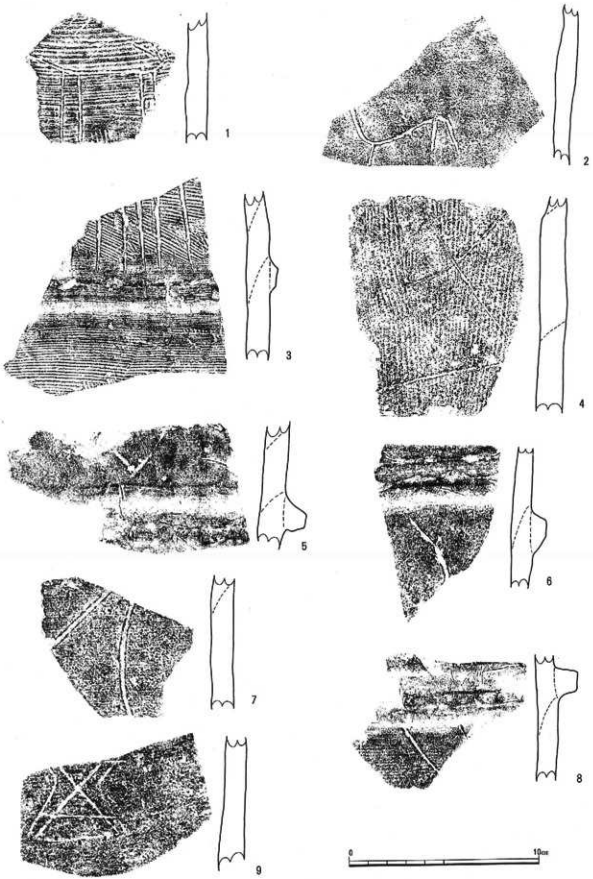
第22図　盾塚古墳 周溝出土の形象埴輪（2）



第23図　盾塚古墳 周濠出土の形象埴輪（3）



第24図　盾塚古墳 周濠出土の形象埴輪（4）



第25図　盾塚古墳 周濠出土の円筒埴輪ヘラ描拓影

第4節　鞍塚古墳の調査成果

（1）既往の調査と新たな成果

鞍塚古墳は盾塚古墳とともに昭和30年に埋葬施設を中心に発掘調査が行われた。また墳丘の測量調査も同時に行われ、現状の直径は35mであるが、本来は直径40m、高さ5mの円墳と考えられた。墳丘においては葺石の存在が確認されている。また円筒埴輪の破片も出土している。

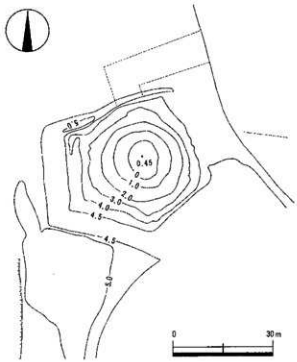
埋葬施設は堅固な地山を掘り込んだ中に、細長い木棺を納めたもので、木棺の両小口部外には粘土塊が置かれていた。木棺の規模については、推定長4.7m、幅0.5m強、そして掘込みの長さは6m、幅1.5～1.8mを測る。棺底は東から西へ緩やかに傾いており、副葬品の配置とも併せて、被葬者は東頭位に置かれていたと考えられている。なお木棺の形状については報告に明示されていないが、棺中程の底が平坦に近いことから、箱形の可能性が考えられよう。

副葬品は棺内と、棺を納めた掘込みの肩部に置かれていた。

棺内には方格規矩鏡1、碧玉製勾玉6、碧玉製管玉42、ガラス小玉1078、滑石製勾玉2233、鉄刀3、鉄剣2、鉄鏃多数、三角板鋲留衝角付冑1、三尾鉄1、鎧1、頬当1対、鋲留式頸甲1、肩甲1、脇当1、三角板革綴短甲1が副葬されていた。

掘込み肩部の棺外においては、馬具1式（鞍金具1、木心鉄板張輪鐙2、鏡板付轡1、鉸具1、辻金具2、雲珠（？）1、異形鉄器1、隅金具1）をはじめ、鉄鉾2、鉄槍2、鉄鏃多数、鉇形鉄器3、鉈2、鹿角装刀子2、鉤状鉄器1、車軸状鉄器2、鎌1、袋状鉄斧2、鉄鋌5、砥石1、鉄刀1が副葬されていた。

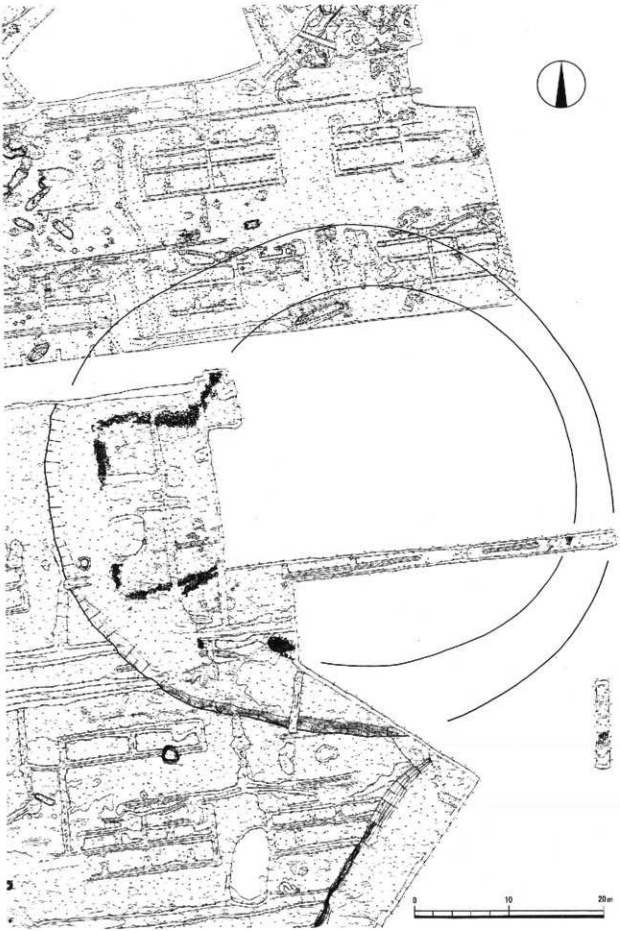
棺の内外に多数の副葬品を納め、しかも棺外に武器・工具を配列する在り方は、近接する盾塚古墳と共通する。さらに短甲をはじめとする武具のセット1式および、初期の様相を示す馬具のセット1式の副葬は注目されるものである。ことに完備された武具の副葬から、この鞍塚古墳の被葬者は、盾塚古墳と同じく、鉄製武器・武具の生産組織と密接な関係があったことが示唆されると報告者は述べている。



第26図　鞍塚古墳 墳丘測量図（昭和30年）

1987・88年度の調査により、周濠の北側が平面的に範囲確認されたが、1995年度の調査ではさらに周濠の西側の続きを発掘調査したとともに、従来円墳と考えられていた墳形について重要な新知見が得られた。そのひとつは、墳丘の西側に長さ11m、幅20m強の短い前方部を有していることが明らかとなった点である。前方部は上面が著しく削平され、本来の高さをかなり下回っているとみられるが、墳丘裾廻りを捉えることができた。この成果により、鞍塚古墳は昭和30年の調査以来考えられてきた円墳ではなく、前方後円墳であることが判明したのである。

しかも後円部は、大半が未検出ではあるが、確認された一部から復元すると直径40mほどの規模となる。後円部の規模に比して前方部が短いこと



第27図　鞍塚古墳 調査区全体

から、帆立貝式前方後円墳といえる。隣接する盾塚古墳に比して、規模こそ小さいが、同様の帆立貝式前方後円墳という墳丘形態を採っている点は留意せねばならないであろう。

いまひとつ新たに判明したことは、南側くびれ部から後円部方向にかけて、長さ7m、幅10m弱の造出部が付設されていた点である。この造出部の付設も、位置こそ異なっているが盾塚古墳にも認められており、墳形とともに両墳の間における墳丘企画の密接な関係が窺われる。この造出部は頂部が既に削平されていて、現状での高さは50cmほどを測る程度である。本来の高さについては不明であるが、盾塚古墳の造出部と同様、墳丘第1段目の斜面中程に取り付いていたとみられる。

一方、周濠については、全体の4分の1ほどを発掘し、1987・88年度に範囲確認がなされた部分を合わせると、3分の2ほどの形状を把握するに至った。これにより周濠の全体的な形状を予測することが可能となった。

また昭和30年の発掘調査でも存在が知られていた葺石も、前方部から後円部北側にかけて、および造出部と後円部との接合部分にかけての範囲において認められた。崩落が著しく、いずれの範囲にあっても墳丘第1段目の斜面に若干遺存しているにすぎなかったが、本来の形状を部分的であるにせよ認めることができた。

葺石には、盾塚古墳と同様、直径約20cmほどの河原石が使用されている。しかし盾塚古墳でみられたような、基底部に人頭大以上の石材が使用されたり、平積みされた基底石の存在は認められなかった。また大振りの石材で囲われた内に小振りの石材が充填されたような状況も、葺石の遺存する範囲においては認めることはできなかった。このように鞍塚古墳の葺石配置法の特徴を明確に捉えることはできなかったが、地山を削り出した墳丘面に厚さ5cmほどの褐色砂質土を貼り付け、その上に葺石が配されている状況が観察された。この方法は盾塚古墳においても認められており、葺石を固定するための共通した技法であったと考えられる。また、現状では墳丘第1段目においてのみしか葺石は遺存していないが、盾塚古墳と同じく本来は墳丘各斜面に配されていたとみられる。

なお削平のため埴輪列の存在は全く認められなかった。ただ、この点についても盾塚古墳の場合と同じく、各テラス面や墳丘頂部に埴輪列が存在した可能性は充分にある。

このように、墳形および墳丘規模について、新たな知見、あるいはこれまでの見解と異なる成果を幾つか得ることができた。ただ盾塚古墳と比べると削平が墳丘の下部にまで及んでいることから、盾塚古墳では部分的であるにせよ検出された第1段テラス面、墳丘第2段目、あるいは埴輪列などは本墳では全く認められなかった。このため後述するように、墳形復元についても、墳丘裾の形状を捉える以上のことはできなかった。

（2）出土の円筒埴輪

鞍塚古墳の周濠からは、普通円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪などが破片となって多量に出土した。しかし鞍塚古墳の場合は、盾塚古墳と異なり、普通円筒、形象埴輪にかかわらず樹立した状態では全く検出されなかった。さらに墳丘テラス面において埴輪を据えた掘方の存在も認められず、本来埴輪列をなしていたと推測される埴輪の出土状況も確認することができなかった。したがって、厳密にはこれらの埴輪の中から、本墳に本来樹立されていた埴輪を特定することはできない。

ただ、前方部とくびれ部の間や、周濠内でも比較的墳丘に近い地点で検出された埴輪の中には、共通する特徴を有する一群のものを見出すことができる。さらに、昭和30年の発掘調査時に検出された埴輪の中にもそれらと類似したものが存在する。しかもその一群は、埋葬施設の内外に納められた副

葬品から考えられるこの鞍塚古墳の築造時期とも矛盾しない特徴をもったものである。そこで、この一群の埴輪を、鞍塚古墳に樹立されていた埴輪と捉え、図示することにした。また破片が小さく、復元実測できないものについては拓影を載せた。

まずそれらの埴輪の特徴について列挙すると、

- 須恵質である
- 外面調整は1次タテハケかヘラケズリであり、内面調整はユビナデ・オサエが基本である
- 外面調整のハケメは6条／cmほどのやや粗めが上流である。また細くても7～8条／cmほどである
- 突帯は断面が台形を呈し、割合にしっかりしている
- 色調は内外面とも灰白色～淡褐灰色を呈する
- 胎土に長石・石英・チャートを含み、器質はやや粗い
- 器壁は比較的薄い

となる。ただし色調については、やや橙色味のあるものも一部含まれている可能性がある。

口縁部の形状についてみると、直線的に外傾したままのもの（28—2・4、30—3など）と折返し状に屈曲したもの（28—1・3、30—4など）の2種類があり、後者はさらに屈曲部分における長短がみられる。

いずれの口縁端部も丁寧にユビナデがなされ、28—2・6、30—1・4などのように外面の口縁部下にまでナデが及んでいるものもみられる。なお口縁部の形状と外面調整の違いとは対応関係にない。

底部の形状については、直線的に立上るもの（29—2・3など）と外傾するもの（28—9・10など）があり、後者の傾きには強弱がみられる。さらに底部端近くが内傾したもの（29—4など）や、端部が内側に肥厚したもの（31—1など）もみられ、これらは自重による変形と考えられる。こうした事例は、盾塚古墳の円筒埴輪の中にも存在が認められた。

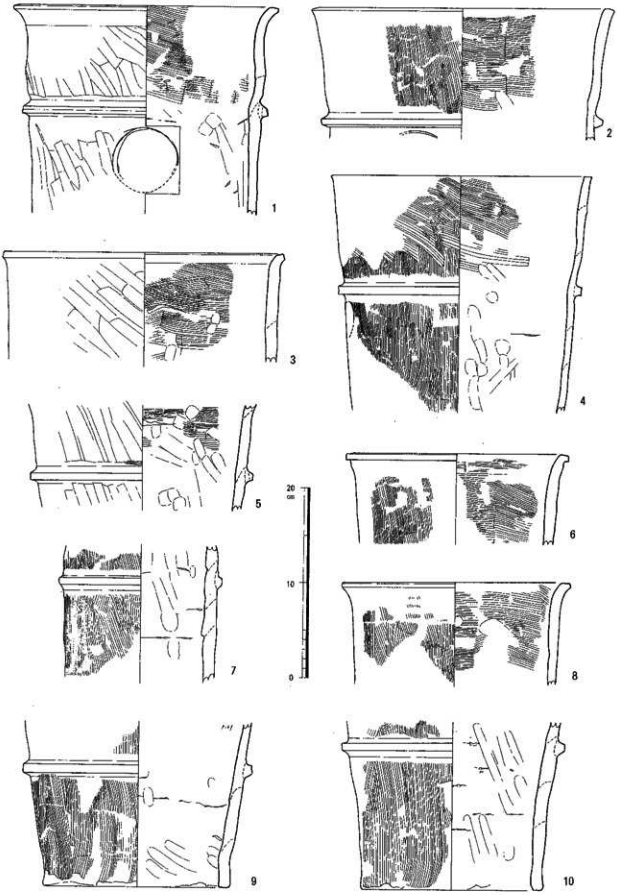
また31—3のように、底部近くの外面に上方から強くユビオサエが施されている資料もあり、ユビオサエの間で粘土の盛上りがみられる。底面はユビナデ、あるいはヘラナデの調整が割合丁寧に施されている。さらに粘土板の接合痕が残るものもあり、盾塚古墳の円筒埴輪でみられた状態と類似している。

以上の円筒埴輪の特徴は、底径20cmほどの小型品に関するものである。これは、共通的特徴を示した一群がその大きさのものであったからである。しかし周濠からは同時期とみられる大型品の破片も出土している。出土状況や資料のまとまりの点から大型品を個別に抽出することはできなかったが、昭和30年の墳丘調査時に出土した埴輪片も考慮に入れると、外面の2次調整にB種ヨコハケの施された須恵質の大型埴輪が鞍塚古墳に樹立されていた可能性は捨てられない。

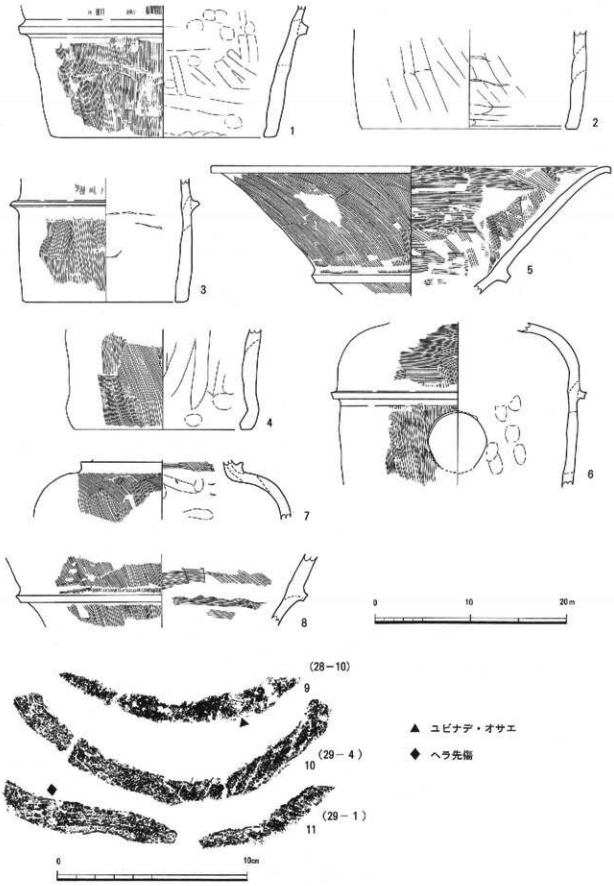
ただし、墳丘の大きさや出土した埴輪片の量などからすると、盾塚古墳と同じく墳丘各所を囲繞した円筒埴輪は小型品が主体であったと推測される。

また普通円筒埴輪と類似する色調や胎土、器質を示す朝顔形埴輪の破片も幾つか検出された（29—5～8）。そのうち口縁部については外傾の度合いの強いもの（29—5）とやや弱そうなもの（29—8）がみられる。また29—6では胴部の外面調整は1次タテハケのみである。

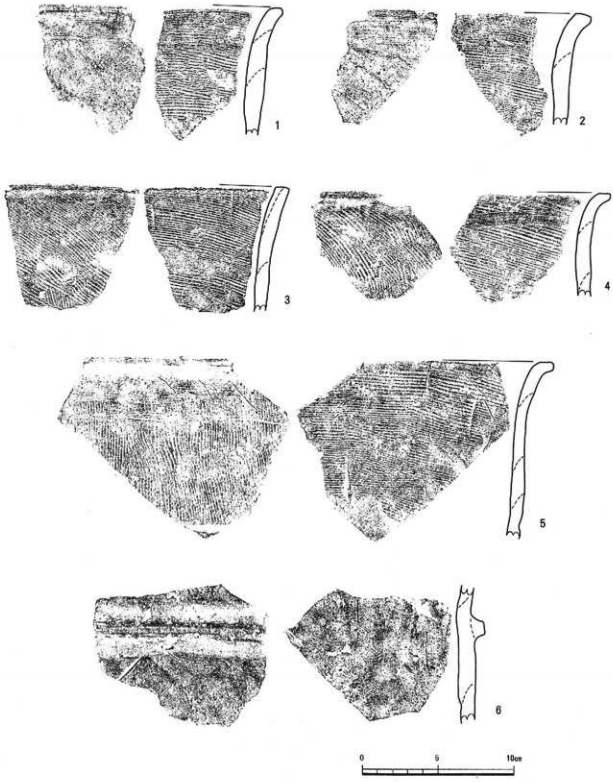
こうした朝顔形埴輪が普通円筒埴輪とともにどのような配列をなしていたかは不明であるが、鞍塚古墳に伴うとみられる破片の点数が普通円筒埴輪に比べて極めて少ないことから、埴輪列の要所にのみ樹立されていたのではなかろうか。



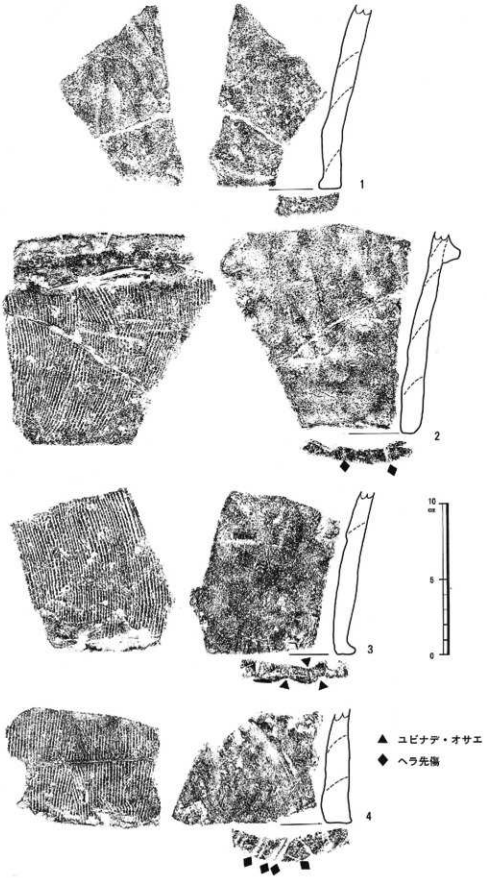
第28図　鞍塚古墳 周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪（1）



第29図　鞍塚古墳 周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪（2）・朝顔形埴輪、底部拓影



第30図　鞍塚古墳 周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪拓影（1）



第31図　鞍塚古墳 周濠出土の鞍塚古墳円筒埴輪拓影（2）

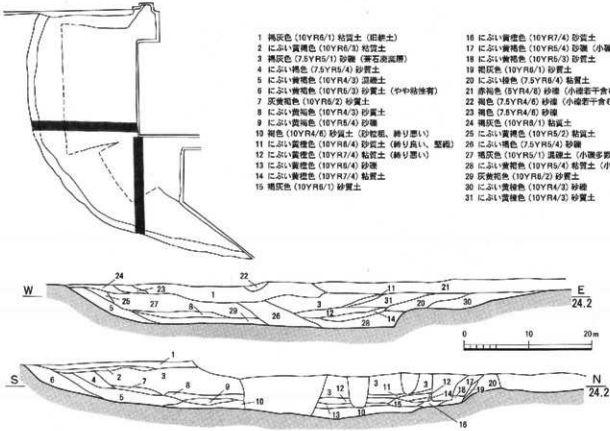
（3）周濠

周濠は前方部前面にあたる墳丘西側から造出部の南東にかけて、全体のおよそ4分の1の範囲を発掘した。隣接する盾塚古墳と類似した平面形態である。

周濠の下端間の幅は前方部前面で7.4m、同南隅で3m、造出部の南東隅で6mを測る。また1987・88年度に実施した後円部北側のトレンチ調査では、後円部と周濠外縁の距離は約6mを測る。現状の深さは検出面から0.7～1.0mである。周濠底には特別な掘込みなどは認められなかった。周濠外縁の立上り角度は20～35度であるが、立上りの中程から傾斜角度を強めて2段掘り状を呈する部分もみられた。

盾塚古墳では遺構の分布から外堤の存在する可能性が予測されたが、鞍塚古墳の場合、その可能性を暗示する遺構の分布状況はみられなかった。しかし墳丘や周濠の形状などが類似していることを考えると、外堤の存在を想定しても無稽ではあるまい。ただし、周濠の南側の一部は盾塚古墳とほぼ接しているとみられる状況から、外堤が存在したとすればその付近では盾塚古墳の外堤と重複することになろう。

周濠内の堆積土は観察箇所により細部が異なるが、大まかには周濠底上に10～30cm堆積する礫混じりの褐色砂質土（10層）・灰黄褐色砂質土（29層）・にぶい黄褐色粘質土（28層）、その上部にあり周濠内堆積土のかなりの部分を占める褐灰色砂礫層（3・27層）、そして最上層の褐灰色粘質土（1層）を基準的な層位とみることができよう。周濠底上の10・28・29層は葺石を混入しており、墳丘の崩落土とみられる。また層中には7世紀代の遺物も含まれている。3・27層は厚さ20～40cmほどで、人為的な葺石の廃棄が認められる。層中には中世の遺物が含まれている。この3・27層上には旧耕作土が載るが、部分的には間層が入る。盾塚古墳では中世の遺物を主体的に含む層の上に近世代の遺物を含む層が厚く堆積していたが、この鞍塚古墳ではそうした層を明瞭に認めることはできなかった。



第32図　鞍塚古墳 周濠内堆積土

（4）墳形の復元

1987•88年度の周濠確認調査と1995年度の前方部側を中心とした発掘調査により、鞍塚古墳の周濠と墳丘の輪郭についてはほぼ明らかとなった。そしてその成果をもとに1995年度調査の概要報告において、全長51m、後円部直径40m、前方部幅21mを測り、南側くびれ部に長さ７m、幅9.5mの造出部を有する帆立貝式前方後円墳との復元案が示された。

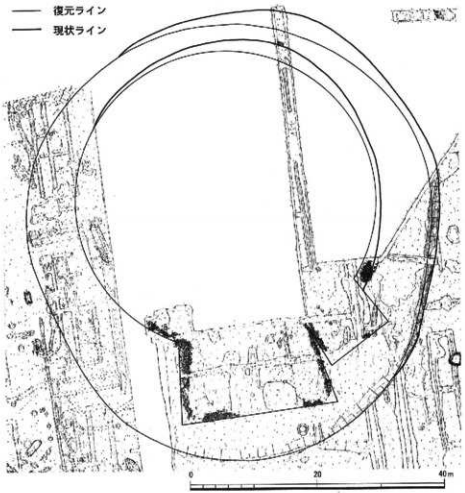
しかし、遺存状況が悪いため、墳裾の輪郭を捉えたということ以上の本墳の様相については、調査範囲の中では明らかにすることはできなかった。そしてこの復元案についても改めて検討を試みると、盾塚古墳の場合と同じく、現状と整合しない部分が生じていることが指摘できるのである。

まず周濠の輪郭についてみることにする。北側で確認された状況を墳丘主軸で反転させると、南側では現状より内寄りに位置することになる。このことから、周濠は東から南にかけてやや開き気味に巡っていたと考えられる。

こうした状況は後円部の輪郭についてもいえる。主軸を挟んだ墳丘の南北を比べると、南半で墳丘が大きくなっている。このため、北側で捉えられた状況を反転して南側にあてはめると、復元ラインが現状の墳裾よりも２m近く内に入り込むことになる。同様の状況が盾塚古墳についてもみられたが、この鞍塚古墳においても、墳丘の南北で円周が若干異なっているとみられ、本来からやや不整な円形であったのであろう。

前方部前面の両隅については、削平が及んでいるため形状が判然とせず、復元案のように隅部が鋭角であったのか、それとも葺石の遺存状況にみられるように若干内傾気味であったのかは不明である。

なお昭和30年の調査時に測量された墳丘の高さは、地表面から墳頂部まで５m、墳頂部縁辺までは4.5mであった。この高さは、盾塚古墳と比べると１m低いが、墳丘規模全体からみるとほぼ比例したものといえる。よって盾塚古墳との墳丘規格の類似性からすると、この鞍塚古墳も後円部は３段築成ではなかったかと推測される。



第33図　鞍塚古墳 墳形復元

（5）周濠内遺物

鞍塚古墳の周濠からも埴輪片をはじめ、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器・瓦などの破片が出土した。埴輪と同様、土師器と須恵器もその出土量は多いが、ほとんどが完形にならないものであった。また、破損の著しいものが多い点は、他の遺物においても同様である。

このように周濠内出土の遺物は、古墳時代から近世にまで及んでいる。さらに盾塚古墳と同様、客土中に含まれていた供給元が不明な遺物も多いとみられる。

また、時代により周濠内堆積土の層位を大別できるとはいえ、周濠内において上層からの掘込みとそれに伴う遺物の転落の可能性があるのは先述の盾塚古墳の場合と同じであり、周濠底上の遺物といえども本墳に伴うものであるかどうかは明確ではない。したがって、先に図示した円筒・朝顔形埴輪を除くと、この鞍塚古墳の築造時期と等しい遺物であっても、本来本墳に伴っていたものを個別に推測することは難しいのが実状である。

しかしまた、その中でも形象埴輪については、盾塚古墳の場合と同じく、その存在自体の有意性は高いと考えている。そこで、この鞍塚古墳でも、周濠から出土した遺物の中から特徴的な形象埴輪について図示した。

ところで、盾塚古墳に比べ、発掘された周濠の面積が狭いという点はあるものの、鞍塚古墳から出土した形象埴輪の破片数は少ない。本書では11点を図示したが、図化可能な資料に限れば総数でも20数点ほどの量でしかない。一方、円筒埴輪の破片量は盾塚古墳と比べた場合、調査面積の広さに対応しているといってよく、周濠堆積土内の埴輪の混入比は両墳において類似している。したがって形象埴輪の破片が少ないという事実は、本墳に樹立されていた形象埴輪が本来少なかったことを反映しているといえるかも知れない。

図示した11点の埴輪はいずれも1995年度調査により出土したものである。

34—1は鶏形埴輪の頸部である。ヘラ描きにより輪状の筋が施され、現状で6条確認できる。また縦位のハケメが顕著に残っている。

34—2・6は盾形埴輪と考えられる。ともに複合鋸歯文が施されているが、34—2では鋸歯文内が組紐状となった部分もみられる。

34—3は残存する形状から肩甲の可能性が考えられる。ヘラで縦方向に線描きされており、方形板を表現したものであろう。

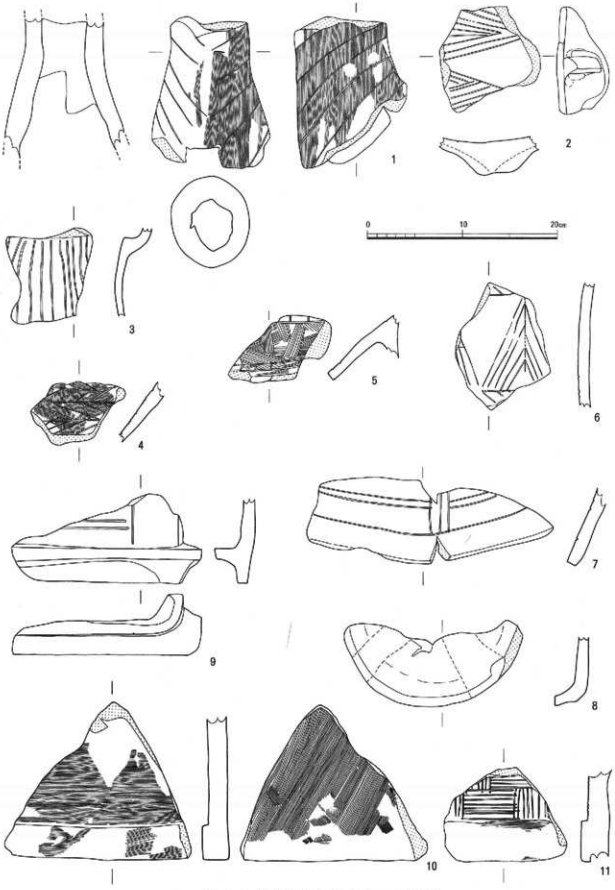
34—4・5は草摺形埴輪と考えられる。34—4には綾杉文が施されており、また34—5には梯子状の格子文がみられる。

34—7・8は衣蓋形埴輪である。そのうち後者は軸受と接合する立飾りの基部であり、立飾り自体が本来付けられていた部分での剥離痕が2箇所でみられる。

34—9は家形埴輪と考えられる。棟廻りの部分であり、破風り突帯は明瞭に突起している。壁にヘラ描による文様が施されているが、網代文にはならないようである。

34—10・11も家形埴輪と考えられるが、前者は囲形埴輪の可能性もある。また34—10は外面調整の細かなハケメがほぼ一面に残っているが、34—11では外面調整になされたハケメのほか、網代文も施されている。

なお、これらの形象埴輪のうち、色調や胎土の状況が鞍塚古墳に樹立されていた円筒埴輪と類似しているものは認められなかった。



第34図　鞍塚古墳 周濠出土の形象埴輪

第5節　助太山古墳の調査成果

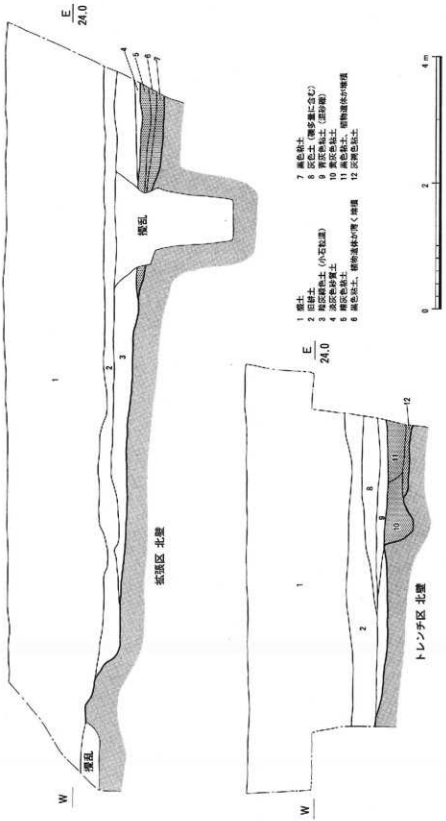
(1) 調査成果の概要

三ツ塚古墳と称される東西一列に並ぶ3基の方墳のうち西に位置する助太山古墳は現状での墳丘規模が1辺36mを測る。他の2基はともに1辺50mほどの規模であることから、本墳はひとまわり小さいことになる。

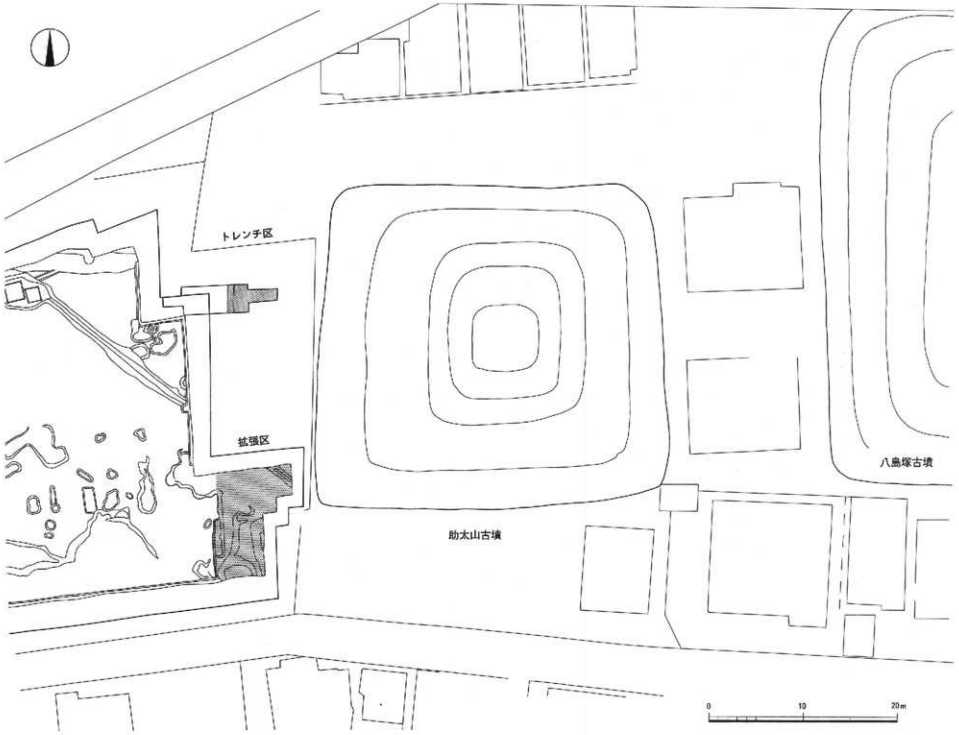
この3基は周濠を共有しているとみられ、墳丘の南辺をほぼ揃えている。これに対して北辺はこの助太山古墳が小さい分だけ並びが不揃いとなっており、周濠の北側縁辺は助太山古墳の部分だけ南に寄っている。

また、助太山古墳の墳頂部には凝灰岩の巨石が露出している。これを横口式石槨の天井石であるとする見解もあるが、詳細については不明である。さらにこの助太山古墳が他の2基と同時期に構築されたものか、あるいは後出するものかについても見解は分かれている。

ところで、この助太山古墳は墳丘部分が国史跡に指定されているが、周濠部分は指定を受けていない。この周濠の一部が府営道明寺南住宅地区に延びているとみられることから、その範囲確認が1987年度の調査において実施された。



第35図　助太山古墳 周濠内堆積土



第36図　助太山古墳　調査区全体

確認調査は、I区の南東隅を拡張するとともに、北方にもトレンチを設けて、助太山古墳の周濠を一部検出した。

トレンチ区では、現状の墳丘裾から西10mほどの地点で地山の立上りが検出された。立上りの高さは0.35mほどであるが、その位置からみて周濠の外縁と考えられる。立上りは直線的であり、傾斜角度は強い。周濠内の覆土は植物遺体を含む黒色粘土を基調としており、そのほか外縁寄りに黄灰色粘土、周濠底上に灰褐色粘土がそれぞれ認められた。

一方拡張区では、近世以降の改変のため、平面的にも、土層断面からも周濠を捉えることは難しい状況にあったが、拡張区北壁東寄りの地表面下2.2m以下で、周濠内覆土とみられる堆積層を認めることができた。その堆積層は、暗灰色粘土、黒色粘土からなり、黒色粘土の上半には植物遺体が含まれていた。また下半からは埴輪、土師器、須恵器が数点出土した。これらの層の上に堆積する小石粒混じりの暗灰緑色土や淡灰色砂質土には近世以降の陶器・磁器が包含されている。この層と本来の周濠内堆積土との間は、ほぼ水平に分層することができる。したがって、本来の周濠内堆積土とみられる層が検出されなかった拡張区西半については、近世以降の改変を受けている可能性が高く、さらにその範囲でみられる周濠の平面的・断面的な形状もまた2次的なものであると考えられる。

本来の周濠内堆積土が認められるのは、拡張区の東端から3mほどの間である。したがって上述したように現状の立上り付近はすでに改変を受けていることから、本来の周濠の外縁を明かにすることは難しい。ただ幾つかの予測はできよう。その位置については、拡張区南半の西辺が直線的に延びていることを手掛かりに、そこに求めることができるかも知れない。しかし、トレンチ区で検出された周濠外縁よりもさらに西方に広がり気味となる。

逆に、拡張区で捉えられた周濠西側の外縁の直線的な形状もまた近世以降の改変によるのならば、本来の周濠はこの直線的な部分よりもさらに墳丘側にあるとみることもできよう。また、墳丘裾を現状部分でしか捉えられないことから、裾と周濠との形状比較ができないが、裾の形状と周濠が必ずしも相似形をなさないのならば、周濠西側の南半が膨らみ気味であったとすることも可能であろう。

トレンチ区および拡張区で検出された周濠の底面は、いずれも比較的水平に近い。しかしながら、2次的改変を受けていないとみられる範囲においては若干の起伏が認められる。よって、本来的に多少の凹凸のある周濠底であったとみられる。

なお、周濠周辺にあたる西側の調査区において、外堤など周濠に付設された構造物の痕跡は全くみられなかった。それのみならず、遺構の分布も極めて希薄であり、周濠より西側約30m間では埴輪棺墓3基、土壙墓1基、木棺墓1基のほか土坑と小穴5基がややまとまって存在しているだけであった。したがって、古墳に直接関わるとみられる遺構の痕跡は認められなかったが、この空隙地帯の存在が助太山古墳、あるいは三ツ塚古墳全体と結び付けられるとすれば、一定の兆域があったと推定できるかも知れない。

（2）周濠内出土遺物

トレンチ区および拡張区からは近世以降の陶器・磁器をはじめ、土師器、須恵器、瓦などの遺物がコンテナ2箱分出土した。既述したように近世以降の削平が周濠の過半に及んでいることもあって、本古墳との関係が考えられる遺物は不明瞭である。

ただし、周濠底上の堆積土には僅かではあるが、土師器、須恵器および埴輪の破片が包含されており、この助太山古墳に本来伴うもの、あるいは比較的早い段階で周濠内に埋没したものである可能性

を示している。

しかし、そのうちでも図化できるものは非常に少なく、円筒埴輪2点および土師器、須恵器各1点を図示したにすぎない。

37—1は須恵器の長頸壺の頸部破片とみられる。器面調整は内外面とも回転ユビナデを基調としているが、内面には縦方向のユビナデもみられる。

37—2は土師器の杯である。復元により全形を捉えることができ、口径9.6cm、器高4.5cmを測るとみられる。口縁部は外方に僅かに屈曲している。外面調整にはユビナデがなされ、底部にはヘラケズリが施されている。

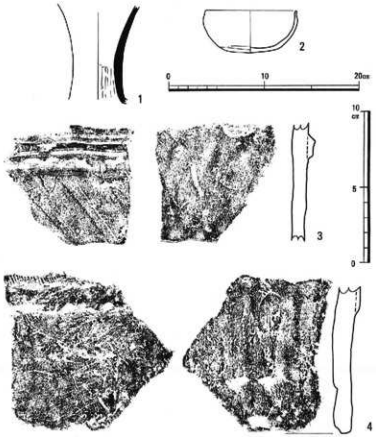
37—3・4は円筒埴輪の破片である。ともに小破片のため、図化復元することができず、拓影のみを掲載した。

37—3は須恵質である。外面調整は1次タテハケのみが認められる。ハケメは、実際には斜位に近いものである。また比較的強めに施されている。ハケメは13〜14条／cmを数え、やや細かい。内面調整にはユビナデが施されている。突帯が遺存しており、その断面は低い台形を呈している。突帯の上下にはユビナデが加えられている。

37—4も須恵質である。外面が摩滅しており、器面調整はやや不鮮明になっている。しかし、外面調整については明かに1次タテハケのみであると捉えられる。またハケメは5条／cmであり、37—3に比べると粗い。内面調整には縦方向のユビナデが施されており、底部近くにはさらにヘラケズリが加えられている。また突帯の一部が僅かに遺存しているが、その状態から、極めて低いものであるとみられる。

これらの遺物のうち、土師器と埴輪については、それぞれの特徴から、いずれも6世紀代にその時期を求めることが可能と考える。また須恵器についても、その時期に比定したとしても矛盾することはなかろう。したがって、少なくとも6世紀代には周濠の埋没は始まっていたといえる。

さらに加えるなら、周濠底上の堆積土中に5世紀代の遺物が認められない事実は、この助太山古墳の構築が5世紀代にはなかった可能性を示すものとみることもでき、三ツ塚古墳の築造時期を考える上で重要な手掛かりとなる。



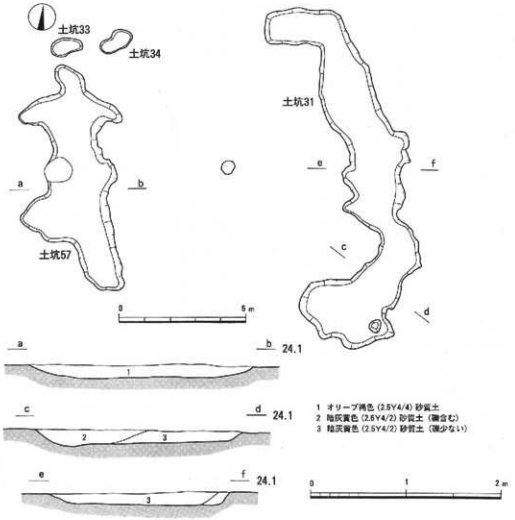
第37図　助太山古墳 周濠内出土遺物、拓影

第6節　小型方墳の調査

府営道明寺南住宅地区では小型方墳が3基検出されている。うち1基はⅡ区で検出された溝3を周濠とするもので、これについては第9節で詳細を報告する。ここでは調査概要報告時に方墳と捉えられていた2基について記述する。

1基はⅣ区で検出された（第38図）。墳丘は完全に削平され、埋葬施設や副葬品、墳丘外表施設などについては不明である。しかも周濠は東西両辺と北辺の一部が検出されたのみで、南辺については南東隅が一部認められたにすぎない。現状の幅は1～4m、深さは10～20cmを留める。周濠の遺存状況、特に東辺の南北両端が鍵手状に屈曲する状況から、古墳は1辺9mの規模と考えられる。

覆土は3層に区分され、いずれも砂質土である。覆土内から土師器、須恵器、埴輪、黒色土器、瓦が出土した。いずれも小破片である上、古墳時代のみならず飛鳥～平安時代までの遺物も包含しているため、本墳に本来伴う遺物を特定することはできなかった。したがって本墳の築造時期は不明である。また埴輪の樹立の有無についても明らかでない。なお、墳丘の中心にあたる位置に後述する火葬墓1基が設けられていた。古墳の墳丘を利用して設けられたと考えられることから8世紀後葉頃まで



第38図　小型方墳（Ⅳ区）

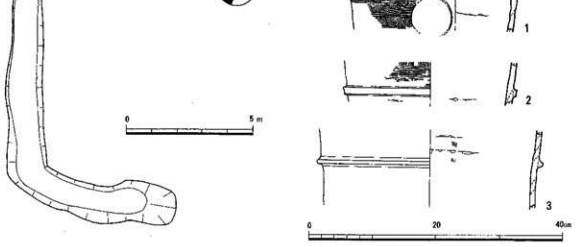
は墳丘は一定の形状を保っていたのではないかとみられる。さらに周濠出土遺物に黒色土器が認められることから、周濠の完全な埋没は平安時代以降であったとみられる。

もう1基はV区で検出された（第39図）。本墳も上部が著しく削平されているため墳丘は全く遺存せず、埋葬施設や副葬品、墳丘外表施設などについては不明である。周濠は地形が低い西半のみが検出された。この周濠西辺の長さは12m、幅1.5mほどを測り、北・南両端が鍵手状に屈曲している。残存する深さは20～40cmほどである。方墳規模は一辺10mほどと捉えられる。なお墳丘本来の状況が不明なため、周濠が全周していたか、あるいは途切れた部分があったかは不明である。

周濠内からは円筒埴輪の破片が出土している。主に5世紀中葉に比定できるものであり、本墳に伴うとしても矛盾はないが、上部の著しい削平状況を考えると混入の可能性も捨てきれない。この方墳の時期を考える手掛かりとして、周濠北辺に重複して位置する土壙墓がある。

この土壙墓については第8節で詳細を報告するが、土壙墓内に円筒埴輪片で蓋をした土師器甕が副葬されていた。土師器甕は布留式土器の新しい様相を有しており、5世紀中葉に時期比定できる。埴輪片の時期もこれに矛盾しないことから、土壙墓もその時期であると考えられる。周濠とこの土壙墓との切り合い関係は判別しがたかったが、位置関係から土壙墓が後出するものとみられ、よって方墳は5世紀中葉以前に築造されていたと考えられる。ただ結論的にいえば、土壙墓と周濠出土埴輪の間で大きな時期差は認められないことから、方墳の時期も当該期の可能性は捨象できない。しかし上述のように埴輪が本墳に確実に伴うかは不明である上、周濠内がどれほど埋没した後に土壙墓が形成されたかも不明であるため、方墳の築造時期をこれ以上特定することは難しい。

なおⅠ、Ⅲ区の間で藤井寺市教育委員会が発掘調査（HJ91－3）を実施し、5世紀後半代に比定される一辺12mほどの方墳を検出している。今述べた2基と後述する溝3を周濠とする1基にこれを加えると、府営道明寺南住宅地区では一辺10m前後の方墳が4基検出されたことになる。しかもそれらの分布は散在的であり、密集形態をとる方墳群とは性格を異にする可能性を示している。



第39図　小型方墳（V区）、周濠出土円筒埴輪

第7節　埴輪棺墓の調査

土師の里遺跡を最も特徴付ける遺構である埴輪を棺に使用した埋葬（以下煩を避けるために埴輪棺墓と称す）はすべての調査区で検出されている。しかもⅠ～Ⅴ区合わせて30基に及んでいることから、府営道明寺南住宅地区周辺が墓域であったことは明らかである。さらに後述するように木棺墓、土壙墓、土器棺墓なども存在しており、墓域としての性格をいっそう確実なものとしている。

各調査区ごとの埴輪棺墓数はⅠ区5基、Ⅱ区7基、Ⅲ区11基、Ⅳ区5基、Ⅴ区2基である。これらは各調査区内において均等に分散しているのではなく、Ⅰ区では調査区の東西両端部に、Ⅱ区では調査区北半部、Ⅲ区では調査区西半部、Ⅳ区では西半にしかない。この5つの調査区の範囲の中央には北に鞍塚古墳、南に盾塚古墳が所在し、さらにⅠ区の東には助太山古墳がある。各調査区の埴輪棺墓の分布を通観すると、それは今述べた各古墳周辺に位置している状況が看取されるのである。ただⅢ区東半は比高差1.2mの谷状地形となっていて、西半に比べると湿潤である。またⅣ区東半では、中世以降の遺構が多く存在していることから、その構築にともなって埴輪棺墓が壊されたために検出できなかった可能性もある。このように地形的制約があったり後世の改変の可能性など、墳輪棺墓の分布を読み取る上で不確定要素が存在していることは否めないが、埴輪棺墓が古墳の周囲に集まる傾向は否定できない。

なお府営道明寺南住宅地区の周辺でも過去に発掘調査が実施されており、大阪府教育委員会の調査としては78－6区、79－14区、80－11・12区、81－8区、83－3区、85－6区などがある。このうち80－11・12区はⅢ区東半と同様の谷状地形にあたっている。しかし他の調査区では地形的な制約はないとみられるにもかかわらず、いずれにあっても埋葬施設は検出されていない。したがって古墳との関わりの有無をおくとしても墓域の範囲は明確に限定されていたと考えられる。ただし、そうした空間的規制はあったとしても以下の各埴輪棺墓の説明において示すように、構造などに明瞭な規則性はみられない。これは構築の時期が異なっていることに一因があると考えられるが、血縁関係などの系統性による可能性もあろう。

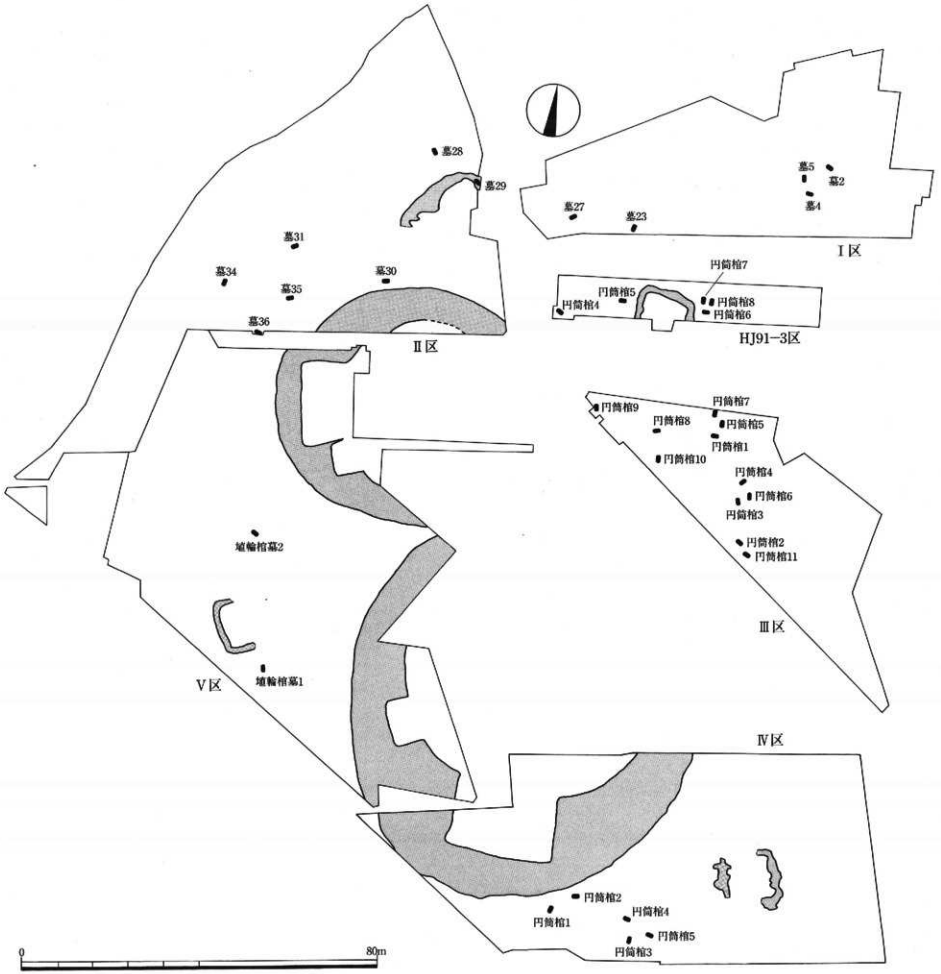
以下、各埴輪棺墓について報告する。

Ⅰ区・墓2／／埴輪棺墓（第41・42図）

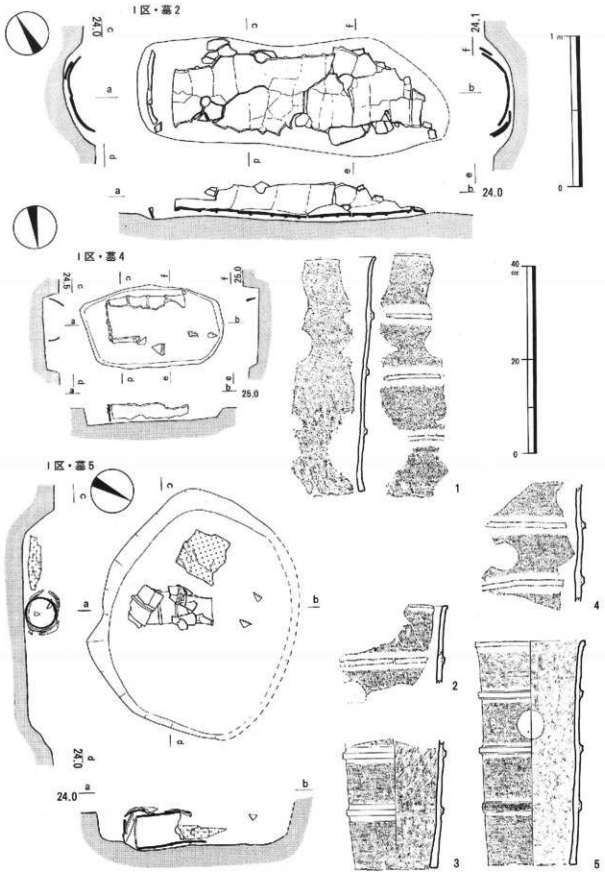
本埴輪棺墓は上部および東小口部が削平されている。掘方の規模は、長さが現状1.9m、最大幅0.8m、深さは最大17cmを測るにすぎない。平面形は隅丸長方形を呈し、上軸は北西－南東方向である。底面は東から西に向かって低くなり、東西両端部の高低差は5cmほどである。

掘方内には口縁部から底部まで残る全長1.6mほどの円筒埴輪1個体を棺身として置いている。棺身は口縁部を西に向けているが、口径57.5cm、底径は62.5cmであることから、掘方の広狭差は棺となる円筒埴輪の開きと対応している。西小口部は朝顔形埴輪の口縁部破片をもって閉塞している。また棺身本体の透孔を塞ぐために、別個体の円筒埴輪片が掘方と本体との間に挟み込まれていた。副葬品はなく、人骨も出土しなかったが、掘方底の傾斜や掘方および棺身の両小口部の広狭差からみて被葬者は東頭位と考えられる。

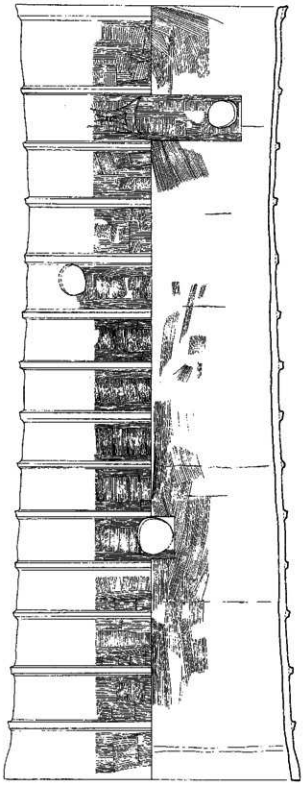
棺身に使用された42－1は全長162cmの大型円筒埴輪である。突帯は13条を数え、透孔は口縁部から2、5、10段目にある。口縁部は貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケが施されている。口縁部から第4突帯までの突帯間は調整が1段であるが、それより下は突帯間2段の調整である。またヨコハケの条線にも違いがあり第4突帯までは4～5条／cm、それより下は10条／cmで、上部の調整が概して粗い。内面調整はタテ・ナナメハケのちナデが施されている。第2



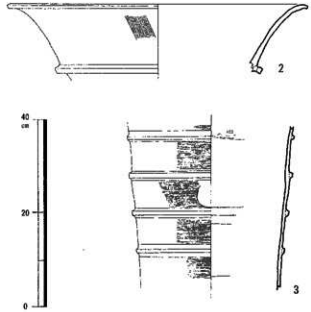
第40図　埴輪棺墓の分布



第41図　Ⅰ区 墓2・墓4・墓5、構成埴輪



第42図　Ⅰ区 墓２構成埴輪



段目にヘラ描が認められる。棺身透孔の閉塞に用いられた42－３は現存長39cmを測る円筒埴輪である。口縁部と底部が欠落している。外面調整は１次タテハケ、２次ヨコハケである。ヨコハケについては現存破片中に静止痕を認めることはできない。各突帯間とも１次調整のタテハケが消されきれず露われている。

Ⅰ区・墓４／／埴輪棺墓（第41図）

本埴輪棺墓は上面が著しく削平されている。掘方の規模は長さ約0.9m、幅は0.55m、深さは６cmほどが遺存しているにすぎない。平面は隅丸方形を呈し、主軸は東－西方向である。掘方の底面は西から東に向かって僅かに下降しており、東西両端部の比高差は３cm程度である。

掘方内には縦割りにした円筒埴輪の破片が並べられている。西小口部と北側辺の西半を欠いているが、埴輪片を方形に配し、長さ0.5m、幅0.25mほどの空間を作り出していたとみられる。この構造は棺というより槨と呼ぶのが適当である。槨を形成する円筒埴輪片は同一個体とみられる。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方底面の傾斜に沿って槨も傾斜していることから、被葬者は西頭位であったとみられる。また埋葬空間が狭いことから、改葬墓あるいは小児棺などの可能性がある。

棺に使用された41－1は全長50cm弱の円筒埴輪である。底部から開き気味に立上り、口縁部でさらに外傾を強める。突帯は3条を数え、2段目に円形の透孔が認められる。外面調整は最下位の4段目が1次タテハケのみであるが、それより上はタテハケのちB種ヨコハケが施されている。ただし1次調整のタテハケは2次調整によっても消しきれてなく、顕著に残存している。内面調整はヨコハケのちユビナデである。

I区・墓5／／埴輪棺墓（第41図）

本埴輪棺墓は北半部が削平されている。掘方の規模は長さ1.6m、幅1.2m以上、深さは現状15～25cmである。削平のため北半の形状は不明瞭であるが、平面は不整な円形を呈するとみられ、主軸は東－西方向である。掘方底面は南端部が1段掘り残されているが、他の部分はほぼ平坦で水平である。

上部および北半が大きく削平されているため、棺身の北側部分が欠失している。掘方の規模からすると、棺身は2個体の円筒埴輪を組合わせていたと推定されるが、現状では円筒埴輪1個体のみを検出したに留まる。ただ掘方の北側の底面が立上り始めている状況からすると、棺身全体は長くても0.85mほどと考えられる。南小口部は円筒埴輪片を立てて閉塞している。また棺身の西で板石が1点出土したが、その性格については不明である。副葬品や人骨は出土しなかった。被葬者の頭位方向は不明である。

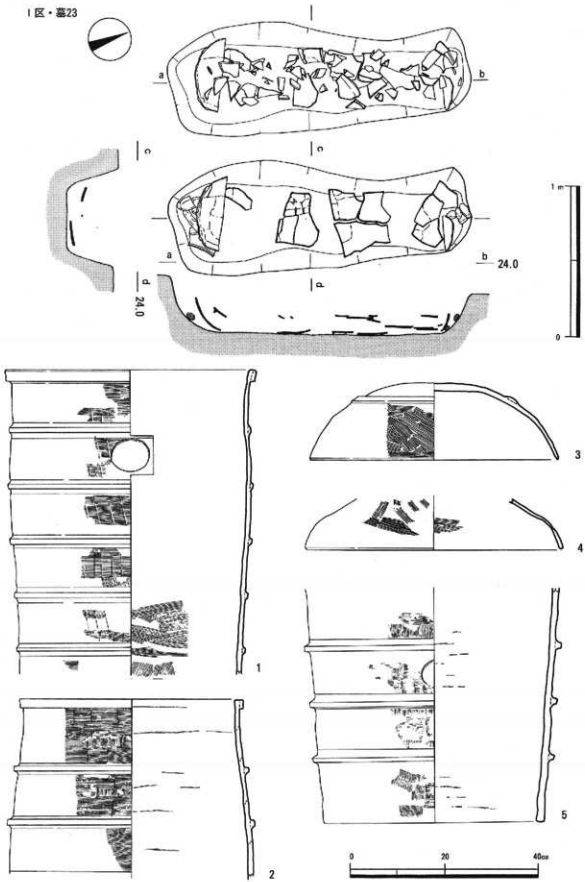
棺身に使用された41－5は全長47cmの円筒埴輪である。底部から緩やかに開いて立上り、口縁部は外方に若干屈曲する。突帯は3条を数え、器高の割りにやや幅広である。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケを2段に分けて施している。内面調整はタテハケのちヨコナデ。南小口部を閉塞するために用いられた3点の円筒埴輪（41－2～4）は、いずれの外面調整もタテハケのちB種ヨコハケである。しかも、41－3の最下段を除くとヨコハケは突帯間に1段である。

I区・墓23／／埴輪棺墓（第43図）

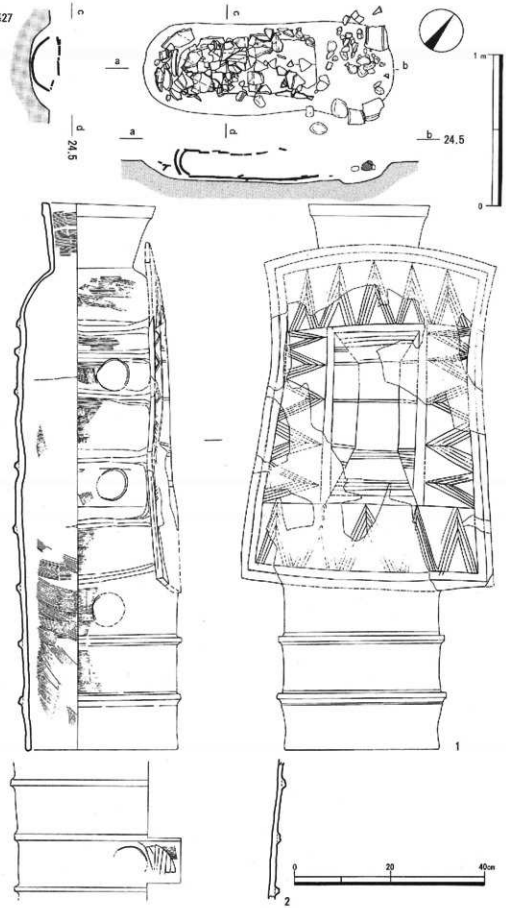
本埴輪棺墓は遺存状況が比較的良好である。掘方の規模は長さ2.0m、幅は最大0.75m、深さは28～38cm遺存している。平面は隅丸長方形を呈し、主軸は北－南方向である。掘方の底面はほぼ平坦かつ水平である。

本埴輪棺墓は通有の埴輪棺墓と異なり、ひとつの円筒埴輪を1片20～40cmの破片にし、内面を上にして掘方底面に並べている。両小口部には特製とみられる笠形埴輪を内向けに立てて閉塞している。笠形埴輪間の距離はおよそ1.4mである。また掘方底面に敷かれた埴輪より高い位置でも埴輪片が散在している。これらの埴輪は掘方底面に敷かれたものとは別個体である。こうした埴輪片の状況からすると、木棺が存在し、その上に埴輪片が置かれた可能性が考えられる。したがって、この墓23も棺ではなく槨と呼ぶのが妥当であろう。また木棺は、両小口部に笠形埴輪を閉塞用に据えていることからすると組合式ではなく小口部まで刳抜かれた割竹形ではないかと推測される。副葬品、人骨は出土しなかった。被葬者の頭位方向も不明である。

43－1は掘方底面に並べられた円筒埴輪である。口縁部以下6段まで遺存している。口縁部は貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケである。このB種ヨコハケは突帯間によって1段と2段の場合があり、2・3・5段目では静止痕が斜行しているのが顕著に認められる。内面調整はナナメハケのちユビナデである。また、掘方底面上の埴輪片より高い位置で出土した埴輪片には43－2・5がある。外面調整はともにタテハケのちB種ヨコハケである。このうち43－2では突帯間のヨコハケは1段の場合と2段の場合がある。内面は43－2・5ともにユビナデにより調整されている。43－3は南小口部、43－4は北小口部の閉塞に使用された笠形埴輪である。43－3は口径



第43図　Ⅰ区 墓23、構成墳輪



第44図　Ⅰ区 墓27、構成埴輪

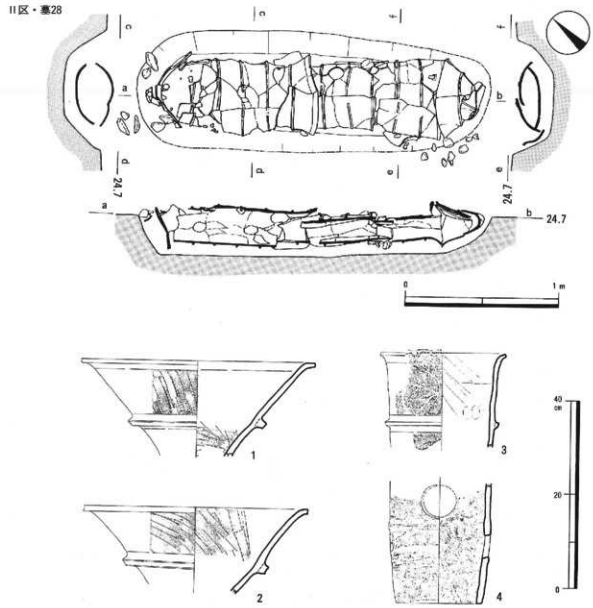
52.6cm、高さ16.4cmを測り、頂部近くに突帯を1条巡らせている。43－4は頂部が失われており、現高は11.6cmである。しかし口径は54.6cmを測り、43－3とほぼ等しく、口縁部から頂部への立上り具合も似ていることから、両者は同様の形状であったと推察される。なお、Ⅲ区・円筒棺6でも小口部閉塞に笠形埴輪が使用されていたが、それとは体部の立上り具合が異なっている。

Ⅰ区・墓27／／埴輪棺墓（第44図）

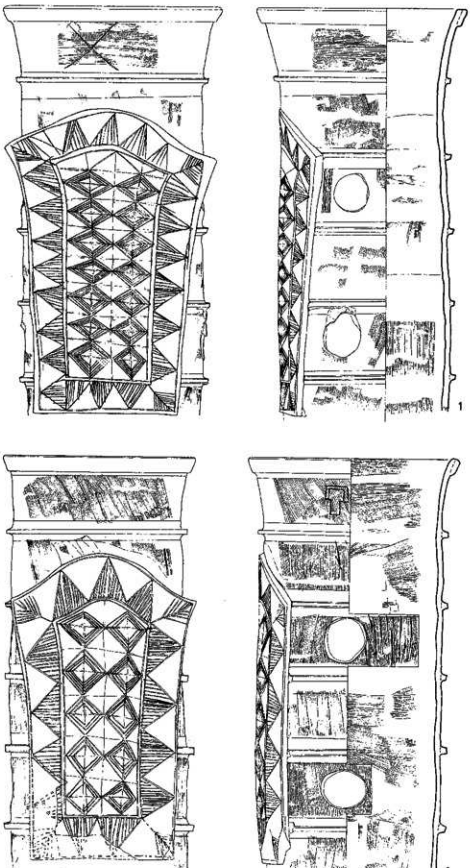
本埴輪棺墓は上部および東側部分が削平されている。掘方の規模は推定長1.6m、幅0.6m、深さは18cmほどが遺存している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸は北東－南西方向である。掘方の東側が攪乱されているため判然としないが、底面は西半に比べ東半が高くなっているようである。

掘方には棺身として盾形埴輪が盾面を上に、底部を東にして置かれている。掘方の東側では棺身となる埴輪は検出されていないが、盾形埴輪の東に別の埴輪が棺身として存在していた可能性は高い。また、西小口部は別の円筒埴輪の破片を立てて閉塞している。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方底面の傾斜から、被葬者は東頭位の可能性が考えられる。

44－1は棺身に使用された盾形埴輪である。盾面の上部および下部の大半を欠失しているが、類例



第45図　Ⅱ区 墓28、構成埴輪（1）



第46図　II区 墓28構成埴輪（2）

からみて、上辺がかるい山形をなす形状と考えられる。盾面外縁に沿うように2条の沈線を施した内側に2条の沈線で方形を描き、盾面を内外2区画に分ける。外区画には上・下が上向きの、左・右には内向きの複線による鋸歯文を描いている。内区画には盾文様とその内外に2～4条からなる平行線を施している。円筒部は全長91cmを測り、体部から口縁部にかけて肩を有してすぼまる。体部の外面調整はタテハケのちB種ヨコハケ、内面調整はナナメハケのちユビナデである。44－2は西小口部の閉塞に使用された円筒埴輪である。摩耗のため器面調整は不鮮明であるが、B種ヨコハケが2次調整として施されているように観察される。また、透孔の脇にヘラ描がみられる。

II区・墓28／／埴輪棺墓（第45・46図）

本埴輪棺墓は遺存状況が良好であった。掘方の規模は長さ2.3m、幅0.8mである。遺存状況はよく、棺身の上部まで残っており、掘方の深さも55～60cmを測る。平面形は隅丸長方形であり、主軸は北西－南東方向である。掘方底面は平坦であり、西に向かって緩やかに低くなっているが、両端部の比高差は2cmと僅かである。

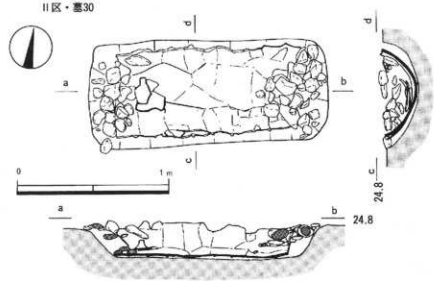
棺身は底部を欠いた盾形埴輪2個体からなる。盾面を下にし、東棺身の底部側と西棺身の口縁部を合口にして構成されている。東・西小口部はともに朝顔形埴輪の口縁部を内向きにして閉塞している。東小口部閉塞の朝顔形埴輪の頸部は円筒埴輪片で覆われ、しかも、盾形埴輪の透孔も円筒埴輪の破片で塞がれているなど、極めて丁寧な構造である。一方西小口部については朝顔形埴輪の上部が削平されているため、埴輪片でさらに塞がれていたかは不明である。棺身は掘方底面に沿って西に僅かに下降している。したがって、人骨や副葬品は出土しなかったが、被葬者は東頭位と考えられる。

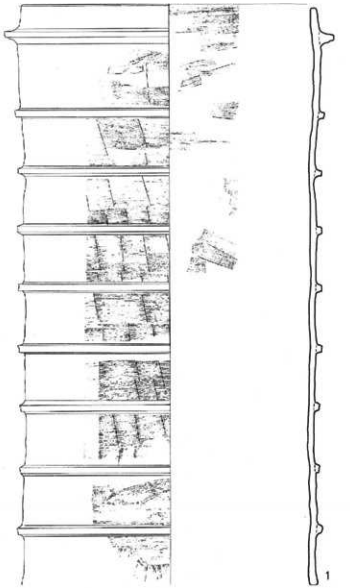
46－1は棺身の西半に用いられた盾形埴輪である。盾面は上半が緩やかな山形を呈する。外縁に沿った1条の沈線で縁取りし、内側に2条の沈線を相似に描いて盾面を内外に分け、外側には縦線で埋められた外向きの鋸歯文が巡り、内側には複線の菱形格子文が施されている。円筒部は第6段目から底部にかけて欠かれており、現存長88cmを測る。口縁部は粘土帯の貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケを基調とし、部分的にヨコハケが加えられている。第1段目にはヘラ描が認められる。46－2は棺身の東半に用いられた盾形埴輪である。46－1と同様円筒部の第6段目以下が欠かれ、現長90cmを測る。盾面と円筒部の形状および盾面の文様は46－1とほぼ等しい。外面調整はタテハケのみである。なお、第1段目にヘラ描が施されている。45－1は西小口部、45－2は東小口部の閉塞のために使用された朝顔形埴輪である。前者は口径49.0cm、現長20cm、後者は口径46.7cm、現長20cmで、45－1の方がやや傾きが強いが、ともによく似た形状である。45－4は東小口部の朝顔形埴輪の頸部を覆っていた円筒埴輪である。底径17.7cmの小型品で、外面調整は1次タテハケのみである。45－3は東棺身の透孔を塞いでいた円筒埴輪である。口径26.0cmで、これも小型品である。外面調整は1次タテハケのみで、突帯は台形を呈する。第1段目にヘラ描が認められる。

II区・墓29／／埴輪棺墓（第52図）

この埴輪棺墓は第9節で報告する溝3の覆土を切り込んで設けられている。溝3は小型方墳の周濠の可能性が高く、古墳の周濠およびそこに設置された埴輪棺墓という関係が考えられる。II区で検出した掘方の現状の長さは約1.55m、最大幅1.0mを測る。また第11節で述べるように、隣接する90－①・⑤区の調査で本埴輪棺墓の東半部を検出しており、それを加えると埴輪棺墓全体の長さは推定3.7m程度となる。掘方の平面形は隅丸長方形で、主軸は北西－南東方向である。

棺身には底径46.0cmの円筒埴輪を用い、底部を小口部方向にし、やや上方に傾けて横臥させている。小口部には笠部径70cmを測る大型の衣蓋形埴輪を使用している。衣蓋形埴輪の基部を円筒埴輪の底部

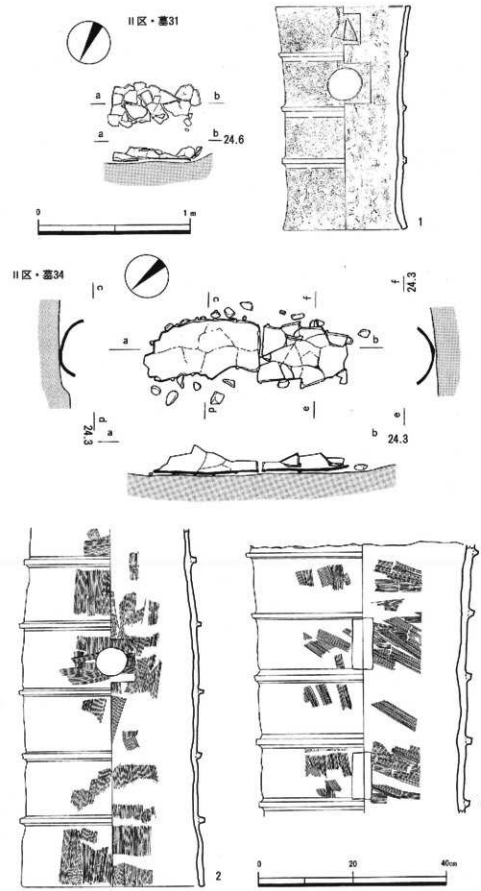




第47図　II区 墓30、構成埴輪

に挿入し、笠部で円筒埴輪の底部を完全に塞いでいる。さらに、衣蓋形埴輪の軸受部が棺身とは別の円筒埴輪の破片で覆われており、極めて丁寧な構造の埴輪棺墓である。副葬品や人骨は出土しなかった。また、掘方底面の高低差も明らかでないので被葬者の頭位は不明である。

52－3は棺身に使用された円筒埴輪である。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間1段である。透孔を穿った後、粘土で一旦塞いだ痕が認められる。内面調整はナナメハケのちユビナデである。底径50.0cmを測り、大型品とみられる。52－2は衣蓋形埴輪軸受部を覆っていた円筒埴輪である。底径46.0cmを測り、52－3とほぼ同じ大きさとみられる。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間に1段施す。52－2・3ともに静止痕は突帯に対してほぼ垂直である。52－1は棺身小口部の閉塞に使用された衣蓋形埴輪である。既述したように大型品で、外面全体に赤色顔料を塗彩している。立飾りを欠き、笠部の飾りも破損している



第48図　II区 墓31・墓34、構成埴輪

が、全体に遺存状況は良好である。

II区・墓30／／埴輪棺墓（第47図）

本埴輪棺墓は上面が削平されており、棺身も上半部が失われていた。掘方の規模は長さ1.55m、幅0.7m、深さは25cmほど遺存していた。平面形は長方形を呈し、主軸は東－西方向である。掘方底面は平坦で、東から西に向かって低くなるが、比高差は最大2cmと僅かである。

円筒埴輪1個体を棺身としている。棺身の両小口部には拳大の円礫が集積されていた。これは小口部閉塞に用いられたと考えられる。また、東小口部の内寄りに円筒埴輪の破片2点が内向きに重ねて置かれていた。この2点の円筒埴輪は棺身に使用された円筒埴輪とは別個体である。副葬品や人骨は出土しなかった。しかし僅かな掘方底面および棺身の傾斜から、被葬者は東頭位と考えられる。この推測が正しければ東小口部に置かれた2点の円筒埴輪片は枕の可能性もあろう。

47－1は棺身に使用された円筒埴輪である。半身以上が破損しているが、全形を捉えることができる。口径61.5cmを測り、口縁部と底部との大きさがほぼ等しく、体部も直線的に立上っている。突帯は9条ある。通有の円筒埴輪と比べ、最上段の突帯と口縁部、最下段の突帯と底部までの間隔が狭い。しかも残存部分には透孔は認められない。こうしたことから埴輪棺墓のための専用埴輪と考えられる。また、外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、ヨコハケは突帯間に2段施す。内面調整はヨコハケもしくはナナメハケのちユビナデである。47－2と47－3は枕の可能性がある、棺の東小口部付近に置かれた円筒埴輪である。直接の接合関係はないが、同一個体とみられる。口径29.4cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、ヨコハケは突帯間に1段施す。内面調整はタテハケのちユビナデである。

II区・墓31／／埴輪棺墓（第48図）

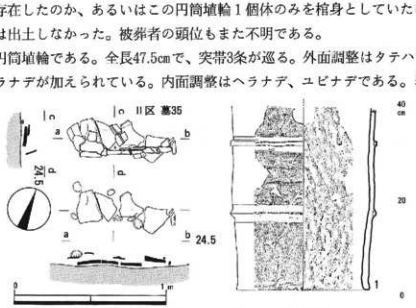
本埴輪棺墓は大きく削平されており、棺身底が若干残っていたにすぎない。よって掘方の規模も正確には捉えられない。底の僅かな立上りを計測すると、現状の深さは7cm程度である。幅は全く不明。したがって平面形も不明である。主軸は東－西方向である。

棺身の円筒埴輪1個体が検出された。掘方底は現存部分の西端から立上り始めており、円筒埴輪の底部がその西端に接していることから、ここが西小口部と考えられる。一方東側については削平が著しいために、別の円筒埴輪が存在したのか、あるいはこの円筒埴輪1個体のみを棺身としていたのかは不明である。副葬品や人骨は出土しなかった。被葬者の頭位もまた不明である。

48－1は棺身に使用された円筒埴輪である。全長47.5cmで、突帯3条が巡る。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、一部にヘラナデが加えられている。内面調整はヘラナデ、ユビナデである。器面に黒斑がみられ、また口縁部下にヘラ描が認められる。

II区・墓34／／埴輪棺墓（第48図）

本埴輪棺墓は著しい削平のため棺身底と掘方の一部が検出されたにすぎない。掘方は検出面から最深部まで深さ約5cmである。平面形は全く不明である。主軸



第49図　II区 墓35、構成埴輪

は北東－南西方向である。底面は東から西に向かって低くなり、両端部の比高差は4㎝である。

現状では棺身は2個体の円筒埴輪で構成されている。北棺身は底部を内向きにして置き、南棺身は口縁部寄りの体部を打ち欠いて北棺身底部に接合している。また、棺身の周辺から拳大の小礫が出土した。棺身を固定するために使用されたものと推測される。副葬品や人骨は出土しなかったが、掘方底の傾斜から被葬者は東頭位の可能性がある。

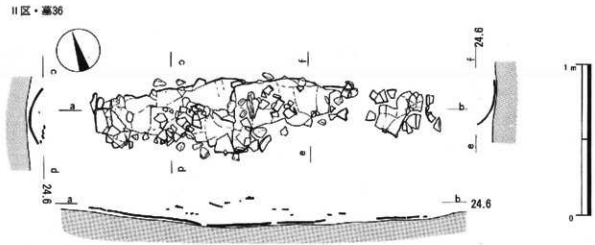
48－2は棺身北側に使用された円筒埴輪である。体部中程以上が緩やかにすぼまる形状を呈し、朝顔形埴輪の体部の可能性がある。外面調整はタテハケのち一部にヨコハケが加えられている。内面調整はタテハケのちユビナデである。器面には黒斑がみられる。48－3は棺身南側に使用された円筒埴輪である。口縁部および底部を欠失しているため全体の形状は不明であるが、現状では口縁部方向に僅かに開き気味である。外面調整はタテハケで、一部にユビナデが加わる。内面調整はナナメハケのちユビナデ。透孔は長方形である。器面に黒斑がみられ、川西宏幸氏のⅡ期に相当する埴輪である。

Ⅱ区・墓35／／埴輪棺墓（第49図）

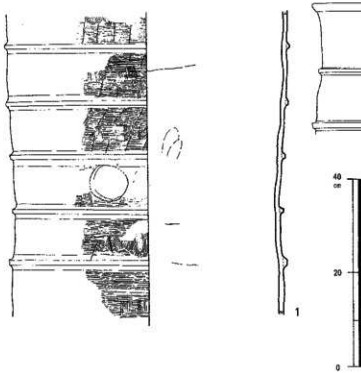
本埴輪棺墓も過半以上が削平され、また両小口部とも欠失している。したがって掘方および棺身とも本来の規模、平面形は不明である。主軸は北東－南西方向である。掘方底面には多少の凹凸は認められるものの、傾斜はほとんどない。

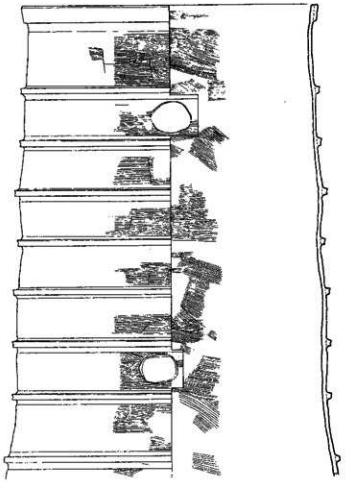
掘方底には長さ10～15㎝、厚さ3～4㎝の板石4枚が東西に並び、その南側辺に沿って縦割りにした円筒埴輪片を組合わせて並べている。埴輪片は接合しても全形を復元しえなかったが、全て同一個体とみられる。おそらく本来は板石の周囲に南側辺と同様に円筒埴輪片を立て並べ、それを囲っていたであろう。通有の埴輪棺墓とは異なり、槨と称するのが適当な構造である。並べられた板石の範囲は長軸60㎝、短軸23㎝ほどであり、棺としては規模が小さい。板石は掘方底の起伏に沿って多少の傾きがあり、東端の1点はやや浮いた状態にあるものの、その他の3点はレベルを揃えて敷かれている。副葬品や人骨は出土しなかった。被葬者の頭位も不明である。

49－1は南側辺に立て並べられていた円筒埴輪である。外面調整は最下段がタテハケのみであり、それより上はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間に1段施す。内面調整はユビナデである。突帯の断面形は最下段が三角形、その上は台形である。なお底部に黒斑がみられる。



第50図　Ⅱ区 墓36





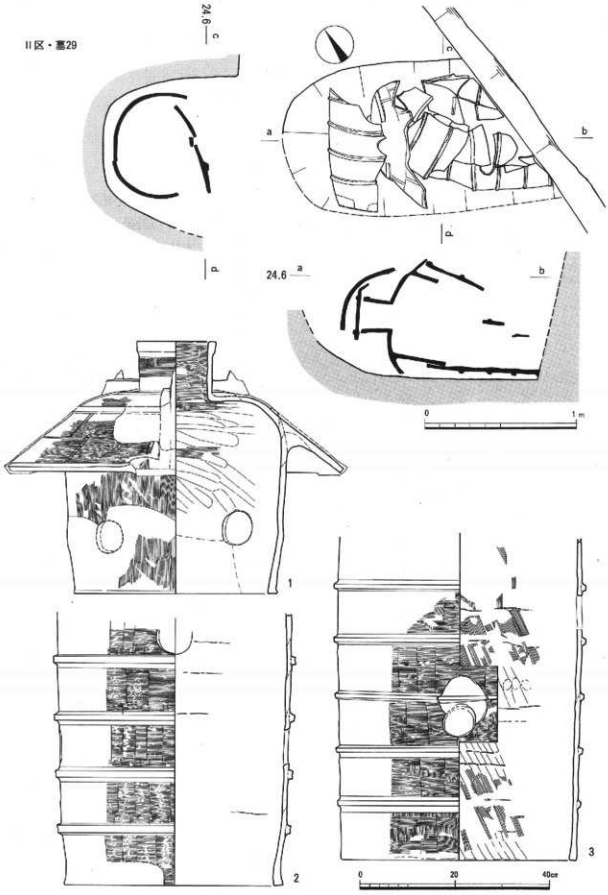
第51図　II区 墓36構成埴輪

II区・墓36／／埴輪棺墓
（第50・51図）

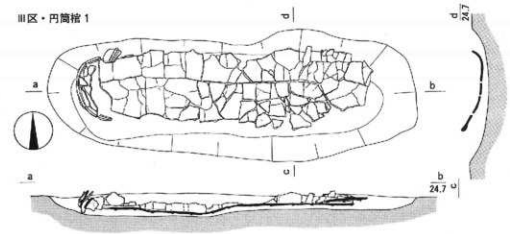
本埴輪棺墓も削平が著しく、掘方底に接した部分の棺身のみが遺存していた。検出面から掘方底までの深さは約10cmで、掘方の規模・平面形は捉えられなかった。主軸は東－西方向である。掘方底面のレベルは西端が東端より僅かに高い。

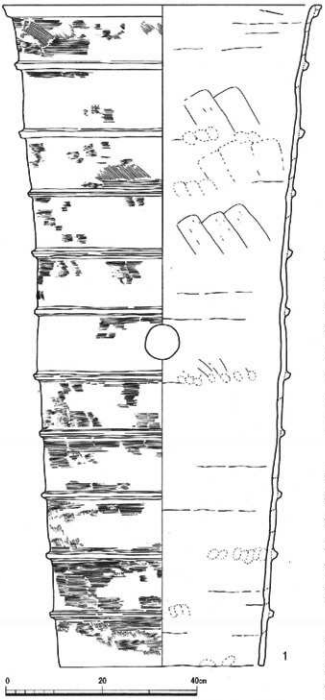
棺身は2個体の円筒埴輪で構成されている。西側の円筒埴輪は口縁部を小口部側に向けて置き、そこに口縁部を差し込むように東側の円筒埴輪を置いている。西側の円筒埴輪は口縁部以下97.6cmが遺存しており、下部は長さ調節のために欠かれたと考えられる。削平のため小口部の構造は不明である。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方底のレベルから被葬者は西頭位であった可能性が考えられる。

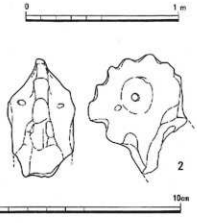
51－2は棺身の西半に使用された円筒埴輪である。既述したように第9段目以下を欠いている。口径62.8cmを測る大型品である。口縁部から底部方向にかけて序々に開いている。外面調整はB種ヨコハケで突帯間に2段施されているとみられる。内面調整はナナメハケのちユビナデである。口縁部は粘土帯貼付けにより肥厚している。51－1・3は棺身の東



第52図　II区 墓29、構成埴輪







第53図　Ⅲ区 円筒棺1、構成埴輪・鵜形埴輪

半に使用された円筒埴輪である。接合しないが同一個体とみられる。口径約60cmを測り、この円筒埴輪も大型品である。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に2段施されている。内面調整はユビナデである。口縁部下の2段目にヘラ描が認められる。

Ⅲ区・円筒棺1／／埴輪棺墓（第53図）

本埴輪棺墓は上面が大きく削平され、棺身も底部分のみが遺存していたにすぎない。掘方の規模は長さ2.36m、最大幅0.87m、深さは最大15cmほどである。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ東－西方向である。掘方底面は東側が高く、東西両端部の比高差は5cm程度である。

棺身は2個体の円筒埴輪で構成されている。棺身の上半は削平のため失われているが構造は捉えられる。西に全長141cmの円筒埴輪を、口縁部を東向きに置き、そこに

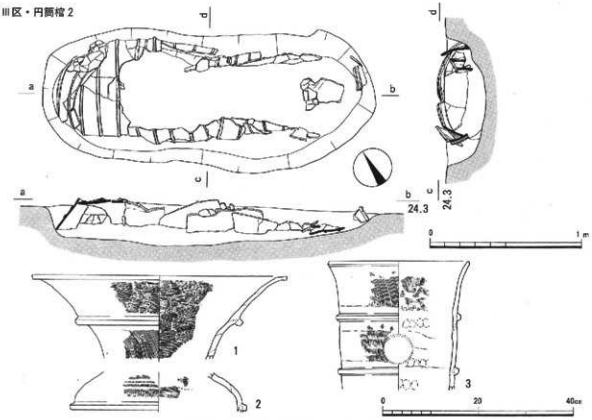
別個体の円筒埴輪の体部を挿入している。西小口部は円筒埴輪の破片を立てて閉塞しているが、東小口部については削平のため閉塞状況は不明である。棺身は現状で175cmを測るが、掘方底の立上りからみて、本来の規模もこれを大きく上回ることはないと考えられる。棺身の東端から0.61mの位置で、棺内に落ち込んだ棺身の破片とともに鶏形埴輪の頭部が棺底から10cmほど浮いて出土した。出土状況から混入とは考え難く、おそらくは棺上に副葬されたものであろう。他に副葬品はみられず、人骨も出土しなかった。掘方底および棺身が西側に低いこと、掘方幅は東小口部側が広いことから、被葬者は東頭位であったとみられる。

53－1は棺身の主体をなした円筒埴輪である。全形を捉えることができ、口径が67.0cm、底径42.8cmを測る。口縁部は粘土帯貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケを突帯間に2段施す。内面調整はヘラナデ、ユビナデ・オサエである。53－2は棺内に落ち込んでいた鶏形埴輪の頭部である。全体が丁寧にユビナデされている。また、粘土をつまみ出して鶏冠と嘴を作り、目と鼻孔は刺突によって表現している。

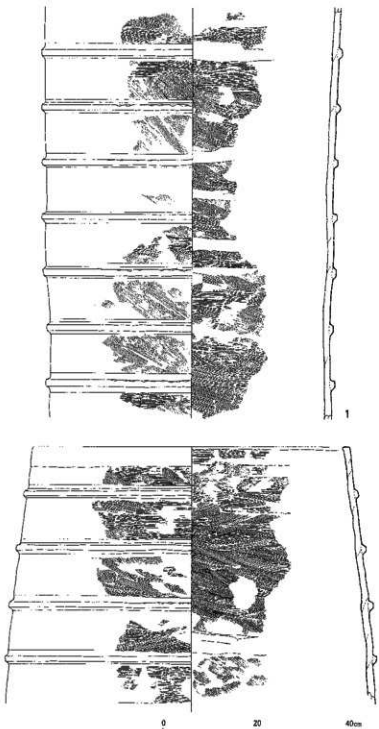
Ⅲ区・円筒棺2／／埴輪棺墓（第54・55図）

本埴輪棺墓は上面の一部が削平されているが遺存状態は比較的よい。掘方の規模は長さ2.15m、最大幅0.90mを測り、深さは30cm程度である。平面はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸は北西―南東方向である。掘方底面は中央が窪むが両小口部のレベル差はほとんどない。

この円筒棺2は通有の埴輪棺墓と異なり、被葬者を円筒埴輪の破片で囲っており、�槨と称するのが適当な構造である。まず掘方の北西半には口縁部を欠いた円筒埴輪を覆せて据えている。この円筒埴輪は全周の3分の1ほどの破片である。一方、南東半には別個体の縦割りにした円筒埴輪の破片を南北両側辺に2枚づつ重複させながら立て並べている。この部分は削平のため上部を失っているが、4枚の埴輪片の接合関係からみると同一個体を割って別々に並べたことは明らかである。各片とも口縁



第54図　Ⅲ区 円筒棺2、構成埴輪（1）



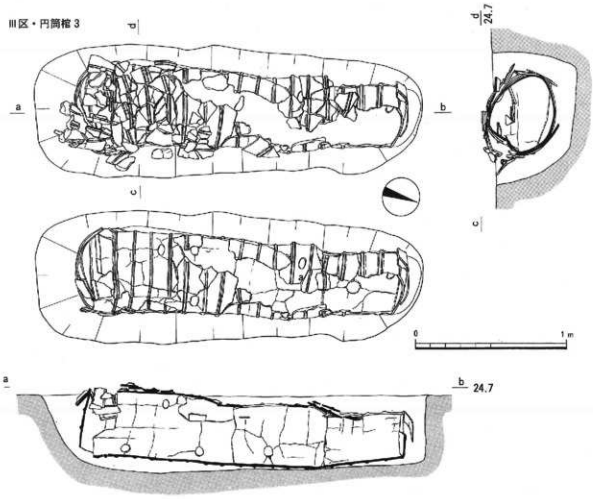
第55図　Ⅲ区 円筒棺２構成埴輪（２）

部を北西側に向けており、北西半のようにひとつの破片で被葬者を覆う構造ではない。しかも掘方内に転落した埴輪片の少なさからすると、被葬者全体を覆うほどの大きさはなかったとみられる。

北西小口部は北西半の棺身として使用された円筒埴輪の一部破片を立てて閉塞されており、棺身との隙間は朝顔形埴輪の口縁部破片で塞がれている。この朝顔形埴輪片は棺身の接合部分を塞ぐためにも使用されている。一方、南東小口部については削平のために詳細は不明であるが、端部近くで円筒埴輪片が出土しており、あるいは南東小口部を閉塞していた埴輪片が倒れたものかも知れない。

副葬品や人骨は出土しなかった。なお北西半の方が幅が広く、しかも造りが丁寧であることから、被葬者は北西頭位であったと考えられる。

55－１は棺身北西半に使用された円筒埴輪である。口縁部と底部を欠き、残存高は86.5cmを測る。外面調整はB種ヨコハケが施されるが、ナナメハケが顕著に残っている。ヨコハケは突帯間に２段施す。内面調整はヨコハケのち部分的にユビナデを施す。55－２は棺身南東半に使用された円筒埴輪である。口径65.5cmを測る。外面調整はタテハケのちA種ヨコハケ、内面調整はヨコハケのち部分的にユビナデを施す。54－１と54－２は同一個体とみられる朝顔形埴輪である。北西小口部および棺身間の隙間を閉塞するために使用されたものである。54－２は器面に黒斑を有している。54－３は南東小口部を閉塞していた可能性がある円筒埴輪である。口径28.7cmの小型品である。外面調整は１次タテハケのみ、内面調整はヨコハケのちユビナデ・オサエである。



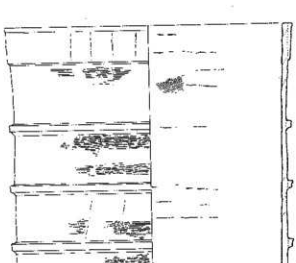
第56図　III区 円筒棺３

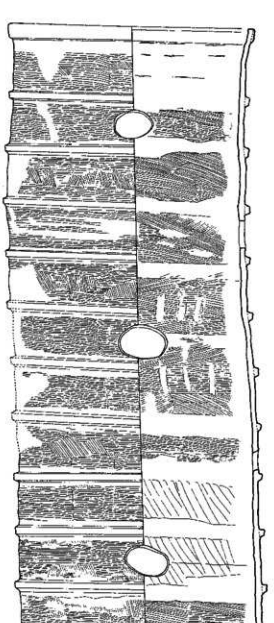
III区・円筒棺３／／埴輪棺墓（第56・57図）

本埴輪棺墓は上面の一部が削平により欠失しているが、比較的遺存状態は良好である。掘方の規模は長さ2.5m、最大幅0.87m、深さは最大50cmを測る。平面は隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ北－南方向である。掘方底面は北から南に向かって低くなり、両端部の比高差は最大８cmを測るが、棺身は逆に南小口部の方が北小口部に比べ９cm高くなっている。

棺身は２個体の円筒埴輪で構成されている。全長151.8cmの完形の円筒埴輪が口縁部を南小口部として据えられている。そして上部を欠いた円筒埴輪の底部を先の円筒埴輪の底部に合わせて棺身としている。棺身の長さは2.0mを測る。南小口部および北小口部は同一個体の円筒埴輪を用いて閉塞しており、前者は口縁部、後者は体部の破片である。さらにこの円筒埴輪片で棺身の南端や透孔部分を覆っている。副葬品や人骨は出土しなかったが、棺身の傾斜、掘方の広狭差および棺身上被覆の状況から、被葬者は南頭位であったと推定される。

57－２は南側の棺身として使用された円筒埴輪である。口径51.5cm、底径44.3cmを測り、突帯が12条巡る大型品である。高さは151.8cmを測る。口縁部は粘土帯貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間により１段の場合と２段の場合が認められる。内面調整はヨコハケのちユビナデである。57－１は北・南小口部の閉塞などに使用された円筒埴輪である。口縁部以下第４段目までしか遺存していないが、口径60.5cmを測る大型品とみられる。口縁部





第57図　Ⅲ区 円筒棺３構成埴輪

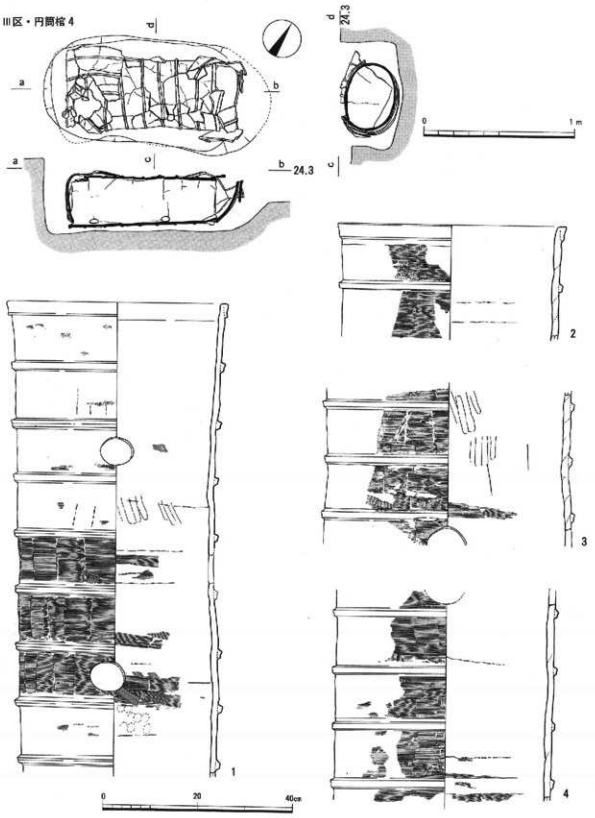
は幅広の粘土帯貼付けにより肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間に１段施す。内面調整はヨコハケのちユビナデである。

Ⅲ区・円筒棺４／／埴輪棺墓（第58図）

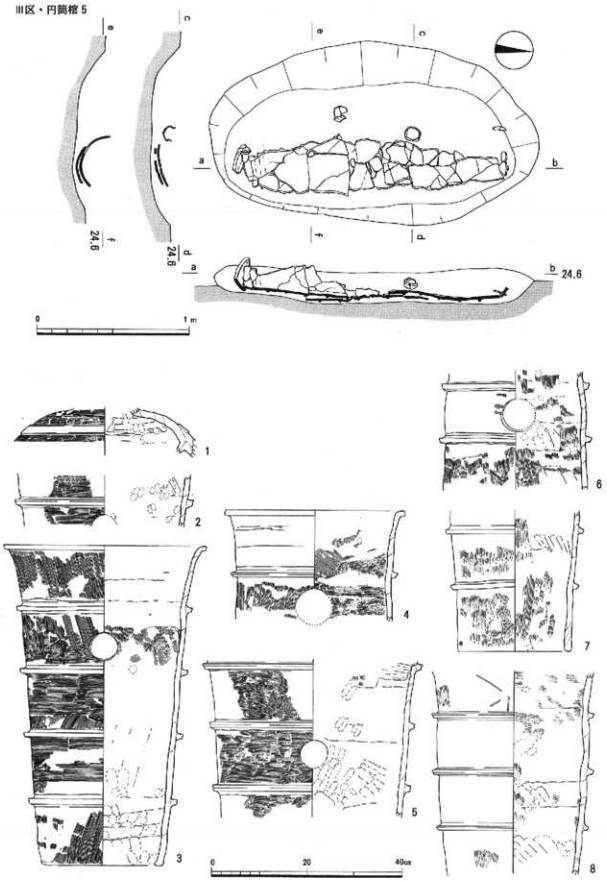
本埴輪棺墓は掘方の東小口部が一部削れているほかは遺存状況は良好である。掘方の規模は、推定長1.45m、最大幅0.68m、深さ0.5mを測る。平面は隅丸長方形を呈すると考えられ、主軸は北東－南西方向である。底面は南西から北東に向かって僅かに高くなり、両端部での比高差は３cm程度である。

棺身として底部を欠いた円筒埴輪１個体が口縁部を北東に向けて置かれている。北東端部が南西端部より５cmほど高い。両小口部はそれぞれ別個体の円筒埴輪片で閉塞されているが、北東小口部からは南西小口部閉塞に用いた円筒埴輪と同一個体の破片も出土しており、これは隙間を塞ぐために使用されたとみられる。また棺身の透孔にも埴輪片が置かれていた。なお棺身の内法は約90cm、閉塞部を含めた最大内法でも111cmしかなく小児棺の可能性がある。副葬品や人骨は出土しなかったが、掘方底面および棺身の傾斜から被葬者は北東頭位と考えられる。

58－１は棺身に使用された円筒埴輪である。口縁部以下第９段目まで残存し、現存高は105cmを測る。口縁部は粘土帯貼付けによって肥厚している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間



第58図　III区 円筒棺4、構成埴輪



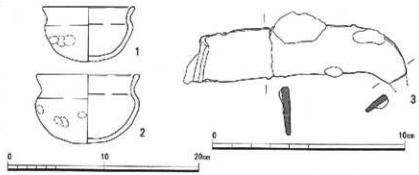
第59図　III区 円筒棺 5、構成埴輪

に1段施す。内面調整はヨコハケのちユビナデである。58－2・4は南西小口部と北東小口部付近から出土した円筒埴輪である。口径は47.3cmを測り、58－1とほぼ同様の大きさとみられる。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に1段もしくは2段施す。内面調整はヨコハケのちユビナデである。58－3は北東小口部の閉塞に使用された円筒埴輪である。口縁部および底部を欠く体部片であるが、体部径は58－1・2・4より大きい。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に2段施す。内面調整はヨコハケのちユビナデである。

Ⅲ区・円筒棺5／／埴輪棺墓（第59・60図）

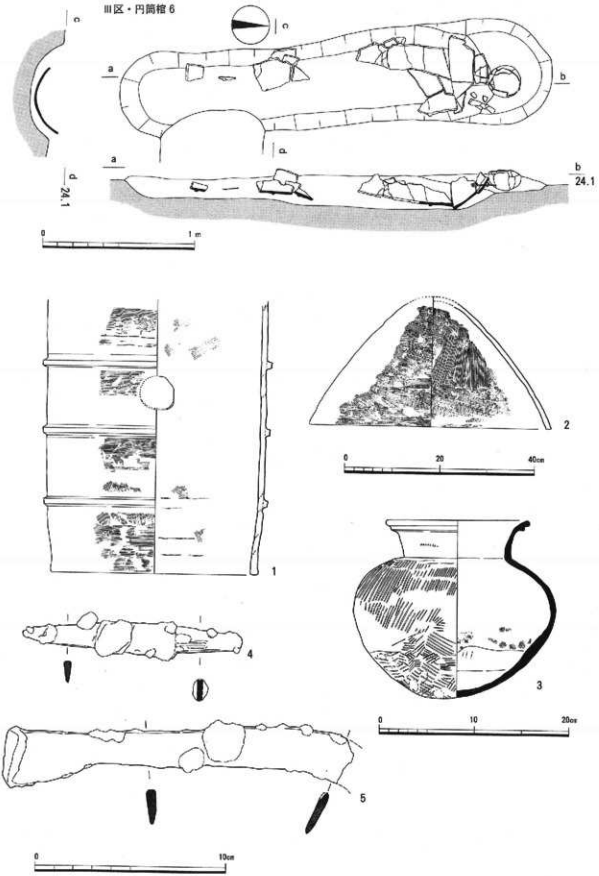
本埴輪棺墓は上面が削平されている。掘方の規模は長さ2.1m、最大幅1.18m、深さは最大23cmを測る。平面はやや不整な長円形を呈し、主軸はほぼ北－南方向である。掘方底面は北端部から南端部に向かって高くなり、比高差は約6cmである。

棺身は掘方の東半に寄せて据えられている。棺身は口縁部を向かい合わせにした2個体の円筒埴輪からなるが、両者は接しておらず約25cmの隙間があいている。掘方底面にはその部分を中心に4個体以上の円筒埴輪片が敷き並べられている。これらの破片は棺身となる円筒埴輪が置かれる前に設置されたものである。棺身として用意された2個体の円筒埴輪では被葬者を覆うことができず、棺身長の調整のためにとられた方法であると考えられる。棺身全体の内法は165cmを測る。南小口部は衣蓋形埴輪の笠部を立てて閉塞している。一方北小口部は縦割りにした円筒埴輪片で閉塞している。さらに棺身の透孔も円筒埴輪片で塞がれていたと推測される。また棺身が掘方の東側に寄せられているために西側には空間が生じることになる。ここから土師器坩2点と鉄鎌1点が出土した。土師器坩2点は掘方底より僅かに浮いていたが、鉄鎌は底に接していた。これらは副葬品と考えられるが、副葬場所の空間の広さからするとさらに有機質の副葬品があった可能性もある。なお棺内から人骨は出土しなかった。掘方底および棺身の傾斜から被葬者は南頭位であったとみられる。



第60図　Ⅲ区 円筒棺5出土遺物

59－3は棺身南半に使用された円筒埴輪である。口縁部から底部まで捉えることができ、全長は67.6cmを測る。底部から口縁部に向かって直線的に開き、口縁部端は外反する。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケを突帯間に2段施すが、最下段だけはタテハケのみである。内面調整はヨコハケ、ユビナデ・オサエである。59－7・8は棺身北半に使用された円筒埴輪である。接合できなかったが同一個体と考えられる。遺存する突帯は5条を数え、59－3より大きくなりそうである。外面調整はタテハケのみだが、59－8にタテハケとともにナデも認められる。内面調整はタテハケのちユビナデである。また59－8にはヘラ描が認められる。59－2・4～6は棺身の隙間下に敷き並べられた円筒埴輪である。棺身に使用された2個体の埴輪と同時期か若干遡るとみられる。59－1は南小口部閉塞に使用された衣蓋形埴輪である。笠端部、軸受部および基部を欠いている。60－1・2は副葬品の土師器坩である。大きさは異なるが、器形は類似している。60－3は直背の曲刃の鎌で、基部に折返しをもつ。折返しの角度からすると着柄は緩い鈍角をなす。



第61図　III区 円筒棺 6、構成埴輪・出土遺物

Ⅲ区・円筒棺６／／埴輪棺墓（第61図）

本埴輪棺墓も上面が大きく削平されている。掘方の規模は長さ2.83m、最大幅0.7mを測り、深さは最大22cmが遺存している。平面形は北側がやや広い長円形を呈し、主軸はほぼ北－南方向である。掘方底面には多少の起伏がある。また北から南に向かって高くなっており、両端部の比高差は８cm程度である。掘方の北端部分が長さ30cmにわたって1段高く掘り残されており、後述するようにこの部分に副葬品が置かれていた。

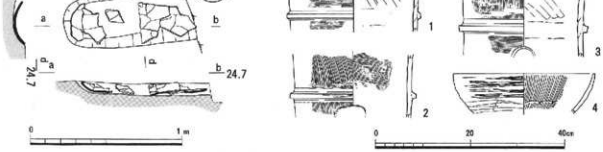
削平のため棺身の遺存状況は悪く、大半を欠失している。南小口部も完全に失われており、構造は不明である。遺存している棺身は同一個体で底部を北小口部としている。そして埴輪棺墓の専用品とみられる笠形埴輪を内向きに立てて北小口部を閉塞している。なお棺身の透孔は埴輪片で塞がれている。掘方北端部のテラス部分には須恵器甕が据えられており、その東南側では鉄鎌１点が検出された。鉄鎌は２次的な移動があったとみられ、本来は甕と同じくテラス部分に副葬されていたと考えられる。また掘方南端部から0.65mの位置で刀子１点が検出された。切っ先を南に向けている。本来棺内に副葬されたものか、棺外にあったものかは不明である。人骨は出土しなかったが、北端部に副葬品が置かれていることから北頭位であったと考えられる。

61－１は棺身に使用された円筒埴輪である。底部以上４段が遺存している。外面調整は1次タテハケのちＢ種ヨコハケを突帯間に１段施す。61－２は北小口部の閉塞に使用された笠形埴輪である。口径50.3cm、現高26.4cmを測る。61－３は掘方北端部に副葬された須恵器甕である。口縁部直下に１穀の突線を巡らす。口縁部端は丸味がある。体部外面には平行タタキメが残るが、内面は当具痕を丁寧に擦り消している。ＴＫ216型式ないしはＯＮ46型式に比定できよう。61－５は鉄鎌である。先端を欠失しているが、現長18.5cmを測り、薙鎌といえよう。61－４は掘方の南寄りで出土した刀子である。両関で木柄の痕跡が僅かに残る。全長11.7cm、茎部長3.6cm、茎部幅1.0cmを測る。

Ⅲ区・円筒棺７／／埴輪棺墓（第62図）

本埴輪棺墓は上面を削平されている上に、北側を調査区の側溝で壊されているため、正確な規模は不明である。しかし側溝の北側断面に埴輪棺墓の痕跡が認められないことから、掘方長は1.3m以下と考えられる。幅は0.43mであり、深さは10cm程度遺存している。平面形は楕円形を呈すると考えられ、主軸は北－南方向である。検出した範囲では掘方底面はほぼ平坦、水平であった。

棺身の状況も不明瞭であるが、３個体の円筒埴輪が出土している。南小口部付近で１個体の破片が、その北で口縁部を南に向けた１個体の破片があり、その下に一部重なってもう１個体があった。さらにその北側に別の個体が使われていたかどうかは不明である。南小口部は土師器鉢で閉塞されている。



第62図　Ⅲ区 円筒棺７、構成埴輪・出土遺物

副葬品や人骨は出土しなかった。なお被葬者の頭位は不明である。規模の点から改葬もしくは小児埋葬の可能性がある。

62－1は北側棺身として使用された円筒埴輪である。口縁部以下2段まで遺存している。口縁部は緩やかに外反する。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に1段施す。内面調整はヨコハケのちユビナデである。62－3は62－1の下に重なっていた朝顔形埴輪である。肩部以下3段が遺存していた。外面調整はタテハケのちユビナデ、内面調整にはユビナデがみられる。62－2は南側棺身に使用された円筒埴輪である。外面調整はタテハケのちヨコハケ、内面調整はヨコハケのちユビナデである。62－4は南小口部の閉塞に使用された土師器の鉢である。外面上半にミガキ、下半にヘラケズリが施され、内面には放射状暗文が施されている。

7世紀前葉に比定されよう。

Ⅲ区・円筒棺8／／埴輪棺墓（第63図）

本埴輪棺墓は上面および東側が削平されているため全容は捉えられなかった。掘方の規模は現存長0.95m、幅0.67m、深さは最大12cmを測る。掘方底はほぼ水平

第63図　Ⅲ区 円筒棺8、構成埴輪

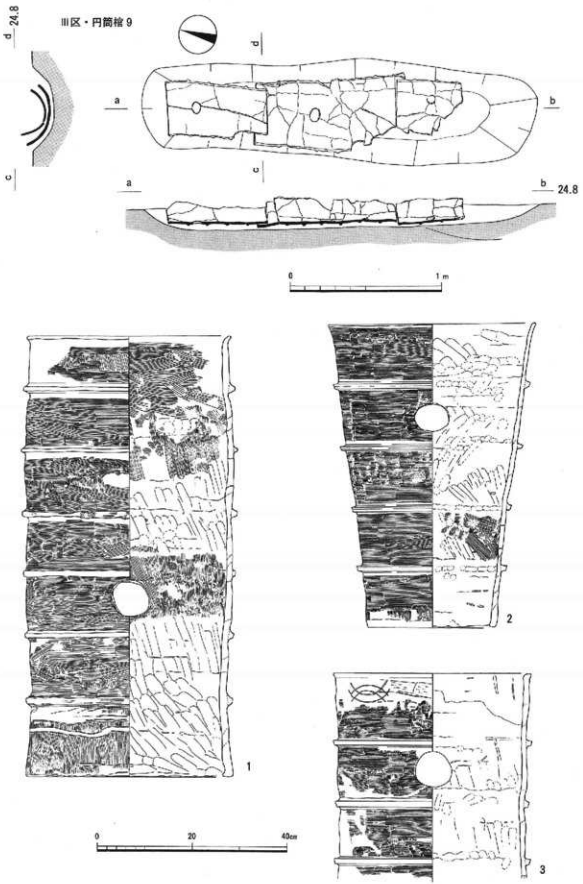
である。平面形は不明だが楕円形と推測され、主軸は東－西方向である。

棺身には頸部以上を打ち欠いた朝顔形埴輪が使用されている。肩部を西小口部に向けている。西小口部には円筒埴輪片を立てて閉塞としている。削平のため棺身東半および東小口部の閉塞については不明である。上述したように掘方底は水平であるが、棺身下に直径10cmほどの礫が置かれ、棺身全体が東側に高くなるよう調整されている。棺身の傾斜から、被葬者は東頭位であったと考えられる。なお副葬品や人骨は出土しなかった。

63－1は棺身に使用された朝顔形埴輪である。肩部以下5段が遺存している。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケで、突帯間に2段施される。内面調整はヨコハケのちユビナデである。外面にはヘラ描が認められる。

Ⅲ区・円筒棺9／／埴輪棺墓（第64図）

本埴輪棺墓は上面および南小口部付近が削平されているが、全容をほぼ捉えることができる。掘方

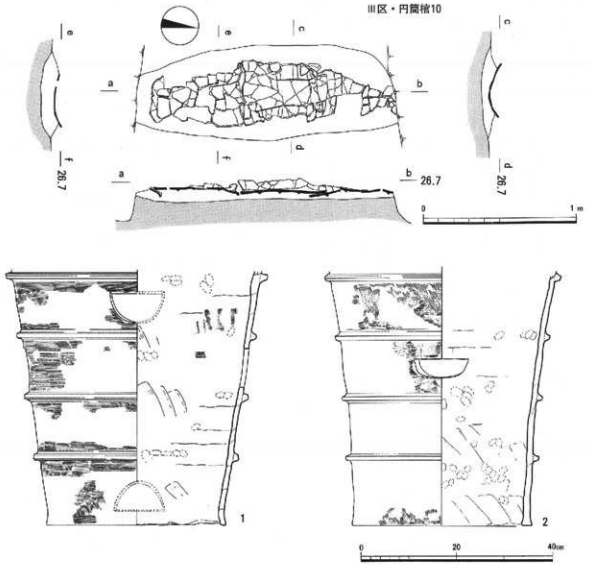


第64図　Ⅲ区 円筒棺 9、構成埴輪

の規模は長さ2.55m、最大幅0.68m、深さは最大18cmを測る。平面は隅丸長方形を呈し、南側が若干広くなっている。主軸はほぼ北－南方向である。掘方底面は北から南に向かって高くなっており、両端部の比高差は6cm程度である。

棺身は3個体の円筒埴輪で構成されている。北側と中央の円筒埴輪は完形であるが、南側の円筒埴輪は中程以下を欠いており、北・南側埴輪は口縁部を北に、中央の埴輪は口縁部を南に向けている。また北側の埴輪は底部を中央の埴輪の底部に挿入しているが、南側の埴輪と中央のそれとは合口にされている。南小口部は削平が及んでいるため構造は判然としないが、北小口部でも何らの構造もみられないことから、埴輪や礫を用いた閉塞はなかったと考えられる。副葬品や人骨は出土しなかった。掘方の平面形や底の傾斜に加え、北側棺身に使用された円筒埴輪の底径が26.3cmしかないことから、被葬者は南頭位であったと推測される。

64－1は中央棺身に使用された円筒埴輪である。器高は92.4mを測る。突帯は6条を数える。口縁部は僅かに外反する。外面調整はタテハケのちB種ヨコハケが突帯間に1段施される。内面調整はタテ・ヨコハケのちユビナデ・オサエである。64－3は南側棺身に使用された円筒埴輪である。口縁部以下4段目まで遺存する。外面調整はタテハケのち突帯間1段のB種ヨコハケ、内面調整はユビナデ・



第65図　III区 円筒棺10、構成埴輪